
かけがえのない存在だから

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かけがえのない存在だから

【Nコード】

N3967I

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

「立て続けにショックなことが起きた。こくる前から失恋。それも、そのこは俺の妹だった。父さんと俺は、血がつながってないのかよ？ ああ、もうどうなってるんだよ？」

榎本聖。16歳。青春真っ只中。ショックなことが起きて、人生最大のピンチ（？）でも、そのショックな出来事から、たくさんの大事なことに、気がついていくんです・・・。

「君は天使」のくるみと爽太の愛息子、聖の物語です。

「今 このときを 愛してる」の瑞希と、圭介からの愛の軌跡。楽

しんでくださいませ。

登場人物の紹介

登場人物の紹介をしたいと思います。

まず、この小説の主人公は、榎本聖^{えのもと ひじり} 高校2年生 男の子です
ちなみに、聖という名前の由来は、12月24日、クリスマスイブ
に生まれたからです。

聖の父・・・榎本爽太^{えのもと そうつた} 39歳
聖の母・・・榎本くるみ^{えのもと} 46歳

（＊この二人の物語は、「君は天使」をもらってください。）

聖の妹・・・榎本杏樹^{えのもと あんじゅ} 中学1年生

聖の祖父・・・榎本圭介^{えのもと けいすけ}
聖の祖母・・・榎本瑞希^{えのもと みずき}

（＊この二人の物語は、「今 このときを 愛してる」と「愛する君へ」をもらってください。）

聖のおば・・・春香^{はるか} パテシエをしています
春香の旦那さん・・・榎^{かい} サーフインショップを経営

聖の友達・・・植田基樹^{うえだ もとき} 高校2年生 聖と同じクラスです
もう一人の友達・・・杉本葉一^{すぎもと よういち} 高校2年生 聖、基樹とは高1の
ときの同級生で、聖の中学からの親友でもあります

聖、基樹、葉一が夏に出逢った女の子たち

・ ・ ・ 萩原菜摘 はぎわら なつみ 高校1年生

・ ・ ・ 椎野桃子 しいの ももこ 高校1年生

・ ・ ・ 橘川蘭 きっかわ らん 高校1年生

この3人は、同級生で、中学からの仲良し3人組です

くるみの元同僚・ ・ ・ 萩原稔 はぎわらみのる と 萩原梨香 はぎわらりか 菜摘の両親でもあります

聖の家は、江ノ島にあり、カフェをしています
カフェの名前は、「れいんどろっぷす」

この辺のことをふまえて、ストーリーをお読みくださいませ。

序章　く聖へく

俺は、人生で初めて、ショックを受けていた。

それも、いきなり、でかいショックを立ち続けにだ。

初恋と言ってもいい。そりゃ、小学校の頃も、好きだつて子もいたし、中学で告白されて付き合った子もいた。

でも、会ってときどきして、夜も眠れなくなって、話もろくすっぽできないほど意識して…、そんな子は初めてだった。

「聖、それが恋つてやつだよ」

父さんは、にやつて笑つて教えてくれた。

「俺も、母さんに会つてしばらくして、そんなふうになったときがあるよ。恋煩いつてやつ。あはは」

父さんに笑われた。

でも、思いを告げることは、結局出来なかった。

彼女は俺より、1歳下で、俺が高校2年の夏、友達と海の家でバイトをして、そこで出会った。

彼女は友達と3人で海に来てて、俺も友達と3人で、バイトをしていた。なんとなく話をして、なんとなく6人で、ご飯を食べに行くようになり、江ノ島でやる花火大会にも誘った。彼女たちは、浴衣を着てやつてきた。

夏が終わっても、6人で会うようになった。

そして、秋、彼女は俺の母さんの店、「れいんどろっぷす」に遊びに来た。

母さんに彼女を紹介した。俺は、彼女が一人で来ていたから、有頂天になった。もしかすると、俺のことを好きなかもしれないとか、このまんま、付き合うようになるのかもとか…。

だけど、母さんの表情が凍りついたのを、見てしまったんだ。

「母さん、紹介するよ。萩原菜摘さん」

「萩原…？」

一瞬だった。でも、その顔を俺は、目撃しちゃったんだ。

れいんどろつぷすで、菜摘ちゃんは紅茶を飲んで、ケーキを食べた。その横に母さんは座って、すごく穏やかに、親しげに話をしていた。でも、瞳の奥が笑ってなかった。

俺、そういうの見抜くの得意だ。特に母さんの表情。いつも優しく、穏やかだから、そんな表情はあまり見せないからわかるんだ。何かを隠している時だって、すぐにわかる。

「菜摘さんは、聖と同じ年？」

「いえ、一つ下です」

「そう…。このへんに住んでるの？」

「いえ、ちょっと遠いんですけど。でも、江ノ島が好きで…」

「どのへん？」

「新百合ヶ丘です。小田急で来れるから、そんなには大変じゃないんですけど」

「そう、そうなんだ…。あ、ご兄弟は？」

「いません」

「そう…」

にこにこしながら、母さんは紅茶のおかわりを持ってきた。

「あ、すみません。そんな悪いです」

「いいの、いいの。ゆっくりしてって」

「はい」

菜摘ちゃんは、紅茶を飲み、ケーキを食べ嬉しそうだった。

「あの、菜摘ちゃんのご両親は…」

「はい？」

「若いの？おいくつくらい？」

「父と母ですか？えっと、二人とも46歳だったと思いますけど」

「あら、奇遇。私もよ。そう…。あ、いえね、最近ほら、若いお母さんとか多いから、そうなのかなって…」

「46歳なんですか？」

「うん、そう…。新百合ヶ丘か…。私もね20代の頃、小田急線沿いに住んで、新宿まで、仕事で通ってたの」

「あ、父も新宿で働いてます。会社が新宿にあって」

「そう…。知り合いだったりして！萩原なにさん？お父さんの名前」
「萩原稔です。母は、萩原梨香…」

「……」

母さんの目が凍りついた。一瞬、止まってしまっていた。

「あの？」

それに菜摘ちゃんも、気づいていた。

「どうしたの？母さん…。知ってる人とか？」

「え？」

母さんは俺の顔を見て、また黙ってしまった。

「あ…。お、驚きね。偶然ってあるのね。びっくりしちゃった」

「知ってるんですか？母と父を」

「うん。一緒に会社で働いてた」

「ええ？！本当に？父や母に聞けばわかりますか？」

「うん。多分ね。お二人とも元気？」

「はい。元気です」

「そう、それは良かった。もう何年も会ってないから。結婚したのは、葉書で知らせてくれてたけど」

「そうだったんですか？えっと、榎本…何さんですか？お名前…」
「私？榎本くるみ。旧姓は小野寺」

「家に帰ったら聞いてみます！」

「……。そう……。稔と梨香の子なんだ。そっか。なんだか、梨香に雰囲気似てる……。そういえば、声も似てる……」

「そうなんです。だんだん母と声が似てきたみたいで、電話だと間違われるんです」

「そう……」

母さんの顔が、なんとなく暗くて、気になった。

「じゃ、俺、菜摘ちゃん駅まで送ってくる」

「うん。じゃ、ご両親によろしくね」

俺は有頂天だったのに、母さんのあの顔が気になり、気持ちが沈んだまま菜摘ちゃんを駅まで送った。

「じゃね。今日はありがとう。聖君」

「うん……。また来てよ」

「うん。今度はみんなで来るね。今日もね、桃子来るはずだったの。でも、いきなり用事が入っちゃったって」

「あ、そうだったんだ」

「蘭はね……。ああ、言っているのかな」

「え？」

「デートだって！知ってた？基樹君とだよ」

「え？知らない！そうなの？！」

「やっぱり知らなかった？あ、ばらしちゃって悪かったかな。なんか、私は怪しいなって前から思ってたんだ」

「そ、そうなんだ」

「シヨック？」

「え？」

「蘭と、仲良かったでしょ？」

「俺？いや、話はしやすかったけど、でも別に」

「ほんと？」

「うん」

「それは良かった」

「え？」

「なんだか、菜摘ちゃんは、意味深な笑いをした。」

「桃子が…、気にしてたから」

「何を？」

「聖君が、蘭を好きなのかって」

「え?!」

「今度は、桃子一人で来るかも…」

「え?!」

「って、多分無理かな…。あの子、聖君と話すの、無理そうだし…」

俺は、愕然とした。それって何？桃子ちゃんがもしかして、俺のこと好きってこと？そうしたら、菜摘ちゃんは…?!

「じゃ！またみんなで来るよ。あ…。その時に私が今、話したことは内緒にしててね。じゃあね！」

菜摘ちゃんはそう言っと、改札口に入り、そのまま電車で飛び乗った。

ショックだ…。これ、こくる前から、ふられたってことか…。
待てよ…。まだ、決まってるかい。

って、待てよ…。それよりも、母さんのあの暗い顔、気になる。

俺は、全速力で家に帰った。そして店を開けると、

「母さん！」

と、思い切り母さんと呼ばうとしたけど、お客さんがいて、呼ぶのをストップした。

そして、そのまんま、家の中には行って、そのまんま、2階へ上がった。

夜になって、お店を閉めてから、俺は母さんに聞くことにした。
リビングには、父さんも妹の杏樹もいた。

「あのさ、今日さ……」

母さんに向かって話そうとした時に、母さんの方が父さんに話をし出した。

「今日ね、聖が女の子を店に連れてきたの」

「え？あ！なんだ〜！この前まで悩んでた子？お前の好きな子？」

父さんはめちゃくちゃ、明るい顔で俺に聞いてきた。

「そうだけど……。でも……」

俺が話をしようとするのとまた、母さんがさえぎって、

「萩原さんっていう子……」

「萩原？」

父さんの顔も、少し固まった。

「そう……。稔と梨香の子……。すごい偶然よね……」

「え?!」

父さんは思い切り、驚いていた。

「父さんも知ってるの？その……菜摘ちゃんの両親」

「あ……。ああ。前に会ったことあって……」

「そうなんだ」

「お前の、好きな子って……。その菜摘ちゃんか？」

「……うん。でも」

「爽太……。話、あるんだけど……」

「え？ああ、うん」

母さんも、父さんもなんか変だ。

「悪い、その話はまたな……。聖」

「……」

母さんと父さんは、2階に上がっていった。なんだろう。あんなに深刻なムードの二人を見るのは、生まれて初めてかもしれない。

テレビを観ながらリビングで、俺はメールをしてた。杏樹は自分の部屋に行つて、友達と長電話をしているようだった。

俺の恋の相談はもっぱら、葉一って友達。バイトを一緒にした3人の一人。中学からの親友だ。

蘭ちゃんと基樹ができてたのを知ってたかとか、菜摘ちゃん、俺のことなんとも思つてないみたいだとか、そんなことを葉一にメールした。

葉一からは、蘭ちゃんと基樹のことはなんとなく気づいてたつて返信が来た。それと、菜摘ちゃんのこと、まだ、わかんないだろつて書いてあつた。

そこで、父さんと母さんが、2階から下りて来た。

「話があるのよ…」

すぐく二人して、まじめな顔をしていた。

「え？何？」

ただごとじゃないつて、その時すぐにわかつた。

「聖…」

父さんの顔つきは、母さんよりもつと、深刻になっていた。めっちゃまじめな話なんだ。でも、いったい何…？

想像すらできない…。こういう時に浮かぶのは、

「お前は実は、俺たちの子じゃないんだよ」とか、

「実はお前と、菜摘ちゃんは兄弟で」

とか、そんなメロドラマにでも出てきそうな、陳腐な想像くらい…。

「実は…。聖は、父さんと母さんの間に出来た子じゃ、ないんだ…」
「……は？」

それは、今俺が頭の中でしてた陳腐な想像劇…。思いきり昼にやつてるような、メロドラマみたいなの…。

「俺、養子…？」

「いや…。母さんの子だけ…」

「？」

「母さんと、稔さんの間に出来た子なんだよ」

父さんは、俺の顔を見つめたまま、そう言った。

母さんはずっと、黙って俺と父さんを見ていた。

「それ、どういうこと…。浮気…。とか？」

「違うの、聖…。お母さんがお父さんに出会う前にね、稔さんと付き合ってたの。お腹に子供がいることも知らずに別れて、それからお父さんに出会ったの」

「えっと…。なんか理解しにくいんだけど…。え？どういうこと？」

俺の頭の中は、真っ白だった。

「俺は、くるみのお腹の子が俺の子だろうと、誰の子だろうと関係なかった。それでも、くるみを愛してたし、だからくるみの子も愛してたし…。それで、結婚をした。お腹の子の父親になった」

「ちょ…。待つて。でも、俺のほんとの親は、菜摘ちゃんの父親ってことでしょ？」

「…そうだ」

「じゃ、父さんは、俺のほんとの親じゃないってことでしょ？」

「……。親だよ。俺はずっと、そう思ってきたよ」

「でも、ほんとの親は、菜摘ちゃんの父親で、俺は菜摘ちゃんと兄妹なんだろ?!」

「そうだ…」

「……。んだよ、それ…」

俺は、何が何だかわからなかったけど、無性に腹が立った。

ショックだ。でもそんなの、通り越してた。

「なんだよ？それ？なんで、ずっと隠してたんだよ！なんで、ずっと父親づらしてたんだよ?!」

俺は、思い切りリビングのドアを閉め、それから、玄関を出て思い切り走り出した。

「なんなんだよ。なんでずっと隠してたんだよ。なんで、俺、菜摘ちゃんと兄妹なんだよ」

頭の中がぐるぐるだった。

「なんだよ、この展開。ばつかみて……。まるで3流メロドラマ。今、こんなドラマやってもないし、流行んないよ」

あほすぎて、涙が出た。

「なんなんだよ……」

海の前で、思い切り叫んだ。

「ばっかやろ～～～～！！！！！！！！！！」

隣でいちやついてたカップルが、驚いていた。

はあ…、はあ…。思い切り、走ったから息が切れて、俺はそのまま、砂浜に大の字になって寝転んだ。

「はあ…。ばつかみてえ…。俺。何、不幸の主人公ぶってんの？だいたい、菜摘ちゃんは俺のことなんとも思ってないし…。勝手な片思いだし…。血がづながつてようとづながつてなかつと、俺、ふられるんだよ。全然関係のないことだ」

自分があほすぎて、涙が出た。でも、やっぱりシヨックだ。

「なんで？父さん、血つながってないのかよ。じゃ、ばあちゃんも？じいちゃんも？ひいばあちゃんや、ひいじいちゃんや…。春香さんは？みんな、血つながってないのかよ」

だんだん、悲しくなってきた。

「なんだよ、それ。なんだよ……」

俺は両手で顔を隠した。涙が止まらなくなってきた。何が悲しいかわからない。

多分1番シヨックなのは、父さんが父さんじゃないことだ。父さんは若くって、まだ、39だ。まるで、兄弟か、友達のようなすごい

くいい関係だ。

俺、すげえ好きだし、俺、尊敬もしてたし、いろいろと相談もしてたし、俺…。

「なんでえ…。ほんとの親じゃないんじゃないか…」

悔しさもあった。

じゃ、杏樹は？ああ、そっか。父さんの子だ。だって、俺よりも4つも下で、もう父さんと母さん、結婚して何年かしてから出来た子で…。

俺は結婚する前に、出来ちゃったんだって、父さんが話してくれたことがある。でも、違うじゃん。違うじゃんかよ。

「違うじゃんかよ！なんで、もっと早くにほんとのこと言わねえんだよ？」

空には、星が出た。月も出た。天気が良くて、風もそんなになくて、波は穏やかで、やけに穏やかで…。それも、何もかもが頭にきた。

「ちきしょう！」

サク…。砂を踏む音がした。誰かが、俺に近づいている。

こんなところで、大の字になって夜に叫んでいたから、酔っ払いかと思って、おまわりさんでも来たのか。誰かが、呼んだのか。

「横に座るよ、聖」

その声は、父さんだった。

「なんで来てんだよ？」

「なんでって、そりゃ、気になったからに決まってるじゃん」
「……」

「あのさ、俺さ…。ちよつとした小説、いや、自叙伝？書いてあるんだ…」

「は？何それ。作家にでもなるつもり？」

「あはは。違うよ。そんなに文章の才能ないよ」

「じゃ、なんで？」

「お前にいつか読んでもらおうって思ってた…。いや、読んでもらわないかもしれないと思ってたけど…」

「え？」

「そんな日は来ないかもって思ってたけど、来ちゃったみたいだからさ」

「なんのことだよ？」

「とにかく、家に帰ろう。家に帰ったら、お前に渡す」
「……」

俺は、仕方なく父さんの後について、歩き出した。父さんは、歩きながらぼつりと言った。

「やつぱ、シヨックだよな。彼女が妹じゃな…」

「彼女じゃないよ」

「え？」

「俺の片思いだし、菜摘ちゃん俺のこと、なんとも思ってたないって今日わかった」

「失恋か？」

「いいよ…。どうせ、好きになっても妹なんだろう？どうしようもないじゃん」

「まあ…、そうだな」

父さんは、一瞬立ち止まっていたけど、また歩き出した。

不思議だ。俺、よく「父さん似だね」って言われてた。友達にもなんの血のつながりもないのにな。仕草も、話し方も、笑い方も、性格も、なんだか似ているって、よく言われてた。それ、嬉しかったのにな…。

家に帰ると、

「おかえり…」

と、母さんが出迎えてくれた。顔は少し、心配そうだった。

「大丈夫だよ、くるみ」

その表情をすぐに察知した父さんは、母さんに安心させるためにそう言った。そういう気遣い、いつもすげえって思ってた。

「聖、2階に行こう。お前の部屋で話してもいいよな？」

「うん…」

俺は、父さんのあとに続いて、2階に上がった。部屋で待つてると、父さんがCD・Rを持ってきた。

「これに保存してある。パソコンで開いて読んでくれ。文章はへたくそだけど…。ま、そのへんは多めに見てくれよな」

そう笑って言うてから、

「そうだな…。話はこれを読んでからするかな。俺がいると、かえって読みづらいだろ？」

「ああ。うん」

「じゃ、ちょっと長いけど、ま、気長に読んでくれ。あ、くるみには内緒な。恥ずかしいからさ」

「え？母さんに内緒で、書いてたの？」

「うん、まあ。それじゃな…」

「うん」

父さんが出て行つてから、俺は、CD・Rをパソコンに入れた。データを移し変えて、読むことにした。

出だしは俺に当たった、手紙のようになっていた。

く聖へく

いつか、君が大人になったら、話してあげたい。そのためにも、

今から俺の物語を、記しておくよ。

かつて、俺の父さんと母さんが俺のためにしてくれたように。

聖、君の母さんと出会ったのはね、俺が21歳の時だ。海で出会った。その出会いは奇跡だった。そして、必然だった。

俺の母さんと父さんの出会いが、そうであつたように。

聖、君が生まれたのも、この世に生を受けたのも、奇跡だ。そして必然だ。俺が、この世に生を受けたのが、そうであつたように。

聖。いつか君が、本当のことを知ったら、悲しむだろうか。悩むだろうか。俺のことを、父親だと、それでも思ってくれるんだろうか。

その時が来てみなくっちゃ、わからないと思うから、今から心配はしないようにするよ。

その時が来て、もし悩んだり、苦しむようなことがあつたら、一緒に悩むし、一緒に苦しむよ。家族で乗り越えていけたらって、思っている。

だけどね、聖。俺も、そして周りのみんなも、どれだけ君を愛しているのかを知って欲しい。

だから、君の母さんと俺が出会った時のことから、記しておくよ。文章を書くのなんて、そうそうしたことがないから、へたくそかもしれないけどさ。

いつか、読む日が来るかな？全部を君に、伝える日が来るんだろうか？

さあ、聖、君の母さんと俺の物語を、これから書いていくからね。

1 二人の出会い

その日は、店のパートさんが検診の日でお休みだった。その代わりに朝は春香が、学校に行く前に店の手伝いをして、俺は、クロと散歩しに海に出ていた。

あ、クロっていうのは、ラブラドルのクロ。今は、まるで聖を子供のように、可愛がってるよ。寒い日は、聖の横と一緒に寝て、聖のことをあたためてあげたりしている。

ああ、そうだ。書き忘れてた。これを聖が何歳の時に読むかはわからないけど、これを書いている時の聖は、まだ1歳にもなっていないんだ。俺とくるみの思い出を、忘れないうちに書いておきたいから、今のうちに書いておこうと思ってさ。

もしかしたら、書き終わってもまた、聖が成長している間に、あれこれ書き足すかもしれないけどね。

話は戻って。その日は、4月だっていうのに、肌寒い日だった。今にも雨が降りそうな天気の中、俺はクロと散歩に出たんだ。

サーファーが何人か、海にはいたけど、砂浜には人がいなかった。海を歩いていると、雨が降ってきた。でも、小雨だったから俺は、そのままクロと歩いていた。

波の合間にサーファーが見えた。波がけっこうあって、砂浜から見ると、波の合間にサーファーが時々消えて、見えなくなる。

そんな中、髪の毛の長い女性が海に向かって歩いているのが見えた。どう見ても、サーファーじゃない。普通の服を着ている。それに、スカートはいてる！でも、どんどん海に入っていくてる。

異変に気づいたクロも、吠えたけど、遠いし聞こえていないようだった。

「クロ！先に走って、あの人、つかまえてて！」

クロは、「ワンワン」と吠えて、すごい勢いでその人めがけて、走っていった。俺もそのあとを追いかけた。

クロが、その人のスカートに噛み付いた。

「クロ！離すなよ！」

その人は、振り返って俺の顔を見た。すごく驚いた表情をしてた。でも、綺麗ではかなげで、まるで迷子になった小さな子供のように、不安げな悲しい目をしていた。

その人が、聖、君の母さん。くるみだよ。

驚いた？もしかするとその時、俺が海に行かなかったら、母さんは今、生きていなかったかもしれないし、聖はこの世に誕生しなかったかもしれないね。

雨と海の水に濡れて、くるみはがたがた震えてた。そのまま、俺はくるみをれいんどろっぷすに連れて帰ったんだ。

それが、俺とくるみとの出会い。

偶然とも思えるけど、必然だったと思う。会うようになってたんだ。多分ね。じゃなきゃ、もうその時には、お腹にいた聖は、生まれてこなかった。

ってことはさ、俺はくるみだけじゃなく、聖の命の恩人でもあるわけだ。二人分の命を救ったってことになるね。ちょっと、感謝しろよな。って、恩着せがましいか。

あ、もしかするとさ。お腹の中にいた聖が、俺とくるみを引き合わせたんじゃないの？くるみの命を救うためにさ……。なんてね。いきなりそんなこと、思っちゃったよ。

まあ、いいや。続きを書いていくことにするよ。

れいんどろっぷすについて、母さんが、あ、この母さんって言うのは、聖のばあちゃんのことね。母さんが、大変ってタオルや、春

香のスカートを持ってきてくれた。

それに着替えて、母さんの淹れたハーブティを飲んで、真っ白だったくるみの顔に、赤みが差してきた。俺も、母さんもそれを見て、ほっとした。

母さんは何も、聞かなかった。でも、くるみの表情や、冷え切った体を見て、なんとなく気がついていたんじゃないかと思う。

俺も、根掘り葉掘り、死にたい理由を聞くことはしなかった。そりゃ、人間誰しも一回や二回、死にたいって思うこともあるだろうし……。あ、言つとくけど、俺には一回もなかったけどね。

死にたい理由よりも、死にたい気持ちから、生きたいって気持ちに変わったらいいなって、俺はそう思ってた。

でも、どうしたらいいかまったくわかんなくて、とにかく俺は、しゃべりまくってたと思う。俺の名前、母さんの名前、クロの名前、思いつくままに。

くるみは、ようやく口を開き出したけど、俺のことを睨んで、

「あんたなんか、大嫌い」

って言ったよ。嘘だと思う？今のくるみじゃ信じられないことだよね。でも、そのあとにものすごく悲しい表情をした。きつとそう言っつて、俺より傷ついたのは、くるみの方だったと思う。

俺さ、多分その時から、くるみのことが好きになってたんじゃないかって思う。なんだかよくわからないけど、ものすごくくるみのことが気になって、その悲しさを、どうしたら幸せな気持ちに変えられるのかって、なんとなく心の底で思っていたから。

くるみは、この辺に空いてる部屋はないかって母さんに聞いた。母さんは、一部屋空いているから、うちに住むといいつて言った。なんとなく、母さんもくるみのことが気になってたと思う。なんていうのかな、俺がくるみと出会って、店に連れてきた。そのこと

が単なる偶然でもないし、その場だけで別れちゃうような、そんな人じゃないって母さんも思ってたと思うよ。

仕事も探しているって言うから、れいんどろっぷすで働いてくれないかって母さんが言った。ちょうど、その時のパートさんが妊娠してて、あと何日かで仕事を辞めないとならない時だったんだ。

今思えば、そういうのも全部、いろんな偶然が重なってて、くるみはうちに住むようになっていたんじゃないかって気がする。

それから俺はくるみを、駅まで送っていった。くるみは笑顔になつてて、その笑顔が俺はものすごく嬉しかった。その笑顔をずっと見ていたいな…とか、ずっとくるみが笑顔でいられるように、俺ができることはしてあげたいな…とか、そんなことを思ってたよ。

くるみは2日後には、れいんどろっぷすにやってきた。それから、くるみがずっと俺のそばにいるって暮らしが、始まったんだ。思えば、ほんと、それ以来ずっと一緒にいるよ。

俺の母さんと父さんの話は、まだ聖にしていね。

父さんは22歳の時、癌で死んじゃうかもしれないって言われてた。でも、母さんはそんな父さんと結婚をして、赤ちゃんが出来た。二人で、毎日毎日を大事に生きたんだ。そうしたら、奇跡が起きた。父さんの癌、治っちゃったんだよ。手術もしていなし、何もしてない。なのにかん細胞が全部、消えちゃったんだって。

そして、赤ちゃんが生まれた。それが、俺。母さんも父さんも、めちゃくちゃ俺のことを、愛してくれた。父さんは、もう会えないかもしれないって思っていたから、俺が生まれた時は、嬉しくて泣いてたってさ。

2年後には、春香が生まれた。

俺と春香は、すぐく大事に育てられた。父さんと母さんは、ものすごく仲が良くて、じいちゃんや、ばあちゃんも、とにかくみんなが、仲良かった。何かっていうと、集まっては、お祝いもしてたしね。

だけど、くるみは違ってた。両親に愛されず、育っちゃってたんだ。

あ、このことはまた、あとで書くよ。

父さんも、母さんも、くるみを歓迎してた。あ、春香もまるで、お姉さんができたかのように、喜んでた。

俺は初め、くるみが7つも年上だと思ってなくて、せいぜい、1、2歳上かなくらいしか、思ってたなかった。っていうのもさ、海で死にそうだったくるみ、ほんとに迷子の子供みたいな表情をしていたんだ。幼く見えちゃったんだよね。

だから、俺にとっては、はじめから「お姉さん」っていう感じはしなかったな。

くるみは、すぐに店の仕事も覚えて、しっかりと仕事をしていた。それどころか、家の中のこと、掃除や洗濯もしてくれてた。

初めは、口数も少なかったけど、徐々に俺ら家族にも慣れてきて、みんなでリビングでテレビを観たり、食事をしたりしてたよ。

父さんや、母さんの能天気さに触れて、くるみもすぐにうちの家族に溶け込んだんだろうな。

俺はとにかく、くるみの笑顔を見るのが好きで、その顔をずっと見ていたって思ってた、くるみがリビングにいる時には、一緒にいるようにしてたし、くるみが俺の仕事場に弁当を持ってきた時にも、一緒にいれるように、休憩してコーヒーを飲みに行ったりしてたんだ。

そうだ。一回、くるみとコーヒーを飲みに行った時に、その頃付き合ってた子と鉢合わせをしたことがあったっけ。

五月ちゃんっていつて、俺よりも2こ下の子。近くのコンビニでバイトしてる子だった。

その子とは、のちに3角関係みたいになっちゃって…。俺が優柔不断だったのが原因だったけどね。

そうだ。少し、その辺のことを書いていこうかな。

俺は情けないことに、女の子と付き合ってたことが、苦手だった。五月ちゃんと付き合う前にも、告白されて付き合った子がいるけど、何しろ仕事が忙しくて、全然会えなくて、3ヶ月でふられたんだよね。

メールとか、電話っていうのも、何かの用事があった時以外しなかったし。そんなの付き合ってるとはいえないって言われて、別れ話が来ておしまい。

でも、仕事の方を、どうしても優先にしてしまう。仕事好きだったしね。あ、今でも好きだし、楽しいんだよね。

それから、しばらくは誰とも付き合ってたなかった。忙しいし、もう彼女はいいやって思ってたけど、やっぱり、向こうから告白されて…。

初めは、仕事が忙しいからなかなか、デートも出来ないし、付き合い合えないって言ってたんだけど、それでも、時々会ってくれたらいいって言われて、たまに会って、ご飯食べたり、海とか散歩に行ってたんだ。

そのうちに、メールがよく来るようになった。メールがきた時には、なるべく返信した。俺の中では、付き合ってるって自覚はなかったけど、五月ちゃんの方から、デートに行きたいとか、言ってきた…。

ああ、彼女の中では、もう付き合ってることになってるんだな、
っていうか、俺がそんな態度取っちゃってたのかなって、思ったよ。
それで、これはもう、五月ちゃんと付き合うつてことを覚悟するし
かないなっと思ってた。

覚悟つて変だよな？付き合っのに覚悟も何もないと思うけど、そ
う思っちゃったんだよな。

会う時には、いつも緊張した。何を話していいやら、わからなか
った。だから、いつも五月ちゃんの話聞いていたと思う。

デートの約束をしても、仕事とか、店の手伝いがはいつて、断つ
たこともあつて。初めは、仕事だから仕方ないと言つてた五月ちゃ
んも、だんだんと怒るようになってきた。

だから、なんだか、二人で会うのが、ますます憂鬱になつてた。
そんな時に、俺とくるみが一緒にいるところで、五月ちゃんに会っ
ちやつたんだ。

くるみは、氣を使つてすぐに帰ろうとした。でも、二人きりにな
るのが嫌で、くるみを引き止めてた。

デートがまた、仕事と重なって出来ないって言うと、五月ちゃん
は怒つて、帰っちゃった。くるみは、それも氣にして、追いかけな
くていいのかつて聞いてきた。

俺は、当然のことだけど、くるみという方を選んだ。

不思議と、くるみとはなんでも話せた。それこそ、五月ちゃんと
のことまで、相談にのってもらつた。

一緒にいると、安心した。あつたかくて、ほつとした。

女の子は苦手で、何を話していいかわからない俺には、くるみは
初めから特別だった。なんでかわかんないけど、自然体でいられた。
それに、くるみの見せる笑顔が、やっぱり俺は嬉しかった。

俺の話を聞いてくるみも、優しい表情になって、嬉しかった。だから、一緒にいたかった。

店のカウンターで、ご飯を食べてるとね、隣でくるみも食べてたりすると、ついくるみの方を見ちゃってたし、くるみが店の掃除とかしている時には、カウンターの奥にある食器棚にくるみの姿が映ってて、それをじっと眺めてたな。

とにかく、くるみのことを見ていたかったんだよね。

でも、俺、その頃、くるみを自分が好きだって知らなかったんだ。信じられる？自分でそのことに、気づいてなかった。

母さんは気づいてた。父さんまで。はたから見たら、一目瞭然だって言われた。

だって、俺はいつでも、くるみのことを目で追ってたし、なるべく、くるみといられる時間を持つとしてたし、くるみの笑顔を見て、すごく嬉しそうにしてたんだってさ。

そのへんは、自分でも気づいてたよ。

でも、それはただ単に、出会いが強烈で、俺が助けたようなものだから、そんなくるみには、幸せになって欲しいって思っていたから…。そんな責任感とか、勝手に幸せを願っているだけだって、そんなふうに思ってたんだ。

だから、まさか自分がくるみのことを好きだなんて、思ってたなかった。

くるみもだ。俺の恋の相談も聞いてくれてたし、俺のことは、弟くらいにしか思っていないんだろうなって思ったよ。7歳上だって知ってからは、もっと、くるみは俺のこと弟くらいにしか思っていないんだろうなって、そんな気になってた。

くるみを好きになったのは、いや、好きだって自覚したのは、くるみに、

「それは恋だよ」

って言われたからだ。

変な話だろ？その時にも、くるみに相談しちゃったんだよね、俺。まあ、詳しくはこれから、徐々に書いていくよ。

それにしてもこれを、聖はいつ読むのかな？大人になってから？ある程度は恋とかを、知ってからの方がいいだろうな。じゃなきゃ、いったい何を書いているんだか、わからないよね。

でもある程度大人になっちゃってたら、自分の親父の恋の話なんか、聞きたくないかな。

もし、今、恋で悩んでいたとしたら、逆に俺の話は、何かの参考になるかな。そうだ。何かの手助けになることを願いながら、書いていくとするよ。

.....

そこまで読んで、俺は、寝ることにした。

恋か……。今の俺にはちょうど、いい話かな……。

ベッドに横になつて、考えた。菜摘ちゃんのことを。

父さんのように確かに、菜摘ちゃんの笑顔を見るのは好きだし、一緒にいられるのは嬉しい。でも、一緒にいて、安心感っていうのはない。その逆ならあるけど。やたらと、緊張してしまつて、話すらできなくなる。自分が固まっちゃつて、いつもの自分じゃなくなっているって感じる人が多い。

ここまで読んで、どっちかっていうとその五月ちゃんという時みたいなんじゃね？って思った。

あ、ちよつと違うかな。俺が、自然体でいられる相手…。
蘭ちゃん。菜摘ちゃんが、蘭ちゃんと仲がいいよねって言っただけ。仲がいいって言うよりは、話しやすい。一緒にあほなことを言つて、笑つて、とても気が楽だ。

でも、安心するのとは違う気がするな。

はあ…。なんか、いきなりいろんなことがあつて、今日は疲れた。俺はもう、何も考えなくて、寝ることにした。あ、その辺は俺の得意技だ。考え込むのは、すごく苦手。考え込み出したら、頭が痛くなるから、全部一回忘れて、寝るようにしてる。

翌朝、一階に下りていくと、母さんと父さんがもう、店のカウンターで朝食を終えたらしく、一緒にコーヒーを飲んでいた。

「あ、聖。おはよう」

俺に気づいて先に声をかけてきたのは、父さんだ。母さんは、ちよつと不安げな顔をしてた。

「おはよう、聖…」

声も少し元気がない。目の下にはくまができてるから、多分寝れなかったんじゃないかな。でも、いつものごとく、父さんが母さんを、あれこれ、元気づけてたに違いない。

「朝ごはん、用意するわね」

母さんは、キッチンに入ってた。父さんは俺のすぐ横に来て、小声で、

「昨日の読んだか？」

って聞いてきた。

「あ、少しだけ」

「少しだけ？」

「途中で眠くなったから」

「そうか…。そうだ、何度も言うけど、くるみには内緒な」
「わかってるよ」

俺は、それだけ言うと、カウンターについて、アイフォーンをいじりだして、イヤホンをして、音楽も聞きだした。これは、俺にも話しかけるなよっていう、合図みたいなものだ。

父さんは、そんな俺を横目で見てから、リビングに上がっていった。

「はあ…」

あれ以上、とやかく言われても、まったく聞く気はなかった。まだ、俺自身、昨日のことをどう受け止めたらいいかも、父さんとう接したらいいかも、わからなかったから。

母さんは、

「はい…」

と、朝ごはんをカウンターに置くと、さっさとキッチンに戻っていた。俺が、話しかけるなオーラを出している時、絶対に母さんは話しかけない。まあ、たいていが、そのうちに母さんの優しい目で俺を見ているのに俺が気がついて、俺から話しかけるんだけどさ。

杏樹は、テニス部に入ってて、朝7時前には家を出る。だから、俺が起きてくる時には、もういない。中学1年で、よく頑張ってると思うよ。

その日は、ご飯を食べてすぐに、着替えをして、さっさと俺は家を出た。

相当、早くに学校に着くから、ちんたら歩いていくことにした。そうだ、どうせなら海でも見てから行くか。

海に行く道の方に向かった。浜辺に着くと、父さんと母さんの出会いを、思い出していた。

まさか、母さんが自殺をしようとしていたなんて、今は考えられない。

何がそんなに、辛かったのか。父さんは、ばあちゃんや、じいちゃんにいっぱい愛されて育ったって言うけど、母さんは違ってたって。

でも、母さんのばあちゃん、じゃなくて母さん、時々遊びに来て俺のことも杏樹のこともめちゃくちゃ、可愛がってくれてたよな。最近、こっちが遊びに行くことが多いけどさ。

ああ、でも、母さんの両親は、離婚してたっけ。母さんのほんとの父さん、俺会ったのって、数少ないや。

じいちゃんって俺らが、呼んでるのは、ばあちゃんの再婚相手だもん。すげえ、優しいじいちゃん、いつもニコニコ顔だ。えっと、もういくつだっけ？ けっこんな年だよな。

父さんの方のじいちゃんは、まだ若いけどさ。俺が小学生の頃に、伊豆に引っ越しちゃって、今はヨットとか乗ってる。ヨットって、すげえよな。ほんっと、若いよな。

ばあちゃんは、伊豆でお店を開いてて、春香さんもそこを手伝ってて、春香さんの旦那さんの權さんは、伊豆でサーフィンショップを経営しながら、サーフィンしたり、じいちゃんとヨット乗ったりしてる。（俺も伊豆に遊びに行くと、權さんにサーフィン教えてもらったりするんだ）

じいちゃんと權さんは、今はすげえ仲がいいけど、結婚する時には、思い切りじいちゃんが反対したとか。式にも出ないと、ぎりぎりまで言い張ってたとか。笑えるよな。あのじいちゃんなら、やりかねないよ。

そう。いつも集まると、わいわいわいわい、お祭り騒ぎで楽しんだ。でも、そんなじいちゃんや、ばあちゃんとも血が繋がっ

てないんだな、俺。

そういえば、母さん、俺がお腹の中にいるってのに、別れたんだ。前の彼氏、つまり、菜摘ちゃんのお父さんと。なんでかな…。それが原因で、死のうとしてたのかな。

じゃ、菜摘ちゃんと会ったのは、実は苦しい思い出なんかを思い出しちゃって、母さん辛い思いしたんじゃないのかな。

海を見ながら、俺はそんなことも考えてた。そういうのも全部、これから読む父さんが書いた物語に書かれているんだろうか…。

先を読みたいような、なんか怖いような気もした。何が怖かった、1番怖いのは、母さんのことだ。母さんがどんなに苦しい思いをしてたのか、死のうとまでしてたなんて、どんなことがあったのか、それを知るのが怖かった。

なんで、怖いのかな…。

やっぱり、俺がすげえ好きな母さんのことだからかな…。

2 意外な展開

その日は、学校に行ってもなんだか、全部が上の空だった。そういうのは、葉一にすぐにばれる。

「菜摘ちゃんのこと、そんなに落ち込むなよ」

ああ……。なんだ、菜摘ちゃんのこと、落ち込んでると、思っているのか。

うん。それもある。あるけど、父さんが父さんじゃなかったことの方が、シヨックがでかくて、菜摘ちゃんのこと、薄れてたな。

俺が、実は菜摘ちゃんと兄妹なんだってことは、いくら葉一でも言えなかった。もし言って、何かのひょうしで、菜摘ちゃんにばれたら、大変なことになるような、そんな予感があったからだ。

多分、多分だけど、菜摘ちゃんの親にも言っていないことなんじゃないかな。何も告げずに、父さんは俺の父親になることを、決めたような気がする。

いや、これも確かめないとわからないことだけど、今は、それをわざわざ、父さんに聞く気もなかった。あ、あの物語を読めば、わかるかもな。

「大丈夫だよ。あまり、落ち込んでないから。それよりさ、今度また、みんなで会おう？」

「6人で？」

「あ、蘭ちゃんと基樹をひやかす会、しようぜ」

「なんだよ？そりゃ」

「だって、なんか悔しくない？あいつらだけ、ちゃっかりくつついちやってさ」

「まあな」

「よっしゃ、計画立てようぜ。いつも江ノ島に来てもらってるから、

どっか真ん中辺りで落ち合うか」

「それよか、新百合まで行かない？カラオケでも行こうよ」

「うん、それいいかも！で、二人にデュエット歌わせる」

「いいじゃん、それ」

俺は、とにかくバカ騒ぎがしたかった。理由は何でもいい。何もかも忘れて、バカになれたら。

早速、基樹にカラオケに行く話をした。もちろん、基樹と蘭ちゃんをひやかすためだなんて言っていない。それは内緒だ。それどころか、基樹は俺らが二人が付き合っていることを、まだ知らないと思っている。

俺から、菜摘ちゃんにメールをして、こういうことを企画していると伝えた。菜摘ちゃんは、楽しそうとノリノリのメールを返してきた。そういうの、菜摘ちゃんも好きそうだ。

明るくて、いつも、計画を立てるのは菜摘ちゃんだ。人見知りをしない。誰とでも仲良くなれる。

でも、だからといって、うるさすぎない、場を盛り上げるけど、その場の空気を読む、とても気が利く女の子だ。そんなところも含めて俺は、好きになった。

すぐに日程も、場所も決まった。

俺は、なんとなく父さんが書いた「自叙伝」を読む気になれず、ほっておいた。

それに、話をする気にもなれず、家では、ほとんど話をしなかった。

でも、家で夜、店の手伝いをしていたから、母さんとは顔を合わせないわけにはいかない。母さんは、作り笑顔をしていた。まるわかりだ。そして、俺に、

「お父さんとも、話をしてあげてね」

と言った。どう返事をしていいかわからず、なんにも俺は、答えな

かった。

杏樹が、なんとなく家族の異変に気がつき、
「お兄ちゃんとお父さん、喧嘩でもしたの？」

と聞いてきた。親子で喧嘩をしたことがなかったから、

「仲がいいのに、めずらしいね。でも、喧嘩ぐらいあるのが、普通かな。今までが、不思議だったんだよね」

と笑って言った。多分、杏樹なりのせいいっぱいなの、なぐさめの言葉だ。

仲良くしろとも、仲良くしてとも言わない。杏樹はほんと、いい子だと思う。優しく、相手が何を言ったら、喜ぶかとかそいうのを心得ている。ああ、その辺、父さんに似たんだな、きつと。

俺は駄目だ。言いたいことの半分も言えてない。変にいろんなことをあれこれ考え、返ってわけわかんないことを言ってる時もあるし、何も考えてなくて、傷つけてることもある。

俺は、クリスマスイブに生まれた。聖なんて名前、名前負けしてると思うよ。それに比べて杏樹は、天使のアンジュからとった名前らしいけど、ほんと、そのまんま天使だって思う。

情けない。そりゃ、今まで親を苦しめたこともないし、喧嘩もない。でも、こんな時、親のことなんて考えられないし、自分のことで精一杯だ。

自分でも、父さんにちゃんと向き合えないとってわかってはいる。でも、いざとなると、駄目だ。今までみたいに話せない。

夜になると、その辺を全部忘れて、俺にしては驚くことだけど、勉強に励んだりした。頭の中を英語のスペルだの、方程式だの、年号だの、いっぱいにして、何も考えなくなかったからだ。

あっという間に、一週間は過ぎて、カラオケでバカ騒ぎの日がや

ってきた。

俺と基樹と、葉一は、片瀬江ノ島駅で待ち合わせをして、そこから一緒に新百合ヶ丘まで行った。

バカ騒ぎをしたい反面、俺は菜摘ちゃんに会うのが怖くなった。自分が変な態度を取らないかと、会って、落ち込まないかと、頭の中がぐるぐるしていた。

「妹なんだよな…」

ふと、そう頭の中をよぎった。じゃ、杏樹みたいなものか…。でも、どうやっても、杏樹のように思えない自分がいて、このまま会ってもいいのかって不安にもなった。

新百合ヶ丘に着いた。改札にはもう3人が待っていた。

「あ！基樹君、聖君、葉一君！」

思い切り手を振って、大声を出してたのは、菜摘ちゃんだ。今日も元気だし、可愛いし…。

蘭ちゃんは、どっちかっていうと、大人っぽい子だ。髪が黒くてストレートで、ワンレングスにしている。菜摘ちゃんは、茶色い髪で、ショートカットだ。色黒で、中学まではバスケットにいたらしい。桃子ちゃんは、色白で、大人しい雰囲気だ。髪をいつもポニーテールにしてて、背もそんなに高くない。

俺は3人の中で、1番よく話すのが蘭ちゃんで、だから、きつと俺が蘭ちゃんを好きだって、勘違いされたんだろうな。

ほんとは、いつだって、菜摘ちゃんを意識してて、何か話しかけて、でも何を話しているのか、わからなくて、結局は蘭ちゃんにバカなこと言って、げはげは笑うパターンが多かった。

桃子ちゃんとも、あまり話をしたことがない。向こうから話しかけられたことも、あまりない。なんていうか、蘭ちゃんと違って、何を話していいかわからないタイプ。あ、菜摘ちゃんみたいに意識して話せないのとは、また違う。

でも、その日は、やっぱり、基樹と蘭ちゃんが付き合ってるのを知っているから、蘭ちゃんにあまり話しかけるのは控えていた。

だからといって、菜摘ちゃんとも話をする気になれず…。

菜摘ちゃんは、誰とでも仲良く話す子で、隣に並んで歩いていた葉一と、楽しそうに話をしていた。

後ろからなんとなく、とぼとぼ俺は歩いていた。その横をかなり、間を開けて、桃子ちゃんが歩いていった。

あ、そういえば、菜摘ちゃんが、まるで桃子ちゃんが俺のことを好きだみたいなこと、言ってたっけ。あれ、本当かな。

いきなり意識をしまった。でも、ずっとだんまりも、悪い気がして、声をかけた。

「この前、菜摘ちゃんがうちの店に来た日、用事が入っちゃったんだって？」

「え?!」

いきなり声をかけたからか、桃子ちゃんはものすごくびっくりしていた。

「あ、ごめん、なんか驚かせた?俺」

「うつん…。こっちこそ、あの…、ぼんやりしてたから、ごめんなさい」

桃子ちゃんはそう言うと、下を向いてしまった。

えっと…。質問の答えは?聞きなおすのも、変だから、俺も黙り込んだ。

しばらくすると、

「あ、あの日は、おばあちゃんがぎっくり腰になっちゃって。お見舞いと、お手伝いに行ってたの…」

と、桃子ちゃんが話し出した。

「え?ああ。そうだったんだ」

「菜摘が、すごく素敵なお店だったから、今度また一緒に行こうって言ってた」

「ああ、うちの店？」

「うん。れいんどろっぷっていうの？可愛い名前だね」

「うん。じいちゃんのネーミング」

「おじいさんの？」

「そ。雨の雫。雨が降って、やんで、葉っぱについた雨の雫見るのが、じいちゃん好きだったんだってさ」

「そうなの…。おじいさんのお店だったの？それを引き継いだの？あ、じゃあもうおじいさん…」

「正式には、ばあちゃんの店。それを母さんが引き継いで、ばあちゃんとじいちゃんは、伊豆に引っ越しちゃった。あつちで、余生楽しんでるよ。ヨット乗ったり、ダイビングしたり、もうじいちゃんなんか、じいちゃんのくせして、すげえ若くって。っていつても、まだ、60歳だけどさ」

「若いんだね。うちのおじいちゃんはまだ、70歳だよ」

「うん。ばあちゃんは70超えてる。でも、若くてすげえ美人」
「へえ…」

だいぶ間を開けて歩いてたのに、徐々に桃子ちゃんは俺のそばに寄ってきた。すぐ隣で歩いてみると、けっこう背が小さくて、なんか、可愛いなって思ったりもした。

声も小さい。たまに、笑うけど、その声も小さい。耳をしっかりと澄ませて聞いていないと、ちゃんと聞き取れない。

あ、それでか。それで俺のほうが、桃子ちゃんに寄っていったのか。

すぐ横で、桃子ちゃんの話に耳を傾けて、時々目が合うと、桃子ちゃんはぱつと視線を外した。下を向いて、もう、あきらかに顔が

真っ赤になるのがわかる。そのうえ、耳まで真っ赤だ。色白だから、赤くなるのまで、まるわかりだ。

なんなんだろうな…。菜摘ちゃんとは、まったく正反対のタイプかもしれない。でも…、そんな桃子ちゃんを、可愛いと思ってたりする自分。

俺って、何？え？菜摘ちゃんが好きだったのに、なんで…？

カラオケボックスにつくと、早速菜摘ちゃんはデュエット曲を入れて、蘭ちゃんと基樹に歌わせた。それを思い切り、盛り上げていた。その横で、俺のほうを見ながら、目配せをしている葉…。

でも、俺はそんなのどうでもよくなつて、横に座ってる桃子ちゃんのことばかり、意識していた。

話しかけると、一生懸命に話しに答えているのがわかった。

それに、菜摘ちゃんのように場を盛り上げたり、明るくしたりしないけど、いろんなことに気を配っているのもわかった。みんなの上着をハンガーにかけてたりとか、フリードリンクなんだけど、飲み物と一緒に、みんなのお絞りを持ってきてたり、水を持ってきてたり。

ふと気がつくと、テーブルが綺麗に片付けられて、それも全部桃子ちゃんがしていたりとか…。

俺の隣で、あきらかに緊張している様子なんだけど、たまにすごく嬉しそうに笑う時があつて。その笑顔がやけに、可愛くて、やばいって思ってる俺がいて。

今までずっと、気づかなかった。俺、菜摘ちゃんのことばかり見てて気づかなかったけど、もしかしてずっと俺のこと、見ててくれたんだろうか。

桃子ちゃんと話するのに夢中で、ほんと、「蘭ちゃんと基樹をひやかす」ことも、「バカ騒ぎをする」ことも、そのうえ、菜摘ち

やんを意識することも忘れてた。

俺がトイレに立ったとき、後ろから葉一が来て、廊下でいきなり、「お前、何やってんの？菜摘ちゃん一人で盛り上げさせて。お前が言いだしつぺだろ？」

と怒ってきた。

「え？」

なんで怒られてるのが、いまいぢわからなくて、俺は、すつとんきような声をあげた。

「お前、なんで桃子ちゃんと仲良くしてるの？桃子ちゃんがお前のこと好きかもしれないからって、いい気になってるのかよ？それとも、もう心変わりしたか？お前、菜摘ちゃんのこともう、あきらめるのかよ？そんな簡単な想いだったのか？」

「……」

なんで、そんなことお前に言われなきゃならないんだって、なんだかカチンってきた。でも、その後ろに立ってる、真っ青な顔をしている桃子ちゃんが視線に入ってきて、それどころじゃなくなった。

「やばい！」

頭の中で、そう俺がさけんでる。血の気も引いてる。

何が、やばい？

俺の顔が、真っ青になっていくのを見た葉一が、後ろを振り返ってそこに桃子ちゃんがいるのに気づいて、

「あ……」

って、やっぱりやばいって顔をした。

桃子ちゃんはそのまま、グラスを持って、一階に行ってしまった。ああ、多分ドリンクを注ぎに部屋から出てきて、今の話を聞いちゃったんだ。

「あほ！」

俺は、葉一にそう言ってから、桃子ちゃんを追いかけた。
何がやばい？もう一回自分に聞いた。何がやばいのが、わからない。

一階のフリードリンクの場所に桃子ちゃんはいなくて、ぐるりと見回すと、店の入り口の外で立っているのが見えた。

ドアを開けて、ゆっくりと桃子ちゃんに近づいていくと、桃子ちゃんは俺に気がついて、その場を去ろうとしたけど、その前に俺が、桃子ちゃんの腕を掴んだ。

「あの…」

何がやばい？何を言ったらいい？俺が菜摘ちゃんを好きだったのは、事実だし、桃子ちゃんが俺を好きかも知れないって聞いてたのも事実だし、俺が桃子ちゃんを意識しちゃって、心変わりしてるかもしれないのも事実だし、葉一が言ったことは全部、事実だけど…。

「あの…」

もう一回、桃子ちゃんに話しかけた。桃子ちゃんはまったく、こっちを見ないで、

「は、離して…」

って、小さな声で言った。

「あのさ、今の話だけど、聞いてたよね？」

「……」

桃子ちゃんは黙っていた。

「菜摘ちゃんには言わないでくれる？」

「え？」

「だから、俺が菜摘ちゃんを好きだったってこと、言わないでくれる？」

頭の中、ぐるぐるしてた。なんで、こんなこと言ってるの、俺。
ああ、そうだ。そんなこと知れたら、やばいからだ。俺の妹に、
そんなこと…。

「なんで？菜摘、聖君が蘭を好きなんじゃないかって、この前まで
思ってたよ？」

「うん。それ、聞いた」

「じゃ、菜摘は聖君が、菜摘を好きだなんてそんなこと、思ったり
もしないよ？」

「だろうね」

「そ、それで、私のために、私と聖君がくつつくのをお膳立てしよ
うとしてるよ？」

「なんか、そんなようなニュアンスのことも聞いた」

「え？」

「この前、店に来た時に」

「ばらしちゃったの？菜摘」

「いや、はつきりとは言ってないけど、なんとなく」

「だって、菜摘のことが好きなんでしょ？なのに、どうしてその時
に言わないの？言わなきゃ菜摘気づかないよ」

「いいよ…」

「よくないよ。絶対によくないよ。なんで？菜摘、別に聖君のこと、
嫌いじゃないよ。でも、私が聖君のこと好きだから、それを知って
るから、くつつけようとしてるだけで。私がいなかったら、もしか
したら聖君のこと…」

「まいったな…」

「え？」

「いや…。その…」

なんて説明したらいいのか。菜摘ちゃんのことを俺が好きでも、
しかたがないこととか、もうあきらめなきゃいけないこととか、だ

から、菜摘ちゃんが俺のことを好きになったら、やばいつてこととか。

ああ、その「やばい」か…。

しばらく、桃子ちゃんは黙っていた。俺も、なんて言えばいいのか、頭の中ぐるぐる考えてた。

…菜摘ちゃんのことはもう、好きじゃない。…いきなりそんなことを言っても、信じるわけないか。

…実は、心変わりました。つてのも無理だろうな。いや、これ、少し本気なんだけど、やつぱそんなこと言えないし…。

じゃ、なんて言う？どう言えばいい？余計なことするな。余計な口出しするなって脅す？まさかね…。

「はあ…」

ため息をすると、桃子ちゃんは腕をぎゅって硬くした。

「あ、ごめん、俺、掴んだままだった。腕、痛くなかった？」

慌てて掴んでいた、腕を離した。

「うつん…」

桃子ちゃんは、ただでさえ、小さいのにますます体を小さくして、身構えた。

「あのさ…」

俺は周りに誰もいないことを確かめた。それから少し場所を移動した。入り口付近じゃ、いつ誰が来るかもわからなかったからだ。

駐車場の方に、桃子ちゃんを連れて行って、もう洗いざらい、本当のことを話してしまう覚悟を決めた。

「こんなこと言っても、信じるかどうかわかんないけど」

「…うつん？」

桃子ちゃんは、身構えたまま聞いていた。

「この前、菜摘ちゃんがうちの店に来て、母さんと会ってわかった

んだ。菜摘ちゃんのお父さん、俺の本当の父親なんだよ」

「…え？…どういうこと？！」

「今の父さんに出会う前に、母さんが付き合ってた人で…。詳しくはわかんないけど、別れてから、俺の父さんと出会って、でもその時にはもう、俺、お腹の中にいたみたいなんだ」

「……」

「今の父さんとは、血が繋がってない。俺の血のつながってる父さんは、菜摘ちゃんの父親なんだ。あ、もちろん、菜摘ちゃんはそれを知らない」

「そんな…。だって、聖君、菜摘のこと…」

「うん。でも、それ知ったの、菜摘ちゃんが俺のこと、なんとも思っ
てないって知ったあとだから」

「え？」

「それって失恋ってことじゃん？まだ、救われるよね。もし、両思い
だったりしたら、悲劇だよ」

「でも…」

「だから、黙ってて。俺が菜摘ちゃんのこと、好きだったってこと」

「でも…、でも聖君は、それで辛いなの？」

「うん、大丈夫。なんとか、大丈夫だから」

「ほんとに…？」

桃子ちゃんが、涙を流した。びっくりした。俺だって泣いてない
のに。

「聖君、ほんとに？辛いなの？」

「え、うん。いや、えっと…」

俺は、本当に驚いてた。桃子ちゃんの涙にも、桃子ちゃんの言葉
にも。俺のために泣いちゃってるの？

「俺、どっちかっていうと、父さんと血が繋がってないことの方

がショックで…。菜摘ちゃんのことよりもさ…」

「……」

桃子ちゃんは、まだ、泣きながら俺の話を聞いていた。

「俺、父さんと仲良くて…。だから、なんかショックだった」

「…お父さんのこと、好きなんだね」

「え？」

「好きなんだね。だから、ショックなんだね」

「そ、そりゃあ、まあ…」

俺は言葉に詰まってしまった。何て言ったらいいのか。しばらく黙ってから、俺は、正直に今感じていることを、話そうと思った。

「うん。尊敬もしてるし、俺、父さんの考え方とか、生き方とか全部好きでさ。自慢の父親だったんだ。父さんだけじゃなくて、父さんの両親とか兄弟とか、みんな好きでさ」

「……」

桃子ちゃんは、黙って聞いていた。

「だから、余計、悲しかったのかな…」

「素敵な家族なんだね」

「え？」

「ね…」

「ああ、うん。まあね…」

「そうなんだ…」

桃子ちゃんは、そう言くと、しばらく黙ってたけど、

「私も、お父さんのことが大好き。もし、血がつながってないってわかったら、やっぱりショックだな。だから、なんとなくわかる気がするな」

って言った。共感してくれてるのが、すごく嬉しくなった。

「これ、誰にも言わないね。こんな話、私なんかにはさせちゃって、ごめんね」

「え？」

「本当は、この話、したくなかったでしょ？」

「うん…。誰にもするつもりなかった」

「ごめんね…」

桃子ちゃんはそう言つと、うつむいた。

「い、いいよ。黙つててくれればそれで…」

俺は、本当は俺の思いをわかつてくれようとしたのも、俺のことで泣いてくれたのも、嬉しかったって言いたかった。でも、照れくさくて言えなかった。

そのまま、二人でドリンクを持って、一緒に部屋に行くのも気が引けて、時間差をわざとした。

先に桃子ちゃんがドリンクを持って、部屋に戻り、少ししてから俺が、部屋に行った。

「何処行つてた？…？今度は二人がもしかして？」

菜摘ちゃんが、ちよつとからかうように俺たちに言った。

「ち、違うよ。二人でいたんじゃないよ。私はドリンクを取りに行つて、聖君は…」

「俺、家から電話があつて、それに出てた」
つて嘘をついた。

「え？でも、やけに遅かつたじゃない？」

菜摘ちゃんはまだ、そんなことを言つてたけど、

「いいよ、いいよ。時間もつたない。ほら、聖、全然歌つてないじゃん。歌えよ！」

つて葉一が言つた。その場を、取り繕つてくれているようだった。

「ああ、うん」

俺はすぐに歌を入れ、歌い出した。

桃子ちゃんを見ると、ちよつと元気がないように見えた。俺のことで、なんか落ち込んでんのかな。当の本人は、そうでもないんだ

けどな。

菜摘ちゃんは相変わらず、その場を盛り上げ、蘭ちゃんと基樹は、あつあつで、葉一は、落ち込んでる桃子ちゃんを気にしているようだった。

帰りがけ、俺らと、蘭ちゃん、基樹は別行動をすることになった。駅で、菜摘ちゃん、桃子ちゃんとも別れたんだけど、その時に菜摘ちゃんが、

「そうだ、聖君、うちの親、お母さんのこと知ってたよ。偶然ねって言ってびっくりしてた。今度お店に行きたいって言ってたよ」
って言い出した。

「あ、そうなんだ」

俺は、なんて答えていいかわからず、そんな曖昧な返事をした。横で、それを聞いていた桃子ちゃんが、

「あ、それよりも、私もお店に行きたいな」
と、慌てて口をはさんできた。多分、話をそらせようとしたんだろうな。

「そうだね。今度一緒に行こうよ！いいでしょ？聖君」
菜摘ちゃんが、そう元気に聞いてきた。

「え？ああ、うん」

俺がそう答えると、桃子ちゃんは、

「じゃ、またね。その時にね」

と言って、菜摘ちゃんの腕をひっぱって、去って行ってしまった。多分、あれが精一杯だったんだろうなあ…。桃子ちゃんの健気な頑張りが見えて、いじらしく思った。

「あゝあ。俺、やばいことしたな」

隣で、葉一が、ぼそって暗く言った。

「何が？」

「桃子ちゃん、なんか早くに別れたがってた」

「え？」

「こっちもろくに見ようとししないで…。店に行くなんて健気にさ…。それも、菜摘ちゃん連れて、お前に会わせようとしてたんじゃないの？」

「へ？」

「あのあと、どうしたよ？桃子ちゃん、戻ってから暗かったから、お前にふられたのかなって思ったけどさ。ふったの？」

「桃子ちゃんを？いや…」

「え？じゃあ、どうしたんだよ」

「どうもしてねえよ」

「追いかけてったじゃんか。お前」

「一階に下りたら、いなかったんだよ。トイレでも行ってたんじゃないかな」

「じゃ、なんであんなに戻るの遅かったんだよ」

「だから、家から電話があって…」

「また、そんな嘘を」

「ほんとだよ。今、ちよつと、親ともめてて」

「お前んち、異常に仲いいじゃん」

「こんな時も、たまにはあんだよ」

「じゃ、桃子ちゃん、宙ぶらりんのまま？」

「え？」

「あの子、お前のために、菜摘ちゃんとくっつけようとするんじゃないの？」

「しないよ、多分」

「なんで？」

「菜摘ちゃんが、俺のことなんとも思っていないから。それなのに、そんなことしても無駄じゃん」

「まだ、わかんねえじゃんか、菜摘ちゃんの思いなんて。友達のためには、犠牲になってるのかもよ？」

「何それ」

「桃子ちゃんが、お前のこと好きだって知ってるからわざととか。だいたい、一人でお前んち行くと思う？」

「桃子ちゃんと蘭ちゃんが、来れなくなったからだろ？」

「そうかな」

「ああ！もう！いいの。俺はもう、なんとも思っていないから」
「は？」

「お前の言ってたの、本当のことだよ。俺、桃子ちゃんが俺のこと好きだってわかって、意識しちゃって、心変わりしたの！」

「ええ？！そんな嘘つくなよ」

「嘘じゃねえよ」

「だって、お前、この前まで…」

「この前は、この前。今日は今日。恋なんてそんなもんだ。いきなり、好きになったりするもんなんだよ」

「はあ？」

「いいから！だからお前せーっつたいに、菜摘ちゃんに俺が、菜摘ちゃんを好きだなんて言うなよ」

「なんで？」

「混乱させるだろ？俺が今好きなのは、桃子ちゃん、菜摘ちゃんじゃないんだからさ。わかった？」

「わ、わかったよ。もともと言うつもりもないし…」

「そうか、ならいいけど」

「でも本当にいいのか？」

「何が？」

「例えば、俺が菜摘ちゃんと付き合うようになって」

「何それ」

「たとえ話」

「そんなことありえね〜」

「何で？」

「お前、菜摘ちゃんのこと、好きじゃないじゃん」
「……」

葉一は黙った。

「え？」

顔が真剣だったから、こっちが焦った。

「何？お前、まさか、菜摘ちゃんのこと……」

もっと、顔が真剣になった。

「まじで?!」

「ああ」

葉一は、たった一言、そう言った。

3 好きだってわかった時

家に帰った。

「ただいま〜」

いつもの癖でそう言っで、玄関に入り、リビングに行った。

「お帰り」

父さんが、明るく出迎えた。

「あ…」

父さんとはあまり、口を聞いてなかった。もう一週間も。でも、いつもの癖で、ただいまって言ってしまった手前、ちょっと気まずかった。

「どこ、行つてた？」

父さんが、また明るく聞いてきた。

「別に…」

とだけ言っで、俺は2階にさっさと上がっていった。

部屋に入り、頭の中を整理しようと思った。

まず…。桃子ちゃんは、俺のことが好き。これ、確実だ。なんて
つたっで、本人が言っでたし…。

そして、葉一は菜摘ちゃんのことを好きだ…。菜摘ちゃんは、誰
を好きだかわからない。

で、俺は…？

こんな時、相談相手は、父さんだった。母さんには話しづらくて
も、父さんは、なぜか、親友のようで、いろんなことを相談できた。
でも…。

「はあ…」

今は、こんな話をする気にもなれない。

俺は、PCを開いた。この前の続きを読めば、もしかして、恋に

関してのアドバイスがあるかもしれないって思ったからだ。

父さんも、初めは母さんじゃない人と付き合ってた、母さんが好きだってこと、自覚してなかったんだっけ。じゃ、いつ？どうやってそれを自覚したんだ？

.....

俺は、くるみの前に住んでいたアパートを引き払う手伝いに行った。その時に、くるみが前に付き合ってた彼氏ってのと、ばったり会ってしまった。

二人の会話を聞いてて、なんとなく二人の関係が読めた。

何しろ俺は、くるみから話してくれるまで、いろいろと聞き出すのはやめようって思ってた、何が原因で死のうとしたのか、知らなかったから。

元彼がいたことも、元彼と何が原因で別れたのかも、知らなかった。でも、どうやら、元彼は、くるみの友だちと付き合い出し、くるみのことをふったようだった。

それも、くるみのことを、強い女だとか、いつさい泣かないとか、そんなことを言ってるし、くるみよりも、くるみの友達、梨香って人のことを、かばっているし、俺は聞いてて無性に腹が立ってきた。こいつは、くるみの何を見て来たのか。死ぬほど辛い思いをしているのも、わかってやれなかったのか。今、くるみが泣くのを必死でこらえているのが、わからないのか。

思わず俺は切れて、稔ってやつにくっついてかかっていた。でも、俺の腕を掴んで、くるみが、

「もついいよ」って言って、泣いたんだ。大粒の涙がくるみの頬をつたってるのが見えて、頭が一気に冷めた。

俺はその時、とんでもないおせっかいなことをしたんじゃないかって、反省した。くるみと稔って人の問題であって、俺が口を出すことじゃなかったのかって…。

稔って人は、くるみの涙を見たときに、静かになり、そのまま立ち去っていった。

それからすぐに車で、江ノ島に俺とくるみは戻った。車中気になって、俺は聞いた。おせっかいなことをしたんじゃないかって。でも、くるみは嬉しかったって言った。あの涙は、嬉し涙だったって…。

それからだ。

ご飯食べてても、風呂入ってても、寝ようとしても、くるみのその泣いた時の顔が、浮かんできて、どうしようもなくなった。気がつくとき、その顔を思い出してる。

仕事をしてても、いくら打ち込もうとしても、俺はいつの間にか、くるみのことを考えてる。

一緒にいると、なんか苦しくなる。でも、時々、無性に抱きしめなくなるほど、可愛く見える。やばい、仕事も手につかない。

その頃、俺と春香の誕生日のお祝いを、みんながしてくれて、くるみは俺に、ガラスのイルカの置物をくれた。

嬉しかった。どんな思いで買ってくれたんだろうって、そう思うとドキドキした。

俺がいつもと違って、様子が変わるのを見る感じが気づいて、くるみの方が、相談に乗ると言ってきた。

初め、くるみのことで悩んでいるんだから、本人に相談するのはおかしいことだよなって思った。でも、思い切って、話を聞いてもらった。

もちろん、くるみのことばかり考えてるなんて、そんなことは言

わなかった。ただ、ある人を思うとって、そんなふうに話した。そうしたらくるみが、

「それは恋だよ」

って言うてきた。当の本人から…。俺は戸惑った。

その頃には、俺は五月ちゃんのこととは、本気で好きにはなれないなうて思えたから、別れてたんだ。五月ちゃんの事も、くるみには相談に乗ってもらってた。

本当に、めんくらった。だって、相談もしやすい、一緒にいて自然体でいられる、くるみはそんな相手だったから。まさか好きになつてるなんて、思ってもみなかった。

そのうえ、くるみが俺のことを好きになるはずもないって思っていたから。

俺は7つも下で、弟みたいに思われてて、いつでも優しく相談に乗ってくれてて…。そんな俺のことを、男性として意識してみてくれたこともないんじゃないかって、そう思うと、どう考えてもこの恋が叶うわけないって思ってたんだ。

でも…。俺の思いは募るばかりだった。

だけど、俺の恋の相談を聞くのが、本当は辛いんだとくるみが言うてきた。

そりゃそうだよな。くるみは、彼と別れたばかりで、死のうとするほど、辛い思いをしたばかりだし…。って、その時は俺思ってたんだけどね。

あとから聞いたら、俺のことがくるみも好きで、それで聞くのが辛くなつてきたって言うてた。そうならそうと、言うてくれれば良かったものをさ…。

ま、いっか。それはまあ、おいといて。

俺は自分ばかりが相談に乗ってもらって、申し訳ない、くるみの話も聞くよって言ったんだ。そうしたら、くるみは、自分のことを話してくれた。

稔って人とは、結婚まで考えてて、プロポーズもされたらしい。でも、親友の梨香って人と付き合うようになって、別れてくれと言われたとか。

でも、くるみは、自分が俺の恋の相談を受けて辛かったように、梨香も辛い思いをずっとしてきたんじゃないかって言い出した。

くるみの方がよっぽど辛かったろうにって思ったけど、梨香はすごく優しく、本当は稔を好きだったのに、私の話を聞いてくれてたんじゃないかって。だからずっと苦しかったかもしれないし、今も苦しんでいるかもしれないってさ。

涙を流しながら、俺にそんなことを言ってきた。

それに、自分が親に愛されていなかったこと、ずっと、「あんたなんか生まれてこなければ良かった」と、言われ続けたことを教えてくれた。だから自分が大嫌いで、大嫌いだって言って、くるみはぼろぼろ泣いた。

俺は、なんか、くるみのことを全部理解していたような気になって、恥ずかしくなった。

くるみが抱えてきた苦しみは、俺には絶対に理解できないことだった。だって、俺は思い切り両親に、愛されて育ってきたから。

自分が生まれてこなかったら良かったと思ったこともなければ、自分が嫌いだって思ったこともない。

そんな俺が理解しようにも、絶対に無理な話だ。

だけど、理解は出来なくても、俺がくるみを愛することは出来る。愛して、会えて良かった、くるみが生まれてきて良かったって思うことは出来るし、それをくるみにちゃんと表現することも出来る。

るって思った。

その想いが果たして、どのくらいくるみの心を癒せるのかはわからなかったけど、でも、本気でくるみのことを全部愛しいって思ったのは、事実だったから。

多分、俺はその時、くるみの苦しみをわかってあげられなくても、その苦しみや、悲しみを受け入れること、そんな思いを抱えているくるみごと、まるごと愛すことを、決心したんだと思うよ。

くるみは、その時から、俺にちゃんと心を見せてくれるようになった。

どんな思いをしているのか、今までしてきたのか、泣いたり、思いを吐き出したりしながら、徐々にくるみの中にあつた重苦しい辛い感情は、癒されていつてるようだった。

俺は、くるみの抱えている苦しみに比べたら、くるみが俺のことをどう思っているかなんてちつぽけな悩みだっと思ってえた。

俺は、自分が好きな人が目の前にいること、それだけ好きになれる人に出逢えたこと、それだけで幸せなことだっ、そう思っていたに、気持ちがあがっていった。

俺のことを、弟だっと思っててもいい。でも、ほんの少しずつ、男として意識してくれたら…。なんて思ってたんだ。

だから、デートに誘った。なるべくダンディな俺を見せられて、くるみがすごく喜ぶようなデートをしようって、かなり頑張った。

それで、車で鎌倉の海の近くのレストランに行った。

そこは、家族で何回か行った店で、何を頼んだらいいかも、父さんにアドバイスをもらった。

くるみは、すごく綺麗に化粧もして、おしゃれもして、来てくれた。

一緒にご飯を食べて、店を出てからは、海沿いを散歩した。

俺はすげえ、嬉しくて、でも、緊張してた。俺のことを、ちゃんと男性として見てはくれないだろうか。このデートで、見直してくれないだろうか。そんな気持ちで、めっちゃ緊張してた。

それで、かつこよく、告白でもしようかと思っていたのに、なんか、かつこわるくぽろって本音が出ちゃって、くるみにてんでかっこいいところを見せられなかった。

そのうえ、俺の思いを知ったくるみは、じゃあ、なんで恋の相談なんかしたのかって、聞いてきた。普通は好きな相手にそんなこと、しないよねって…。

俺は、仕方なく本音を言った。相談するふりして、本当はくるみの気持ちをうかがっていたこと。

すげえ、かつこ悪い。かつこ悪いどころの騒ぎじゃない。情けない、卑怯なやつだ。嫌われてもしかたない。そんなふうに思えてきて、これまた、かつこ悪いことを言ってしまった。

「嫌われるのだけはきついな」
って…。

でも、くるみは、自分も同じ思いだと言ってくれた。俺のことがずっと、好きだったって。

信じられなかった。まじで、まじで、信じられなかった。俺のこと、慰めてくれようとしたのかとも思った。でも、くるみの本心だつてわかって、本当に嬉しかった。

そして、両思いだつてわかってから、俺とくるみは、急接近していったんだ。

.....

「なんだ、俺の本当の父親って、最低じゃん。母さんがいながら、他の子とも付き合ってたんだ。それも、母さんにプロポーズしときながら…。それで、母さんショックで死のうとしたのか？」

なんだか、腑に落ちなかった。

父さん、もつともつと、そいつをののしってやればよかったのに。

菜摘ちゃんのことすら、憎く思えてきた。なんだよ。そんな二人の間に生まれた子かよ。

ああ、でも俺だって、そんなやつを、受け継いじゃってる。俺だって、菜摘ちゃんのことを好きでいたのに、桃子ちゃんに心が揺れちゃってるじゃん。

なんか、頭の中がぐるぐるした。恋のアドバイスどころか、ますます混乱した。

だけど、一つだけ確かなことがある。それは、けして菜摘ちゃんのこととは、好きでいてはいけないということだ。

もし、桃子ちゃんへの想いが、いつときの感情でしかなくて、桃子ちゃんのことはどうとも思っていなかったとしても、それでも、俺は菜摘ちゃんのことだけは、忘れなくちゃいけない。

「はあ…」

ため息が出た。でも、今でよかったかもしれない。

もし、もつと好きになっっていたら？もし、両想いだったら？もし、二人が結ばれてたとしたら？

だとしたら、それから別れることを考えたら、今でよかったんだ。そんなことを思ってみて、それから、また俺は、何も考えないようにした。頭を空っぽにして、すべてをリセットしてから、ベッドに入る。

そして、俺は、またすぐに、眠りについていた。

翌日は、祝日。連休が続く。ゆつくりと寝坊をしようと思っただけど、携帯がなって、目が覚めた。出ると、菜摘ちゃんからだった。

「あ、寝てた〜？ごめん、起こしちゃった？」

かなり低い声で、俺は電話に出てた。

「ああ、うん、でも起きるところだったから、大丈夫」

「本当？実はね、今日早速暇だし、行こうかと思って」

「どこに？」

「れいんどろつぷす」

「え？」

「桃子と行くから！あ、それとも、私邪魔かな〜？」

「え？なんで？」

「だって、なんか、仲よさそうだったし、二人」

「……」

答えに困ってしまった。そんなことないよって言おうとした。

でも、桃子ちゃんと仲がいいって思ってた方が、菜摘ちゃんが俺から、離れることが出来るんじゃないかとか、このまんま、菜摘ちゃんが店に来なかつたら、もう縁を切ることすら、出来るんじゃないかとか。

「え？本当に私、邪魔？！」

菜摘ちゃんがちよつと、暗い口調で言った。

「あいつ、葉一も誘ってみるよ。うちに来てから、海でも行こう。」

あ、水族館とかどう？」

「わあ、いいね！じゃ、決まりね。桃子にも言っとく。何時に行けるかな。11時頃には、お店に着くかな」

「あ、店11時からだから、ちよつどいいかも」

「うん、じゃあね！」

「うん」

電話を切って、その旨を葉一にすぐに電話で伝えた。葉一は、「お前、いいの？4人でなんか会って…」
って、言ってきた。何が「いいの？」なんだか…。

「いいよ。そんで、お前頑張れよ。俺は、桃子ちゃんと途中から、別行動するから」

「まじでいいの？本気で言ってる？」

「本気って書いてまじ」

「冗談言ってる場合か？！」

「本気だつて。チャンスあげるんだから、絶対頑張れよ」

「お前、まだ菜摘ちゃんのこと」

「もう、なんとも思ってるない。俺は俺で、桃子ちゃんと仲良くするから、遠慮するな」

「わかったよ」

はあ…。ため息だ。いや、これで一件落着だ。

葉一は、こんなことでもなかったら、自分が菜摘ちゃんを好きだつてこと、絶対に明かさなかっただろう。俺に気を使つて。

前にもあった。俺のことが好きな子を、葉一は好きだったのに、必死で、キューピッド役に徹した。付き合ってたけど、俺は長く持たず、結局別れてしまった。

しばらくして、他のやつから、葉一が、その子のことを好きだったってのを聞いた。

アホじゃねえかって怒ってたけど、あいつは、いいんだよって笑ってた。

なんで、そうやって自分のことより他人のために、動けるのか。その時にも俺は、自分の名前が嫌になった。「聖」なんて名前負けだ。友達の想いにも気付けず、何が聖だつて…。

葉一には、父親がいない。小学校の時、病気で亡くなって、そ

れから、ずっと母親と二人暮らしだ。

お母さんが働いてる分、家のことは、葉一がやってる。それに俺のバイトは、遊びのために使ってるけど、あいつは、生活費に入れてるんだ。

俺よりずっと偉い。俺はのん気で、なんの苦勞も知らず、育ってきた。のほほんとさ。っていつても、今、けっこう窮地か。

いや、そうでもないか。事実を知ったところで、現実が変わらない。そうだ。のほほんと生きてこれたのは、父さんのおかげだ。

父さんがもし、俺のこと受け入れてくれなかったら、母さんはシングルマザーだったかもしれないしな。

そう思うと、父さんに頭が下がる思いもした。それなのに俺、ろくすっぽ口も聞いてない。すんげえ嫌なやつだよな、俺。

11時、ぴつたり葉一が店に来た。時間にいつも正確なやつなんだよね。5分立って、菜摘ちゃんと桃子ちゃんも、現れた。

「いらっしやいませ。あら、菜摘ちゃん」

母さんが、菜摘ちゃんに笑いかけた。

「こんにちは、また来ちゃいました。あ！そうだ。母と父が今日ここに来るって言ったら、よろしくお伝えしてねって言っていました。今度二人で、会いに来たいとも言っていましたよ〜！」

「まあ、ほんと？」

俺はそれを横で聞いてて、ぎゅってげんこつを握り締めた。

よくもそんなことが言えるもんだって。そして何も知らないで、のん気にそんなことを言ってる菜摘ちゃんが、憎らしくも思えて、顔は笑ってるけど、心では、辛い思いを母さんはしているんじゃないかって、ものすごく心配になった。

案の定、母さんの目は笑っていなかった。

父さんも家にいて、リビングから店の方に、ひょっこり顔を出してきた。

「やあ、いらっしやい。あれ？葉一君、しばらく見ないうちに、背、また伸びたんじゃない？」

「あ、こんにちは、ご無沙汰してます」

「これ、父さん」

ぼそつて、桃子ちゃんと菜摘ちゃんに紹介した。

「え？若くないですか？！」

菜摘ちゃんが驚いていた。

「うん、まだ、39。サンキューなんつって」

父さんがぼけると、菜摘ちゃんが大笑いをした。

「あれ？あんまりおもしろくなかったかな？」

父さんは、桃子ちゃんにそう聞いた。

「え？いえ、面白かったです。すみません」

桃子ちゃんは、慌てていた。

「え〜と、紹介してよ。聖」

「ああ、萩原菜摘ちゃんと、椎野桃子ちゃん」

「はじめまして、萩原菜摘です」

菜摘ちゃんは明るく、そう言った。

「椎野桃子です。」

桃子ちゃんは、いつもの小さな声で、そう恥ずかしそうに言った。

「ああ、はじめまして」

父さんは、優しくにこつて微笑んだ。

父さんにしたって、菜摘ちゃんは憎らしい相手じゃないのかな。母さんだって本当は、会いたくないんじゃないのかな。俺は今日、呼んだ事を後悔した。

そんな気持ちが多分、顔に思い切り出たんだろう。

「なんか、嫌なことでもあった？」

菜摘ちゃんに聞かれた。

「え？俺？別に…」

ものすごく、無表情で俺は答えていた。やばいな。これ…。空気悪くなるよな。

「あ、私、今日水族館すごく楽しみで。何年か前に建て直したんだよね。大きくなったって聞いて…。私、小学校の頃来て以来だから本当に楽しみ。ね、早めに行かない？」

察知したんだろうな。桃子ちゃんが、必死でそう言ってきた。

「そうだよ……。行こうよ」

菜摘ちゃんが、俄然張り切り出した。

「悪いけど…」

俺はいきなり、別行動することを願い出た。

「え？」

桃子ちゃんが驚いていた。

「私は、いいけど…」

菜摘ちゃんは、ちらって桃子ちゃんの方を見てそう言った。

「え？でも…」

桃子ちゃんはまだ、困ってる感じだった。

「桃子ちゃん、困ってるよ。とりあえず4人で行かない？」

葉一が、そう提案した。何言ってやがる？誰のためだ？

いや、実は、菜摘ちゃんと一緒にいるのが、限界が来てたつてのが、1番の理由だ。あんなに好きだったのにな。ドキドキして、意識して、会うのが嬉しくて。

でも今は、顔を合わせるのも、けっこうきつい。

「俺さ、言っただじゃん。お前には」

「え？」

何を言い出すのかと、葉一は、目を丸くした。

「俺、桃子ちゃんと二人で、水族館には行きたいから、別行動してくれって頼んだよな？」

「え…、いや、でも」

「なんだよ。忘れんなよ。菜摘ちゃん、そういうことだから。あとは葉一と二人で回って。っていうか、別に水族館じゃなくてもどこでも、二人で行きたいところ行つてよ」

「え？」

さすがに、菜摘ちゃんも目を丸くした。その隣で、戸惑って、どうしたらいいか困っていたのは、桃子ちゃんだった。でも、多分、俺が菜摘ちゃんのことと、演技でもしてると思っただろう。

「ご、ごめんね。菜摘。そうしてくれると、私も嬉しい…」

顔をひきつらせて、必死で言ってるのがわかる。

「わかったよ」。そうまで言われたら、二人の邪魔するわけにもいかないし。でもいつの間にか…？やっぱ、カラオケで二人でいなくなったとき二人つきりになっていたんだ！」

そんなやりとりを聞いていて、母さんは暗い表情をした。父さんは、黙って俺のことを見ていた。

「じゃ、先に桃子ちゃんに行くよ」

俺は、桃子ちゃんの手を掴んで、さっさと歩き出した。

ドアを開けて、そのあと早足で歩いた。なるべく早くに、あの二人から遠ざけたかった。

しばらく歩いてからふと、後ろを振り向くと、必死に駆け足でついてきてる桃子ちゃんがいた。

「あ、ごめん」

手を離して、歩く速度をゆるめた。

「うつん。こっちこそ、歩くの遅くて…。小さいから歩幅も小さくて…ごめんね」

ああ、ずっとちょこちょここと、必死で走ってたんだろうな……。そう思うとまた、いじらしく思えた。

そのまま俺は黙って、水族館へと足を向けた。

「あの……」

「え？」

「水族館、本当に行くの？」

「え？行くよ。なんで？」

「だって、演技だったんでしょ？だったら、もういいかも」

「え？何が？」

「菜摘、もう、疑わないよ。私と聖君が付き合ってるって思ってると思うよ。それが狙いだよね？」

「……」

「それとも、私へただったかな。演技してるのばれちゃったかな」

「……」

俺が黙っていると、不安げな顔をして、桃子ちゃんは俺のことを見ていた。

「桃子ちゃんってあれだ」

「え？」

「小型犬に似てる」

「えっ?!」

「マルチーズとか、チワワとか……」

「……小さいから？」

「うん、っていうか雰囲気も。なんかおどおどしてて、目も丸くて……」

「おどおど……?してるかな、やっぱり」

「あ、悪い意味じゃないよ」

「……」

桃子ちゃんは、下を向いてしまった。やばい。俺のたとえ、よくなかった。健気で一生懸命で、可愛いつて言いたかったんだけど、さすがにそれは恥ずかしすぎて言えなかった。

「悪い。その…」

まだ、桃子ちゃんは、下を向いたままだった。でも、小さな声で、「菜摘みたいに、どうどうとしたいつていつも、思ってるんだ…」
つてつぶやいた。

「え？」

「でも、なかなかできなくて…」

声が震えていた。泣きそうになっていたのかもしれない。

やばい！何が？泣かせたことが…。傷つけてることが…。

「水族館、行こうよ。俺も最近行ってないし…」

「え？」

「行こう」

俺はまた、桃子ちゃんの手をひいた。でも、今度はゆっくりと歩き出した。

桃子ちゃんは、振り返って見なくてもなんとなく手のぬくもりでわかった。きつと今、真っ赤だ。微妙に手も震えてるのがわかる。

…やばい。今度のやばいは、なんだ…？なんだっていうんだ…。

実はわかつちゃってる。とうにわかつてる。手から伝わってくる緊張で、思い切り俺はそれを感じちゃってる。

俺、桃子ちゃんが、すげえ可愛いんだ…。俺のためにいろいろと頑張ってるのもわかるし、今だって、すごく緊張してるのもわかるし。

手はすごく小さくて、でもあつたかくつてやわらかくつて…。

俺の顔も、真っ赤になってるかもしれない、振り返ることができなかった。俺はだから、ずっとずっと、前だけを見て歩いていた。

水族館は、連休だからか、混んでいた。

「はぐれないように、手つないどく？」

って聞いてみた。

「……」

桃子ちゃんは、なんにも言わずに、かすかにこくってうなづいた。か、可愛すぎる。やばい……！表情とか、仕草とか、どれをとっても可愛い。そのたび俺は心で、叫んだ。

「やばい！」

イルカを見て喜んでる桃子ちゃんも、深海魚を見て、少し怖そうにしてる桃子ちゃんも、熱帯魚を見て、綺麗だって目を細める桃子ちゃんも、どの桃子ちゃんも可愛い。

俺は、魚どころじゃなくって、ずっと、桃子ちゃんを見ていた。

目が合いそうになると、俺はふって視線を外した。それから、また、桃子ちゃんを見た。

手はずつつないでた。少し震えてた桃子ちゃんの手は、だんだんと震えなくなってきた。俺の手に全部を預けてる感じがして、それがまた、嬉しくって……。

ゆつくりと水族館を見て回ってから、昼を食べに行くことにした。

昼といっても、2時近かったけど、水族館の周りのレストランは混んでいて、俺は、少し離れたお店に桃子ちゃんを案内した。

そこからも、海が見えて、桃子ちゃんは喜んでいた。

二人で、注文を済ませて、水を飲んで、

「水族館、満足した？」

と、聞いてみた。

「うん、とっても。ありがとう。楽しかった」

桃子ちゃんは、そう言うと、少し悲しげに視線を下げた。あれ？なんで、そんな表情をするんだろうか。

「本当に？」

「え？うん……」

「でも、なんか、さみしげだよ。ほんと、みんなで回リたかったとか？」

「ち、違う……」

桃子ちゃんは慌てて、顔を横に振った。

「ただ……」

「うん」

「これで、もう、聖君とも会えないのかなって思ったら、なんか……へ？」

「なんか、寂しいなって……」

「……。え？」

「ごめんね。こんなこと言ったら、困らせるよね」

「え？なんで？」

「なんでって、だって……。もう、なんの接点もないし。なのに、私がこんなこと言ったら、聖君、優しいから困っちゃうでしょ？」

「……」

え？接点がなくなる？

「……。今日はいいい思出になった。ありがとう。忘れないね、私……」

そう言って、桃子ちゃんにこって微笑むけど、目が泣きそうになっただ。

「えっと……。接点がなくなるって、どういうこと？」

「だって、もう会う必要もないし」

「え？なんで？これからだって、6人でまた会えばいいじゃん？」

「でも、でも、聖君、今日も菜摘と一緒にいるの、辛そうだった。本当は会うのも、辛いんじゃないの？」

「う、うん……」

そうか、見抜いてたんだ。

「そうだよな…。まだ、好きだよな」

「……」

いや、そうじゃなくて。でもまさか、憎らしく思えてなんて言えないよな。だいたい、ついこの間まで菜摘ちゃんが好きだったのに、今、思い切り桃子ちゃんが好きになつてるとも、言にくい。

え？思い切り好きになつてる？思い切りつて今、思った？俺…。

「あ…」

慌てて俺は、下を向いた、今、瞬間絶対に、顔が赤くなつてたはず…。

やばい。

やばい。

ばれた？

そつと、桃子ちゃんを見たら、ハンカチで目を拭いていた。わあ！泣いてるんだ。

俺が赤くなつてゐるのなんて、見てない。それより、泣いてるんだ！何か言え！俺！泣かせてどうする？もう俺に会えないって思つてるんだよ？！

「じゃ、二人で会えばいいじゃん」

「え？」

「俺と、二人で」

「ううん。いいの…」

「え？」

「そんな、私のためにしてくれなくてもいいよ。悪いもの」

ああ。もつと、欲を出してくれ。俺とさつさと別れる方選ばないでよ。

「いや、でもさ。これもなんかの縁だし、そんないきなり、さよな

らってしなくつても、いんじゃない？」

「え？」

「俺もそのうち、菜摘ちゃんに会っても、なんとも思わなくなるかもしれないし」

「でも…」

「……」

でもじゃなくて…。ああ、じれったい。俺、なんとかしろよ。

「それに！言っとくけどさ、乗りかかった船だよ。もう降りるつもり？」

「え？」

「俺が、傷ついてるの助けってくれようとしたんでしょ？今日もさ」
「うん…」

「じゃ、こんな中途半端で、投げ出さないでよ」

「投げ出すって？」

「一応ね、俺、まだ傷ついてる最中だし。その…。俺と父さんのこと知ってるのは、桃子ちゃんだけだし、他に相談する相手もないんだよ？俺」

「うわ、なんてずるい、卑怯なこと言ってるの？俺。」

「そっか。そうだよな…」

桃子ちゃんは、そう言うつと、少し考え込んだ。

「でも、私でいいのかな」

「いいも何も、桃子ちゃんしか知らないことだし」

「でも、それ、しかたなく話したことでしょ？」

「う…」

ああ、困った。どうすりゃいいんだよ？！

「だ、だとしても…」

もう、俺のほうも、しどろもどろだ。

「ごめん。わかった。私、相談に乗る。途中で投げださない」

「……」

桃子ちゃんの顔つきが、いきなり変わった。

「私が、なんの役に立てるかわからないけど……。でも、何かの役に立てるなら嬉しいし」

桃子ちゃんは、俺のことをしつかりと見てそう言った。

「……」

今までより、ずっと桃子ちゃんが大きく見えた。

「うん。思い切り、役に立っていると、思う。もうすでに」

俺は、その桃子ちゃんの力強い目に、驚いていた。

「ほんと？」

少し不安げに、桃子ちゃんが聞いた。

「ほんと！」

俺は、力強くそう答えた。

「良かった……」

桃子ちゃんは、ほっとした顔でそう微笑んで言った。

その笑顔は、たとえるなら、綿菓子。ふわってしてて、甘くて、白くて……。

やばい……。今の俺、どんな顔をしているだろうか。どんな目で、桃子ちゃんを見ちゃってるんだろうか。視線を外して、なんとなく海を見て、思わず、

「ああ、海、綺麗だよな……」

つて、ごまかした。桃子ちゃんも海を見て、綺麗だねって答えていた。

4 最悪な事態

俺が家に帰ると、リビングで父さんと杏樹がテレビを観ていた。

「お帰り」

「……」

黙って俺は、その横を通って店に出た。たいてい、夜は店の手伝いをしている。バイト代もしっかりともらっている。

キッチンで、洗い物の手伝いを始めると、母さんが小さな声で聞いてきた。

「聖。あなた、少し無理してない？」

「え？何が？」

「菜摘ちゃんのこと。けっこうわざとらしかった」

「何？何が？」

「桃子ちゃんと二人で、行動させてくれて……。見てて、ちょっと無理してるなって」

「そのことか……」

俺は、そのまま黙って、洗った食器を拭き出した。

「ね。桃子ちゃん、もしかして、あなたのこと好きなんじゃないの？」

「え?!」

俺はびつくりして、思わず、拭いてたお皿を落としそうになった。

「な、なんで？」

「だって、見ててそう思ったのよ。それをあなたが、二人で行動したいなんて言ったら、桃子ちゃん勘違いしない？あとで、傷つくんじゃない？」

「……」

俺は、また、黙り込んだ。

「どうするの？こんな形でまるで、付き合ってるみたいになって、あなた、どうする気なの？」

「どうするって、別に。桃子ちゃんとは付き合うよ。ちゃんと」

「あなた、自分が何をしてるかわかってるの？そんな、菜摘ちゃんの代用品みたいに」

「代用品？」

「あ、言い方が悪かった。そうね、代わりじゃないわね。あ、でも、もつと悪いんじゃない？桃子ちゃんのこと利用してる」

「…利用？」

「いくら、菜摘ちゃんのことを忘れるためとはいえ」

利用？俺が？桃子ちゃんを？

しばらく黙って、俺は食器を片付けながら、考えた。母さんは、オーダーが入り、すぐにそれを作り始めた。その横で、俺はぼくっとしながら、考えていた。

客がみんな帰って、店の片付けを、俺と母さんとパートさんとしていた。それが終わると、パートさんは帰って行き、母さんはリビングに上がり、俺にもコーヒーを淹れてくれて、ひと息ついた。

だけど、俺はまだ、考え込んでいた。

そうなんだ、一回考え出すと、ずっと悩んでしまふ。だから、いつも、そうなる前にリセットをする。

でも、今回はもう、悩み出しちゃっていた。

黙ったまま、テレビをぼくっって観ていると、それになんとかく気づいた父さんが、

「疲れたのか？」

と聞いてきた。杏樹はどうやら、風呂に入っているようだった。

「いや、別に」

とそれだけ言つと、

「悩み事か」

と、父さんが言った。

「……」

俺は何も答えなかった。

「桃子ちゃんのこと、まだ、考えてた？」

母さんが、口をはさんできた。

「え？」

「桃子ちゃんって、あの小さくて可愛い子が」

父さんが、母さんに聞いた。

「ちよっと気になって。桃子ちゃんのこと……」

そう母さんが言った。

「菜摘ちゃんのためとはいえ、桃子ちゃんのこと傷つけたりしないかしらって」

「ああ、そうだな。俺も少し気になった。お前の態度……」

父さんまで言ってくる。

「あのさ……」

なんか、だんだん頭に来た。

「俺の問題だし、口出さないでくれない？」

そう言つと、父さんはそうかつて顔をしたけど、母さんが怖い顔になった。

「でも、自分が傷つかないようにするために、誰かを傷つけるのはよくないわよ」

いつになく、母さんの口調は荒かった。

「くるみ。そんなに怒らないでも」

父さんが、そう言いかけたけど、母さんは、

「あの桃子ちゃん、すごく可愛くて、なんか健気で、それなのに平気で傷つけるようなこと……」

「ちよ、ちよっと待って」

俺は口をはさんだ。

「傷つけてないから、俺」

「でも、あんな態度取ったら、桃子ちゃんが勘違いする。あなたが桃子ちゃんのこと好きだって」

「……」

俺は、多分赤くなつた。

「なんだ、そういうことか」

父さんが言った。

「え？」

母さんが、不思議そうな顔をした。

「ふゝん……」

父さんが、意味深に俺の顔を見た。

「何？なんなの？爽太」

母さんは俺と、父さんの顔を交互に見た。

「桃子ちゃんと付き合うの？お前」

「多分……」

「多分って、あなた」

母さんがまた、俺を怒ろうとしていたが、

「くるみ。口出すのはやめようよ」

と、父さんが言った。

「でも……」

「俺、そんなに生半可な気持ちじゃないよ。そりゃまだ、俺の気持ちには桃子ちゃんに言っていないけど」

「え？」

母さんが、目を丸くした。

「でも、あなた、菜摘ちゃんのことを……」

「そうなんだけど」

俺は、言葉に困ってしまった。

「これも、全部、必要で起きてることだ。ま、流れに任せてみようや。ね、くるみ」

父さんは、母さんにそう言った。

「…そ、そうね」

母さんは、いまいち納得がいけないようにも見えたけど、父さんのにつこり微笑んだ顔を見て、

「そうよね。わかった。聖のこと信じる」

と、きっぱり言った。

俺は、杏樹のあとに風呂に入り、それから2階に上がった。

部屋で、ぼくくっしてしていると、葉一から電話があった。

「あのあと、どうした？」

って聞いてみると、水族館には行かず、海をぶらぶらしたらしい。それからご飯を食べて、菜摘ちゃんは帰ったとか。

「そっちは？桃子ちゃんとどうだった？」

「水族館に行ったよ」

「で、これからも桃子ちゃんと付き合うのか？」

「うん。そのつもりでいるけど」

「菜摘ちゃんが、二組もカップル生まれて、寂しいってさ」

「何それ？」

「6人ではもう、集まらないかなって言ってた」

「ふうん」

俺は、それに対して、なんのコメントもできなかった。

「なんか、寂しそうだったし、つまらなそうだったし」

「そこをお前が、盛り上げろよ」

「桃子、聖君のことが好きだったから、良かったって言いながらも、なんか寂しそうだったよ」

「……」

なんも言えなかった。

「こんなこと、今さら言うのもなんなんだけどさ」

「何？」

「菜摘ちゃん、お前のが好きなんじゃないかな」

「バカ言えよ」

「だって、お前のことばかり話してたし、中学の時から一緒だったって言ったら、お前のことあれこれ、聞いてくるしさ」

「……」

なんで、そんなこと言うんだよ。そんなこと言われても、困るだけだよ。

「お前、ほんとに桃子ちゃんのこと」

「好きだよ。だから、付き合うよ」

「菜摘ちゃんが、お前のことを好きでも？」

「関係ない。もう、俺、菜摘ちゃんのこととは、なんとも思っていない」
「……」

「葉一、お前菜摘ちゃんのが好きなんだろう？もっと、積極的に行けよ」

「うるさいよ」

葉一の声は、沈んでいた。どっちからともなく、電話を切った。

菜摘ちゃんが、万が一俺のことが好きでも、どうにもならないことだ。さっさと俺のこと、嫌うなり、忘れるなり、あきらめるなりしてくれなくちゃ…。

なんか、頭の中がぐるぐるしすぎて、痛くなってきた。

俺は、いつものごとく全部を忘れて、寝ようとした。でも、なかなか頭痛がおさまらなくて、その日は寝れなかった。

翌日も休みの日。3連休だ。

ゆっくりと寝坊をしてから、一階に行き、リビングで軽くトーストを食べた。

それから、また自分の部屋に行き、PCを開いた。また、父さんの「自叙伝」の続きを読んだ。

.....

くるみに会いに、五月ちゃんが店に来た。

俺と友達でいいから、またよりを戻して欲しいと言って来たから、もう、彼女がいるって話したら、そんなの信じないと言って、確かに来たらしい。

くるみと俺と、五月ちゃんの3人で話をした。いや、話をしたっていうよりは、一方的に五月ちゃんがくるみに言い寄ったって感じだ。

くるみさえいなかったら、俺とは別れてなかったとか、くるみが俺のことをとったとか、俺のことを返してとか、もう、聞いてても呆れるぐらいのことを言っていた。

途中、いきなりくるみは「ごめんなさい」と言っ、泣き出した。大泣きだった。

俺は心配になって、くるみのことを抱き寄せた。くるみは、俺の背中に腕を回して、わんわん声をあげて、泣き出した。

それを見て、1番興奮したのは五月ちゃんだった。

くるみは、俺のことが大事で、俺がいなくちゃ、生きていけないから、離れられないって言った。そうしたら、五月ちゃんは、くるみが本気で俺のことが好きだってわかって、納得して帰っていった。

そのあと、くるみは、稔さんと梨香さんに会うと言い出した。

俺とくるみと五月ちゃんの関係が、まるで、稔さんと梨香さんと、くるみの3人にだぶって見えたそう。

くるみは、梨香がきつと、今でも苦しんでいると思うと言って、

大好きな人を苦しませたままではいられないと言った。

二人のことを憎んでいたくるみは、自分が幸せになることで、二人のことを許せるようになってたんだ。

くるみが、梨香さんの立場に立って、俺が、稔さんの立場に立ってみて、初めて、二人とも悪くなんか無いってわかったって言った。俺は、すべてを許そうとしているくるみを、すごいって思った。そして、そんなくるみをちゃんと受け止めて、俺も一緒にその場に行こうって決心した。

稔さんは、初め、俺がその場にいることを、気に入らなかったようだ。でも、くるみは、俺と一緒にいると、安心するからと言った。そして、くるみは、二人に謝ってた。二人を憎んで、二人とも苦しめばいいって思っていたことも、自分勝手だったことも。

そして、二人とも大好きだったということも、ちゃんと二人に告げていた。

自分は幸せだから、二人も幸せになって、私は、もう大丈夫だから、そう言いたくるみは、ものすごく大きくて、優しくて、力強く見えたよ。

そのあと、二人がどうしたかは知らない。でも、この前結婚しましたって葉書をもたらった。ありがとうって書いてあったよ。

くるみは、それを見て、すごく喜んだ。でも返信はしなかった。電話もしなかったし、連絡もなかった。多分、聖のことがあるからだろうな。聖が、稔さんの子だったことは、稔さんには言っていなかったから。

.....

ドアをノックして、杏樹が入ってきた。俺は慌てて、PCを閉じた。

「あ、怪しい。変なサイト見てたんじゃない？」

「ちげ〜よ。ノックしたら、返事があるまで、開けるなっっていうも言ってるだろ！」

「そうだっけ？あ、それより、勉強教えて」

「また？」

「数学、この公式わけわからないんだもん」

「中1レベルでそれは、まずいんじゃない？」

「うるさいな。理数得意でしょ？私は苦手なの。いいじゃん、減るもんじゃなし」

「時間が減る」

「教えて！！！」

ちえ、しょうがない。と思いつつ、杏樹の部屋に行つて、勉強を見てやることになり、「自叙伝」は一回、打ち切ることになった。

6時、店に出て、手伝いを始めた。ランチとティータイムが混むうちの店、夜はけっこうすいている。それでも、連休中だからか、今日は夜になつても、満員だった。

母さんとも、パートさんとも話をすることなく働いて、8時半ようやく、ひと段落ついた。

「ほら、今のうちに食べちゃって」

俺のご飯を母さんがカウンターに持つてきて、俺は食べ始めた。キッチンで、忙しそうに動いてる母さんを見ていた。母さんは、すげえな。稔って人も、梨香って人も許しちゃったんだ。いつときは、死ぬほど辛い思いをしたらどうにさ。

夕飯を食べ終え、店の片付けも終わって、リビングに戻ると、携帯に着信があることに気づいた。見ると、葉一だった。

俺は、部屋に行つてから、葉一に電話をした。

そうしたら、今から駅の方に出て来れないかって、言われた。声からして、かなり深刻な感じ。

また、菜摘ちゃんからみのことだろうなって、ぴんときた。

「ちよっと、葉一と会ってくる」

と、母さんに言って、玄関を出た。

駅までは、歩いてそんなにかからない。駅まで行くと、駅のまんな前のコンビニで、葉一は雑誌を読んでいた。

コンコン。外から店のガラスを、たたいた。俺に気づいた葉一は、コンビニから出てきた。

「何？こんな時間に」

もう、9時半は過ぎていた。

「ああ、わりい。ちよっとさ」

そう言いながら俺たちは、海に向かう道を歩き出した。

「俺、今日、新百合ヶ丘まで行ってきた。菜摘ちゃんに会いにさ…」

「そうなんだ…」

「それで、こくつてきた」

「え？」

いきなりの展開で、驚いたけど、やるじゃんって内心思ってた。

「で…、ふられた」

「…え?!」

これまた、いきなりの展開というか、なんというか。なんて言えはいいかわからず、俺は黙っていた。

「それがさ。好きな人がいるって言われてさ…。誰だと思う?」

「…さあ?」

「聖、お前だつて」

「え?!!!!!!!」

もう、頭の中は真っ白。言葉を返すどころじゃない。

「お前には黙って欲しいって言われたけど、俺、言っちゃったんだ。聖は、俺が菜摘ちゃんのことを好きだって知って、身を引いただけだ。聖も、菜摘ちゃんのことを好きだよって」

「な、なんでそんなこと?!」

「でも、菜摘ちゃんは、桃子に悪いからって言ってた」

「……」

まだ、頭の中は真っ白。

「だけど、好きあつてるのに、お互い、誰かの犠牲になつてるなんておかしいだろ? 俺、聖は桃子ちゃんのこと、本気じゃないって言った。桃子ちゃんが、聖のことが好きだって知って、それで、付き合うことにしただけだって」

「……」

何それ…。なんで勝手にそんなこと。

「だから、そんなの聖のためにも、ならないって俺、言っただ」
「……」

ちよ、ちよと待てよ。

「菜摘ちゃんはそれ聞いて、泣いてた。自分がもつと早くに、素直になつてたら、桃子も傷つけないですんだのにな……」

「ちよ、ちよと待て」

俺は、ようやく声が出た。

「だから、お前無理しなくてもいい」

「何を?」

「好きな子は菜摘ちゃんだろ? 無理して桃子ちゃんと付き合わなくても」

「違うよ! 桃子ちゃんが好きだって言ってたんだろ?」

「そんなの、まるわかりだよ。見ててわかるんだよ。何年お前の友達してると思ってるの? 昨日だって、見え見え。いきなり二人で行動したいって、お前の性格から言って、たとえ付き合い出しても、

女より友達取る。4人で行動するようにするだろ？」

「……」

た、確かに昨日のは不自然だった…とは思っけど。

「俺のためだろ？」

「桃子ちゃんとは、別れる気ない」

「なんで？」

「傷つける気もない」

「菜摘ちゃんは？」

「桃子ちゃんが好きになっただよ。悪いかよ」

「悪いよ。そんな見え見えの嘘」

「嘘じゃねえよ」

「だったら、証拠見せろよ」

「はあ?!」

「お前見てりやわかる。お前と桃子ちゃんが一緒にいるところ見てたら、お前が本気かわかる」

「まじで?何言ってるの?」

「また、6人で会おう」

「え?」

「そこで、俺、お前と桃子ちゃん見てっから」

「6人って、菜摘ちゃんも呼ぶのか?」

「呼ばなきゃ、不自然だろ」

「でも、来るのか?」

「来るよ。菜摘ちゃんも、それ、確かめたいって思ってると思うよ」
「……」

ああ。思考回路が、止まったままだ。なんで、そんなことになっ
てんの?

どすん…。気持ち沈む。

俺は、葉一が帰った後も、一人でしばらく海を眺めてた。

それから、桃子ちゃんに電話した。そして、葉一が言ってたことを、全部話した。

「菜摘が？聖君のこと？」

「うん」

「じゃ、私に遠慮して、ずっと…」

「いいんだ。それは…。それより、ちゃんと俺のこと、あきらめてくれないと困るんだ」

「え？あ…。そうだよね」

「あのさ。変なことお願いするけどさ…」

「え？」

「6人で会ったら、俺と付き合ってるって言って。それで、仲いいふりして」

「うん…」

俺は、言うてから、あ、なんか変なこと言うてるって思った。そもそも、俺、桃子ちゃんが好きになってるし、そんなことをお願いしなくても、自然にふるまってたらいんじゃないのか？

っていつか、桃子ちゃんにそんな「ふり」をお願いしなくても、好きだから付き合ってるって言えばいいことじゃないのか。

いや、この状況でそんなこと言っても、桃子ちゃんは、遠慮するかな。菜摘ちゃんに悪いとか、言い出すかな。

「ど、どんなふうにしたら、仲よく見えるかな？」

「え？」

「私、どうしたら…」

「あ、ああ。そうだな」

「うん」

「普通でいいや」

「え？」

「普通にしていよ。でも、なるべく俺のそばにいて」
「うん…」

「変なこと言ってるよね俺。ごめんね」

「ううん。全然…」

「じゃ、えつと、多分会うのは、来週の週末かな」

「うん、わかった」

「学校で、会うんだよね？菜摘ちゃんに」

「ん。大丈夫。何も聞いていないふりするから」

「ごめんね、なんか、嘘ばかりつかせてるね」

「いいよ。大丈夫」

電話を切ったあとにも、後味が悪いような変な気持ちだった。

「あ~~~~あ、星綺麗じゃん」

空を見たら、星がいつぱいで、やけに綺麗だった。

「これ、母さんが言うように、利用してるってやつかな」

俺は、なんだか、桃子ちゃんに、ものすごく悪いことをしている
気持ちが出てきた。

「てかさ~~~~、なんでふり？」

頭をかかえた。また頭痛だ。なんだか、本当に、変な方向にどんどん
いってて気がして、ならなかった。

5 疑惑

父さんの「自叙伝」をまた、しばらく開くことはなかった。頭の中はそれどころじゃなかったからだ。

でも、俺はいつの間にか、菜摘ちゃんを「憎む」気持ちはなくなっていた。多分、自叙伝を見て、母さんが菜摘ちゃんの両親を許したのを知ったからだ。

母さんが許しているのに、俺が怒っててもしかたがないことだ。それに、菜摘ちゃんには何も、憎む理由なんかなかった。どつちかっていえば、血がつながってる兄妹だ。杏樹のように、愛しいって思うほうだろうに。でも、やっぱり、妹っていう感覚は持てなかった。

杏樹が、リビングでテレビを観てる時に、俺は聞いてみた。

「杏樹さ、もし、誰かが杏樹のお兄さんだよって現れたら、どうする？」

「え〜？何それ〜？そうだな。すごいイケメンで、金持ちとか、どっかの国の王子様なら、喜ぶかも」

「ま、待つて。それ、俺がイケメンじゃないって、ことかな？」

「うわ！自分のこと、イケメンって思ってた？わ〜きしよい！」

「ええ？」

「うそうそ〜。お兄ちゃんのファン、多いんだよ。私の友達たまに、勉強しにくるでしょ？あれ、お兄ちゃんに会いに来てるの。知ってた？」

「ああ、それで、なんか、きゃ〜きゃ〜いつも、うるさいわけね」

「彼女もいないって言ったら、みんなさわいでた」

ああ、そう…。っていうか、俺、何を聞きたかったんだっけ？

土曜日がやってきた。その間、時々、桃子ちゃんがメールをくれ

た。

>今日は、菜摘、元気がなくて、ちょっと心配しました。
とか、

>菜摘の前で、聖君の話はした方がいいのか、しない方がいいのか、悩みます。

とか…。

菜摘ちゃんのことを、あれこれ、心配している様子が目に見えてわかるようだ。

ああ。こんな状況で、不謹慎だけど、俺は、そんな桃子ちゃんのことでも可愛いなって思っちゃってるんだ。

で、土曜。いよいよ、土曜だ。

みなとみらいの駅で、11時に待ち合わせをした。こっちは3人で、江ノ島から、向こうも3人で落ち合っ一緒にやってきたようだ。

みんなが集まってから、赤レンガ倉庫に向かった。赤レンガ倉庫に着き、それぞれ、アイスを買って、ぶらぶら歩きながら食べた。

みなとみらいの駅から、ずっと菜摘ちゃんは、蘭ちゃんに話しかけ、ひつついて歩いてて、それで仕方なく、基樹は葉一や、俺と一緒に歩いていた。

俺の横には、桃子ちゃんがなるべく距離を開けないように、くつついて歩いていた。でも、歩くだけ。話すでもなく、手をつないでくるわけでもなく、必死にくつついてきてるだけ。

基樹も、葉一も、いつもどおりの歩幅と速さで歩くから、一緒に話して歩いてる俺も、自然とその速さで歩くようになり、その横にくつついてくる桃子ちゃんは、小走りにならずには、いられなかったようだ。

たまに、ちらって見ると、顔もけっこう必死で…。すんげえ、可

愛い。

「あ…」

ちよつとこけそうになって、もたついた桃子ちゃんは、俺とだいぶ差がついてしまつて、慌てて、走つてこようとしたけど、

「危ないよ。走つたら」

つて、桃子ちゃんが来るのを、止まつて待った。

「ご、ごめんなさい」

つて言つて、それでも小走りでかけてくる。

「歩くの早かつたね。ごめん」

俺はそう言つて、手を出した。

桃子ちゃんは、なかなか手をつなごうとはしなかったけど、

「はい、手」

つて俺が言つと、ようやく手をつないだ。その様子を基樹が見て、

「やつぱり？二人付き合つてるの？」

つて俺に、聞いてきた。

「うん」

つて言つと、

「そつかゝゝ！じゃあさ、今度ダブルデートしようぜ！」

とはしゃいだ。こいつはのん気なやつだつて、ほんとに思う。その横で、少ししかめつつらをしている葉一は、無愛想な顔で、桃子ちゃんを見て、

「なんか、必死だね」

と言つた。それを聞いて、桃子ちゃんは、固まつてしまつていた。

また、歩き出したら、桃子ちゃんは、小声で、

「どうしよう…」

つて、ぽつりと言つた。

「何が？」

「だって、必死だって。なんか、ばれたかな…」

「はは…、大丈夫だよ。いつもどおりにしてれば」

俺は、にぎってる手にぎゅって力を入れた。

「うん…」

それでも、桃子ちゃんの顔は緊張してた。

俺は、はなっから「ふり」をするつもりはなかった。普通に、自然体でいても、桃子ちゃんのことを好きだってことは、葉一に伝えるんじゃないかって思ってたからだ。

アイスを食べ出しても、菜摘ちゃんは、俺にも葉一にも、近づいてこなかった。特に、葉一には、目を合わせようとしてもしていなかった。だけど、蘭ちゃんたちとおおはしゃぎをしていて、笑って陽気にふるまっていた。

そのまったく、正反対で、桃子ちゃんはほとんど、しゃべらなかった。普通にしていって、言ったんだけどな…。

「それ、何アイス？」

と聞くと、ようやく、

「イチゴ」

と、一言返す。

「うまそう。ちょっと俺のと交換して」

って言って、少し桃子ちゃんのアイスをもらうと、ますます顔をこわばらせる。

「こっちも食べてみる？メロン味」

「え?!」

って、桃子ちゃんは驚いて、回りをきょろきょろと見てから、

「うん…」

と、恥ずかしそうに言う。でも、からだが固まったまま動かないから、しかたなく、小さなスプーンにすくって、食べさせてあげると、真っ赤になって、もっと固まってしまった。

そんな表情を見てて、俺は思わず、笑ってしまふ。すげえ、可愛

い！って、心の中で思いながら。

ふと、視線が気になり、顔をその視線の方に向けると、葉一がこっちを見てて、目が合うと、目をそらしていた。

それから、しばらく海を眺めたりしてから、みんなで、ワールドポーターズに繰り出して、昼ごはんを食べることにした。

6人で、大きなテーブルを囲んだ。蘭ちゃん、菜摘ちゃん、桃子ちゃんの順で席に座り、その前に、基樹、葉一、俺が座った。

ご飯を食べてても、菜摘ちゃんはずっと、蘭ちゃんや、基樹と話をしていた。俺は、普通にご飯を食べてて、葉一は、時々桃子ちゃんに話しかけていた。

桃子ちゃんは、ずっと緊張したまま。ご飯もあまり食べれていない状態だった。

「桃子ちゃんって、彼氏今までいたの？」

葉一が聞く。

「うっん…」

桃子ちゃんが答える。

「じゃ、今回が初めての彼氏？」

「え?!」

桃子ちゃんは、驚いてから俺の顔を見る。

「俺が、彼氏1号なんだ。へへへ」

俺が言つと、桃子ちゃんは、また、緊張した顔をして、

「うん、そうなの…」

つて、小さな声で言う。

「そっか。で？二人でもう、デートとか行つた？」

「まだ…」

桃子ちゃんは、正直に答える。

「二人で会うことって、なかなかないし。ああ、この前、水族館に

行っただくらい？」

「って、俺が横でそう言っと、

「あ。そっか。水族館に行った」

と、ちよつと棒読みで桃子ちゃんが言う。

「ああ、あんとき。別行動した時。ほんとに、水族館行ってたんだ」
葉一は、桃子ちゃんのことを疑った目で見ながら、そう聞いた。

「うん…」

桃子ちゃんは、顔を下に向けたまま、うなづいた。

「楽しかったよね？」

俺がそう言っと、また、桃子ちゃんは無言づく。

「何が1番印象に残った？」

意地悪く、葉一が聞く。まじで、こいつ、疑ってるの？

「え？イルカかな。イルカの水槽で、自由に泳いでるところ…」

「ああ、あれね。他には？」

まったく表情を変えずに、葉一は聞いた。

「熱帯魚も綺麗だった」

「ふうん。他には？なんか印象に残ったこととかなかったの？それ、
初デートでしょ？もしかして、人生初のさ…」

「え？あ！そうか…。そうだったんだ…」

桃子ちゃんは、真っ赤になった。それを見て、葉一の表情が少し
変わった。

「初デートか…」

俺も、つぶやいた。

「混んでたよね？そういうえば。連休中だったから」
って、俺が言っと、

「あ、うん。それで…」

桃子ちゃんが、何か言いかけて、やめてしまった。

「それで、何？」

葉一が、聞いた。

「ううん…」

桃子ちゃんが、首を横に振ったけど、葉一はまだ、

「何？混んでてどうしたの？」

と、しつこく聞いてた。

「混んでるから…、ああ、もしかして、俺と手をつないでずっと歩いた…とか？」

俺が、なんとなくそう言っていると、いきなり桃子ちゃんは顔を上げて俺を見てから、また、うつむいて、真っ赤になった。

あ、あれ？それ言おうとした？なんか、こっちまで恥ずかしくなってくる。

「ふうん…」

葉一はそんな桃子ちゃんと俺の表情を見て、それから、もくもくと、ご飯を食べ出した。桃子ちゃんは、もう、食べれないのか、フオークもスプーンもおいてしまった。

「もう食べないの？」

自分の分をぺろって食べ終わった俺は、桃子ちゃんにそう聞いた。

「うん。お腹いっぱい」

「じゃ、俺食べていい？」

「うん」

俺は、桃子ちゃんの分もがつつと食べた。

それから、6人で、展望台に上ろうってことになって、ランドマークタワーに移動した。天気が良くて、眺めは最高だった。

俺は、桃子ちゃんと二人で、その絶景を眺めていた。

「すげえ、車がミニカーに見える」

「ほんとだ〜」

二人で喜んでみると、いきなり腕を葉一に掴まれて、

「ちょっと、悪い、こいつ借りるよ」

と、俺を桃子ちゃんからどどん離して、逆っかわに連れて行かれた。

「今日、見てて、よくわかった」

「え？」

葉一が、いきなりそんなことを言ってきた。

「桃子ちゃんがお前のことを、好きだったのは、よくわかった」

「ああ…。そう？」

少しにやけそうになるのを、おさえながら俺は答えた。

「でも、お前はなんも思っていないってのもわかった」

「え？」

「お前、平気で、よく食うし、桃子ちゃんのアイスは食べちゃうし、食べさせてあげちゃうし。本当に好きだったら、お前、そんなことできないだろ？」

「…え？」

何を言ってるんだ。こいつ。

「お前、菜摘ちゃんが好きな時、意識しまくり、話もできない。菜摘ちゃんが前にいたら、緊張もして、のども通らないって状態だったじゃんか」

「ああ、そういえば」

「でも、桃子ちゃんにはでんで、そんな感じじゃない。いや、桃子ちゃんはそんな感じだったけどさ」

「そういえば、そうかな」

「ほら。好きでもなんでもないだろ？」

「それで、好きかどうか、判断するの？お前」

「だって、お前…」

「俺、桃子ちゃん、可愛いよ」

「可愛いだけだろ？妹みたいなもんじゃん」
「妹？」

その言葉に、反応して俺の顔は少し、ひきつった。でも、すぐに和らいだ表情で、

「違うよ。まじで、可愛いつて思ってた…」

と続けた。

「もう、いいよ。演技は」

「演技じゃないって」

「はあ…。それよか、6人で会うのは、やっぱり失敗した」

「え？」

「あんな菜摘ちゃん、初めてだ。なんか、無理して笑って。辛そう
だ。悪いことしたよ、俺…」

「そうかもな。俺に会うのも、お前に会うのも、辛かったんじゃないの？」

「そうだよな…」

葉一は、黙りこくった。

「俺、桃子ちゃんのところ戻るよ。一人で待つてると思うし」

そう言つと、さつさと葉一を残して、俺は桃子ちゃんのところに戻った。

桃子ちゃんはやっぱり、一人でいた。後姿は、やけに小さくて、寂しげに見えた。黙って横に立つと、俺の顔を見て、安心したように笑った。でも、すぐに不安げな顔で、

「どうだった？葉一君…」

と聞いてきた。

「ああ、なんかね。桃子ちゃんが俺のことを好きだったのは、まる
わかりだつてさ」

「え?!」

桃子ちゃんは、それを聞いて真っ赤になった。

「そ、そうなんだ」

「うん、だから俺、言ったじゃん。普通にしたらいいってさ」

「え?!じゃ、いつも、私顔に出てた?」

「うん。すぐに真っ赤になるし、わかりやすいよね」

そう言つと、耳まで真っ赤になった。

「で、俺は、演技をしてるように見えるって言われた。なんでかな」

「やっぱり、友達だね、わかつちやうんだね」

「そうかな」

「うん。わかつちやうんだよ」

少し、沈んだ声で、桃子ちゃんはそう言った。俺は、遠い景色を眺めながら、

「俺、何も今日は演技してないけどな」

と、ぼつりと言った。

「え?」

「菜摘ちゃんを好きだったのと、桃子ちゃんを好きなのと、俺の態度が違って見えるかもしれないけどさ…」

そう言つと、しばらく、桃子ちゃんは黙ってから、

「好きって?」

と聞いてきた。

「だから、好きっていつでも、ちょっと違う」

「?」

目を丸くして、桃子ちゃんは俺を見ていた。ああ、マルチースをつくりの目。可愛い。

「えつと…」

そんな目で見られて、いきなり照れくさくなって、何を言いたいが、わからなくなった。

「そろそろ、おらない?」

蘭ちゃんが言ってきた。

「のど渴いちゃった。ここにもカフェあるけど、どっか別のところに入って、お茶しようよ」

6人で、エレベーターに乗り、また、みなとみらいの駅に向かって、歩き出した。

「スタバあつたよね、この辺に」

蘭ちゃんが、先頭を立っていた。

「その前に、トイレ行きたい」

と、菜摘ちゃんが、トイレに行った。そのあとを、蘭ちゃんも、桃子ちゃんもついていった。

男陣は、トイレからちよつと離れたベンチに座って、待っていた。なんとなく、3人とも何を話すでもなく、ただ、座っていた。

でも、あまりにも、女の子たちが戻ってくるのが遅くて、

「どうしたのかな？混んでるのか、化粧か？」

と、基樹が気になりトイレの方を見た。その時、すごい形相で、蘭ちゃんがトイレから出てきた。

すごい速さで歩いて、こっちに来ると、

「信じられない！」

と、怒っていた。

「どうした？何があつた？」

男3人、ベンチから立ち上がり、心配してそう聞いた。俺はまだ、出てこない二人のことが気になった。

「あの二人、信じられない。もう、友達でいるの嫌になった！」

「え？」

いきなりの、蘭ちゃんからの言葉で、俺ら男どもは、呆然としてしまった。

6 真実の告白

「どういうこと？」

俺が、蘭ちゃんにそう聞くと、

「あの二人、自分のことしか考えてない」と、怒った口調で蘭ちゃんはそう言った。

「え？」

俺には、何が起きているのか、さっぱりわからなかった。

菜摘ちゃんが、顔を真っ赤にさせて、泣きながらこっちに歩いてきた。その後ろから、泣くのをこらえ、顔をがちがちに固まらせている桃子ちゃんが、俺の顔を見ながら、歩いてきた。今にも、泣きそうだ。でも、必死で頑張っているのが、まるわかりだ。

蘭ちゃんは、すごく冷たい視線で、まず、菜摘ちゃんを見た。

「菜摘はね、桃子が聖君のこと好きだからって、いろいろと応援してたの。それで、二人がうまくいったのに、今さら、自分も聖君が好きだったって、言い出して」

「え？」

俺は、びっくりしていた。隣で、葉一も驚いていた。意外にも、冷静だったのは基樹だ。

「なんで、今頃になって？」

基樹は、菜摘ちゃんを見てそう聞いたが、答えたのは蘭ちゃんだった。

「葉君が、聖君も菜摘のことが好きだって言ったからよ」

「何、何でお前そんなこと言ったの？」

基樹は、今度は葉一に向かってそう聞いた。

「私が葉君に、聖君のことが好きだって言ったから。葉君が、悪いわけじゃない」

泣きながら、菜摘ちゃんはそう言った。

「だって、菜摘ちゃんも聖が好きで、聖も菜摘ちゃんのが好きだってわかつちゃったら、言うしかないじゃんか。俺、二人の気持ち知ってんのに、黙っていられなかった」

葉一は、そう基樹に向かって言った。

「でも、なんで、桃子ちゃんのこと、怒ってんの？」

基樹が蘭ちゃんにそう聞いた。

「桃子も、聖君が菜摘のこと好きだってこと知ってたのに、黙ってた。そのまま、聖君と付き合ってた」

蘭ちゃんは、少し桃子ちゃんのほうを睨みながらそう言った。桃子ちゃんは黙っていた。でも、握り締めてる手が、震えてるのがわかった。

「なんか、絡み合ってるな」

基樹がそうつぶやいた。

「桃子ちゃん、こいつは、俺が菜摘ちゃんのことを好きだって言うたから、菜摘ちゃんをあきらめることにしただけだよ。悪いけど……」

葉一は、桃子ちゃんにそう言った。桃子ちゃんは、しばらく、黙ってうつむいていたけど、

「でも、今は、私と付き合ってるし……。今さら、別れてって言われども、別れたくない」

桃子ちゃんは、精一杯の声を出した。それから、唇を噛んだ。

「自分さえ良ければ、いいんだよね、みんな」

蘭ちゃんが、冷ややかにそう言った。

「……」

菜摘ちゃんは、黙っていた。でも、

「ごめんなさい。私がちゃんと、私の気持ちを桃子に言ったら良かった」

と、下を向いて、謝った。桃子ちゃんは、ぎゅって唇を噛んだままだった。

「お前は？お前の気持ちはどうなんだよ」

基樹が俺に聞いてきた。

「俺に遠慮とかいらないからな」

葉一がそう言った。

「俺は…」

そう言いかけた時、桃子ちゃんが俺の方に来て、腕にしがみついた。びつくりした。

「ひ、聖君は、菜摘に渡せない。だって、菜摘、応援してくれてたでしょ？」

目が泳いでるよ。思い切り、演技してるでしょ？それ。

「でも、1番大事なのは、聖君の想いだと思うよ」

菜摘ちゃんは、けっこう冷静にそう言った。

「桃子って、そういう子だったんだ。なんか、男の前だと変わるよね。女友達より男の方が大事？」

蘭ちゃんがそう言うのと、桃子ちゃんの顔色が変わった。でも、

「そ、そうだよ」

って、また無理をした。

「蘭、もうやめろって」

基樹が、蘭ちゃんにそう言った。

「はあ…」

俺は、重いため息をした。何がどうして、こんなことになっているんだか。

「桃子ちゃん、もういいよ」

ぽつりと俺は、桃子ちゃんに言った。我慢して、震えてる桃子ちゃんの唇が、ますます、震えた。

「そんな、頑張って演技しないでも。俺のためにさ…」

「だって…」

そう言つと、桃子ちゃんは、大粒の涙を流した。

「俺、確かに菜摘ちゃんが好きだったけど…。駄目なんだよね。ごめんね」

菜摘ちゃんの方を見ながら、俺がそう言つと、

「駄目つて？」

と、横から葉一が聞いてきた。

「無理して演技つて？なんで、お前のために？なんだよ、なんか隠してるのか？」

葉一、するどいじゃん。

「ふう…」

また、俺はため息をついた。それから、

「しゃべるしか、ないのかな…」

とどこともなく、宙を見てそう言つと、桃子ちゃんが、

「聖君」

と心配そうに、涙を流しながら、言ってきた。

「俺も知らなかったことで、ついこの前、親から聞いた」

「え？」

みんな、いつせいに俺に耳を傾けた。桃子ちゃんはその逆で、聞かないようにしてるようだった。

「菜摘ちゃんが店に来て、母さんが驚いてた。母さん、俺の父さんと会つ前に、菜摘ちゃんのお父さんと付き合ってたんだ」

「…え？」

菜摘ちゃんが、1番驚いた。

「別れたあとに、俺を妊娠してることに気づいた。もう、父さんとは出会ってたあとで…。それで、父さんが、母さんと結婚して、俺のこと子供として育ててくれた」

「……」

みんな、驚いてた。でも、菜摘ちゃんは、真っ青だった。

「俺、菜摘ちゃんとは、血、つながってるんだ。菜摘ちゃん、俺の妹なんだ」

「……」

がくん……。その場に、菜摘ちゃんは座り込んだ。

「菜摘、大丈夫？」

蘭ちゃんが、そばによった。

「桃子ちゃんは、俺が菜摘ちゃんのことを好きだって、葉一と俺が話しているのを偶然聞いちゃって、それで、自分はあきらめるからってさ。俺のこと、応援するって言うてくれた」

「え？」

蘭ちゃんも、菜摘ちゃんも、同時に桃子ちゃんを見た。

「それで、俺、桃子ちゃんに本当のことを話した。でも、絶対誰にも内緒にして欲しいって言った。それに、付き合ってるふりもしてくれって頼んだ」

「じゃ、桃子、全部知っててわざと、さっきあんなことを？」

蘭ちゃんが、桃子ちゃんのことを見ながら、そう言った。

「そうだよ。演技だよ。俺のために。桃子ちゃん、友達思いのいい子だって、蘭ちゃんも知ってんでしょ？」

「……」

「ごめん。桃子ちゃんを悪者にするそこだった。ほんと、ごめん」

「私は、私は全然……」

桃子ちゃんは、思い切り首を横に振った。

真っ青な顔をしたまま、菜摘ちゃんは、座り込んだままだった。「ごめん。菜摘ちゃんには、絶対に言わないようにするつもりだった。それに、多分このこと、菜摘ちゃんの親も知らない。俺の親、

言っていないと思うよ」

「……兄妹？」

やっと、菜摘ちゃんが口を開いた。

「ごめん、葉一。お前にまで黙ってたけど、でも、言ったら、菜摘ちゃんに知れちゃうかもしれないって思って、黙ってた」

「……」

葉一は、黙っていた。

「……」

誰も、口を開かなかった。

「立てる？菜摘」

ようやく蘭ちゃんが、口を開いた。

「うん……」

「ごめんね、菜摘。桃子……。何も知らないで、あんなに怒って」

「ううん」

桃子ちゃんは、すごく小さな声でそう言った。

「私、菜摘のこと、送ってくから。桃子のことは、誰か、お願い」
そう言つと、菜摘ちゃんを連れて、蘭ちゃんと基樹はその場を去つていった。

「桃子ちゃんは、俺が送るよ」

葉一に、そう言つと、

「ごめん、桃子ちゃん。まじで、ごめん、俺……」

と葉一は、桃子ちゃんに謝っていた。

「でも、俺はお前には謝らない。そういうこと隠して、俺に何も言ってくれなかった……」

目を真っ赤にして、葉一は俺にそう言った。

「ごめん……」

俺は、葉一に謝った。

葉一は、そのまま、駅の方に向かって、歩き出した。俺と、桃子ちゃんはしばらく、ベンチに座ったまま、黙っていた。

「ごめんね。桃子ちゃん、俺、変なことに、巻き込んだ」

「ううん」

「あやうく、桃子ちゃん、友達なくすところだった」

「私…。わからない…」

「え？」

「さっきの演技だったか、本当の私だったか…、わかんない」

「どういうこと？」

「私、本当に、離れたくないって思ってたかもしれない」

「俺から？」

「うん…」

そう言つと、下を向いて、泣いているようだった。

「そっか」

黙ったまま、桃子ちゃんはうなづいた。

「…」

俺は、なんて言っていかなかった。

「変だよ。なんでこんなになったのかな」

俺は、ぼつりとそう言った。それから、考え込んだ。そして、

「やっぱり、あれかな。みんなちゃんと自分の気持ちを、しっかりと
言っていたらよかったのかな」

「え？」

「自分の気持ちを隠したり、押さえたり、ごまかさないと、初めから
素直に言っていたら、こんなことにはなっていなかった」

「……」

「俺も、菜摘ちゃんが傷つくだろうって、兄妹だつてことを隠そう
とした。でも…、はつきりと、言わなくちゃいけないことだったん
だ」

「だけど…」

「そうしたら、桃子ちゃんに変な芝居頼まなかった」

「そうしたら、付き合ってるふりもなし？」

「うん」

「そうだよね…」

桃子ちゃんは、ぽろぽろ涙を流して、

「でも、ちよつと嬉しかったんだ」

って言った。

「え？」

「今日もドキドキしてた。ふりしてるってわかってたけど…」

「ふりじゃないって」

「……」

桃子ちゃんは、黙っていた。

「ふりじゃないから」

もう一回桃子ちゃんに言ったけど、桃子ちゃんはうつむいたまま、

「もう、みんなでは会えないのかな。会えないよね。それに…」

とそう言つと、声を詰まらせた。

「俺とも？」

「うん…」

「どうする？会つのやめる？」

「うん…」

「会いたくないから？」

「ううん…」

そう言つと、また、大粒の涙を流して、

「菜摘に、悪い…」

と、ぽつりと言った。

「じゃ、本心は？」

「本心？」

「うん」
「……」

「ね、もうやめようよ。隠すの。さっき言ったじゃんか。自分の正直な気持ちを言わないで隠してて、こんなに混乱した。もう、素直な気持ちでいい？」

「…素直な？」

「そう。桃子ちゃんの素直な気持ち」

「私の？」

「うん」

「聖君は…？」

「え？」

「聖君の、今の素直な気持ちは？」

「俺は、桃子ちゃんとこれからも会うつつもりだけど」

「みんなで？」

「二人で」

「え？」

「だから、付き合っていきたいって、思ってるけど…」

「え？」

「えって聞かれてもな…。えっと…」

「また、まん丸の目で見つめられて、戸惑ってしまった。」

「俺さ、桃子ちゃんが好きだよ」

「嘘…」

「嘘じゃないって」

「でも、菜摘のこと…」

「だよな…。こんなに早くに心変わりって普通、ありえないよね」

「嘘だ…」

「…シヨック？」

「え？」

「こんな簡単に心変わりする男で、ショック？」

「うん。でも、そんなの信じられない」

「そっか…」

俺は、黙ってた。桃子ちゃんも、なんて言ったらいいのかわからない様子で黙ってた。

「俺の素直な気持ちは言った。で、桃子ちゃんは？」

って聞くと、桃子ちゃんは、少しだけこっちを向いて、また下を向いて、

「私は…、聖君と一緒にいられたら…。それだけで、嬉しい」と言った。言ってから、真っ赤になった。

「そっか…」

俺は、それだけ言うと、桃子ちゃんと手をつないだ。

「俺、そろそろ帰らないと…。店の手伝いあるんだ」

「え？」

「駅まで、一緒に帰ろう」

「うん…」

桃子ちゃんと手をつないで、歩き出した。

「菜摘、大丈夫かな」

桃子ちゃんが、ぼそって言った。

「うん、大丈夫だよ。蘭ちゃんもついてるし、お母さんやお父さんもいるし」

「…うん」

「俺もすげえ、ショックだったけど、桃子ちゃんがいてくれたし、母さんや父さんが、ちゃんと俺が大丈夫って信じてくれてたから」

「え？」

「うん。信じてくれてるんだよな。そんでいつも、見守ってくれてたんだよな…」

そうつぶやいて、俺は、桃子ちゃんと歩いた。

家に帰ったら、とりあえず、笑顔でただいまって言おうかな。そんなことを考えながら。

7

俺は、店の手伝いを終えて、風呂に入り自分の部屋に行つて、P
Cを開いた。そして、父さんの「自叙伝」の続きを読み出した。

[illegible]

くるみとは、すぐ気持ちがつながっているような、このままずっと、そばにいられるような、そんな気になっていた。嬉しかった。一緒にいられることが、嬉しくてしかたなかった。でも、くるみが、その頃体調不良を訴え出した。

気持ちが悪いらしく、部屋に閉じこもり寝ているようになった。

俺は、父さんの日記を思い出した。

あ、父さんの日記っていうのはね、聖。母さんが俺を妊娠した時に、毎日、父さんと母さんと、日記を付けてたものなんだ。

その日にあったこと、そして、感動した風景、父さんの写真や、母さんの写真も貼り付けてあるもので、俺の宝物だ。父さんは俺が生まれるまで生きられないと思ってて、毎日毎日、その日記を付けてくれてたんだ。

俺が大きくなった時に、お父さんはどんな人で、何に感動したかとか、すべてを俺に伝えるために。

そこには、毎日の体の調子とかも書かれてて、頭痛がしたり、吐き気やめまいがしたこと、けいれんがおきたことも、書いてあった。それを思い出しちゃったんだ。

あ、そうだ。その父さんの日記は、いつか、聖が大きくなったら
見せるよ。

話は戻って。くるみが、気持ちが悪いと言うから、俺はものすごく心配をした。だって、もし、悪い病気だったらって思ったら、いてもたってもいられなくなつて。

会社の昼休みに、家に戻って、くるみのそばにいようとでも思った。店の定休日だし、家にいるだろうと思ってみたら、もぬけの殻だったことがあつて。

母さんも、くるみもどこに行つてゐるのだろうか、ものすごく心配していたら、二人して家に戻ってきたんだ。

「病院に行つてた」って言つて、真つ青な顔をくるみがしているから、俺はすごくすごく心配した。

母さんは、そんな状況なのに買い物に行くと言い出し、病院での結果はくるみさんに聞いてと言つて、出て行つてしまった。俺は、くるみと二人きりになり、聞き出した。

くるみは、病気じゃないと言つた。病気じゃないのに、具合が悪いつてなんなんだって不思議に思つてたら、妊娠していると聞かれた。

一瞬、頭が真っ白になった。それから、つわりだとわかり、つわりつて、けっこうしんどいんじゃないのかなつて、思った。くるみは店を手伝つてたけど、店を手伝うのも、しんどいかなとか、じゃあ、これから俺が店の手伝いするかとか、でもそうしたら、自分の仕事はどうしようかとか。

本当は、そんなこと悩んでいる場合じゃなかったんだ。もっと、他のことをきちんと、くるみに聞かなくちゃいけなかった。でも、なかなか頭が働かなくてさ。

くるみが、いきなり謝つて、俺は驚いた。え？なんで、謝つてるのかつて。

一瞬のうちに、ぐるぐるいろんなことを考えたよ。

俺の子じゃないのは、わかってた。稔さんの子だ。だって、3ヶ月だって言ってたから。俺とくるみは、会ってまだ、3ヶ月もたっていなかったしね。

それはわかってたけど、何をどうして、謝られたのか。

稔さんと復縁したい。寄りを戻して、稔さんの子として産みたいと思ったのか。だから、俺と別れたいってことか。1番に思ったのはそのこと。

それとも、産みたくないと思ってるのか。

それとも、俺じゃ、父親になる資格なんてないって思ってるのか。それとも、何か別の理由があるのか…。

なんで謝ったのかを聞いても、くるみはわからないと言う。何も考えられないとも言う。だから、俺のほうから、一つずつ、質問した。

くるみは、稔さんと寄りを戻したいのか。くるみは、稔には、梨香がいるって言った。

じゃあ、もし二人が別れていたら？稔さんに子供の話をして、父親になってもらうのか？くるみは、顔を横に振った。

じゃ、産む気がないのか？そうしたら、くるみは、もう稔とは、関係ないし別れたし…と、わけのわからないことを言う。

じゃ、その命を消しちゃう気か？俺は、ちよつと頭にきてた。多分、父さんのこともあって、命を粗末にしたりして欲しくなかったからだ。

でも、くるみは、苦しそうだった。産んだら、この子のことを憎んでしまつかもしれないと。

ああ。そうだ。聖に話さなくちゃね。前に少しだけ触れたよね。くるみは、親から、

「あんだなんか、生まれてこなければ良かったのに」
って言われて、育ったんだ。その辺のことを、少し話すよ。

.....

ブチ。俺は、その画面を消した。それ以上、読めなかった。

俺の母さんが、苦しんでいたこと、その過去をなかなか、受け止められなかったし、それに、俺のことを産んだら、憎んでしまうかもという言葉が、ひっかかっちゃって…。

俺のこと、産みたくなかったのかな。

母さんは、小さな頃から、俺に言ってた。

「生まれてきてくれて、ありがとう」

なんでそんなことを言うんだろう？わからなかった。でも、喜んでくれてるんだろうから、いいやってなんとなく思っていた。

誕生日にも、それを言う。生まれる時に、俺、もしかして何か、大きな病気でもしたとか？なんて、勝手に思ってみたり。でも、聞いても、生まれた時から、ずっと元気だと母さんも父さんも言う。ちよつと、不思議に思ったこともあったけど、あまり気にしないで、今まで生きてきちゃったんだ。

頭の中がもやもやした。

なんで、母さんは生まれてこないほうが良かったって言われたのか。

知りたいけど、知りたくない。俺のことも、知りたいけど、知りたくない。

PCを閉じて、勉強をすることにした。そこへ、
トントン…。

「聖？開けていい？」

って、母さんの声。

「うん。いいよ」

母さんが、ドアを開けて入ってきた。

「あら、勉強？えらいわね」

「ああ…。なんかいろいろと、空っぽにしたいくて」

「え？」

「なんでもない。それより、何か用？」

「悩み事？そんな時に、ますます悩ませて悪いんだけど」

「うん…。何？」

どうやら、深刻な様子。

「明日、菜摘ちゃんのご両親が、お店に来ることになって」

「え？なんで？」

「ちよつと入ってもいい？」

「え？うん」

母さんが、部屋の中に入ってきて、ドアを閉めた。そして、俺のベッドに座った。

「真っ青な顔して、今日、菜摘ちゃんが帰ってきたって、梨香から電話があつたのよ」

「え？」

「れいんどろつぶすのホームページから、電話番号を調べて、かけてきたみたい」

「それで？」

「梨香が、問い詰めたら、菜摘ちゃんが、私と聖君は、兄妹なんだって言って、泣き出したらしくて。梨香が稔にそれを話して、二人でここに来るって決めたらしくてね」

「……」

やばい…。

「梨香も、稔も知らないことだったから。ちゃんと、真実を聞いた

いって言った」

「ごめん、俺…」

「いいのよ。爽太とも話したけど、こうなるように、なっていたのよね」

「え？」

「ほんとね、あなたが生まれる前にきちんと、稔には話さなくちゃいけないことだったんだなって。あなたと菜摘ちゃんが偶然にも出会ってしまったのは、きっと、真実を話さなくちゃいけない、必然性があったんじゃないかって、爽太も言ってた」

「必然…って？」

「偶然じゃない。必要で起きることよ。この世界で起きることはぜんぶ、必然。何一つ、偶然はなく、何一つ、無意味なこともない。そう思ってるのよね、私も爽太も」

「……」

「だから、今回のこともね」

「無意味のことは、ない？」

「うん。きつと私たちも、ううん、みんなが幸せになっていくために、必要なこと」

「今の状況が？菜摘ちゃんにとっても？」

「うん。そう思うけど…」

「…うん。なんとなくわかる気もする。今日思ったんだよ。母さん俺のこと、信じるって言ったじゃん。俺が、大丈夫だって、信じてくれたんだろ？菜摘ちゃんも、真実を知っても大丈夫だって、なんか、そう思ったんだ。真実を言っちゃった後だけどさ」

「……」

「友達もいるし、両親もいるし、絶対立ち直れるっていうか、前に進めるっていうか…」

「聖も、前に進めたの？」

「俺？俺はどうか。ちょっと今、ぐらついてるけど」

「……」

「でも、大丈夫だよ。多分。前よか、落ち着いてるって思う」

「そ？じゃあ、明日も大丈夫よね？」

「え？」

「稔がね、あなたにも同席して欲しいって。稔、あなたには会ったことないから」

「大丈夫なの？」

「誰が？」

「えっと、梨香さんとか……」

「梨香？うん、大丈夫よ。多分」

「じゃ、母さんは？」

「私？なんで？」

「なんか、ずっと辛そうにしてたから」

「え？いつ？」

「菜摘ちゃんと話している時とかさ」

「そう？そうだったかしら……？」

母さんは、しばらく黙って、考えてから、

「ああ。もしかすると、あなたのことかな
ってぼつりと言った。

「俺？」

「だって、好きな子が妹だなんて、かなりきついことだろうなって、
心配になっちゃって……」

「俺のこと心配してただけ？」

「うっ、ん、心配は無用だったみたいだね」

「じゃ、自分が辛いこと思い出してとか、そういうんじゃないの？」

「違うわよ……！もう、とっくにそんなの、乗り越えてるってば」

「な、な〜んだ」

「え？もしかして、母さんのことをあなた、心配してた？」

「え？うん。ちょっと…」

「そうなの〜？ああ、もう！」

「え？何…？」

母さんは、俺のことをぎゅってしてきた。

「わ、何？俺、もう子供じゃないよ。何？」

「いいじゃない。ハグしたって。いつまでたっても、母さんの子じゃない」

「ちょ…」

俺は、照れくさいのか、すぐに母さんから離れた。

「心配してくれてありがとう。でも、大丈夫よ」

母さんはそう言うのと、にこにこしながら、部屋を出ようとして、そして、

「あなたも、桃子ちゃんいるし、大丈夫みたいよね」

と言に残し、ドアを閉め、1階に下りていった。

「…。何、それ…」

俺は、自分の顔が赤くなるのがわかった。ああ、母さんがもう、ここにいないくて良かったって思った。

それにしても、なんだ、俺のことか…。そう思うと、いきなり、肩の力が抜けたような気がした。

「大丈夫…か」

そうだな。母さんがどんな辛い思いをして、育ってきたのかとか、俺を妊娠したってわかって、どんなに悩んだとか、そういうのも全部、知ったとしても、大丈夫なんだよな。な？

と思いながらも、PCは開けられず…。そのまま、勉強の方をして、俺は頭を真っ白にして寝た。

明日のことは、明日だ。どうにかなるさ…、そんな気持ちで。

翌朝、やけに早くに目が覚めた。忘れようとか思いつつも、やっぱり今日のことが気になっていいるのかな、俺は…。

一階に下りると、父さんと母さんは、リビングで話をしていた。

「あれ？おはよう。早いね、聖」

「父さんも早くない？日曜はゆっくり寝てるじゃん」

「うーん、そうなんだけどね。今日はどうもね…」

父さんも、落ち着かない様子だ。

2階から、大きな足音を立てて、杏樹が下りてきた。今日も部活か…。

「え？なんでみんな、起きてるの？今日、日曜だよ」

「ああ、なんか目が覚めちゃって」

俺は、適当にごまかすと、店の方に行った。

「なんか、手伝う？俺…」

母さんにそう言つと、じゃあ、朝食を作るのを手伝つてと言われた。

キッチンで、トーストを焼いたり、ハムエッグを焼いたりした。

まずは、朝いちで部活に行く、杏樹の分を作った。

「ありがと！」

そう言つと、杏樹は、がつがつとそれを食べた。

「お前、花より団子だな」

「ええ？何？なんか言つた？」

「いや…。よく食うなつて思つて…」

ぺろつとたいあげると、さつさと杏樹は、着替えをしに部屋に戻つていった。

俺は、次に、母さんと父さんの分を作った。それをカウンターに

運んでから、自分の分を作って、二人の横に並んで食べ出した。

「何年ぶりだ？会った…」

父さんが、母さんにぼつりと聞いた。

「聖が生まれる前だったから、もう、17年？」

「そんなにたつたんだな…」

父さんは感慨深そうに、そう言っ、それからコーヒを3人分淹れてくれた。

「聖は…、どうだ？」

「え？何が？」

ハムエッグを食べながら、俺は父さんに聞き返した。

「緊張してる？」

「いや、別に」

「… 本当の親に会ったよ？」

「……。別に」

なんだか、父さんの言う、本当の親って何？って思った。父さんは、「本当の親」じゃないの？血がつながっているかどうかって、そんなに重要？

あれ？おかしいな、俺。この前、俺と父さんは血がつながってないって聞いた時には、すげえ腹が立って、本当の親じゃないじゃんかって、思ってたのにな。今は、なんか、血がつながってるかどうかなんて、関係ない気がしてきた。

「お前が、そんなに気にしてないなら、俺も別に、緊張することもないんだけどな」

父さんが、そうぼつりと言った。

父さんにとっても、自分のことよりも、俺のことのほうが心配なんだな。やっぱり、「信じてる」とは言いつつも、心配しているんだな。

「大丈夫だよ。何かあったとしても…」

「え？」

「だから、何かもし、俺が傷つくようなことがあったとしても、父さん、一緒にそれ、乗り越えてくれるんだろ？」

俺は、父さんの自叙伝に書いてあったことを思い出し、そう言った。

「ああ。うん。もちろんだ」

父さんはそう言うのと、にこって笑った。俺もつられて、にこって笑っていた。

食べ終わり、店の手伝いをした。9時にパートさんが来たから、俺と交代をした。

菜摘ちゃんのご両親は、10時に来るそうだから、俺はそれまで、部屋で「自叙伝」を読むことにした。

.....

くるみのご両親は、離婚している。くるみが中学の頃から喧嘩をするようになり、高校の頃は、口もきかなくなり、くるみが、働き出したと同時に、離婚をしたそうだ。

それまでは、くるみがいるからと、離婚もしないで、お母さんは我慢をしていたらしいが、何かにつけ、くるみに、

「あんたがいなかったら、私は幸せだったのに。あんたなんか生まれてこなかったら」

って、言ってたそうなんだ。ずっと、それを聞き、くるみは育ってきた。自分が大嫌いで、生まれてこなかったら良かったって思いながらね。

家にいても、気が休まらないから、遅くまでやっている塾に通っ

ていたらしい。

それから、たとえ一人でも、たくましく生きていけるよう、強い女性にならなければって、そんな思いで、くるみはずっと、生きてきていたんだ。

仕事は、営業。男性並みに働いて、プロジェクトをまかせられるまでにいったらしい。

稔さんは同期で、仕事でもいろいろと支えてくれてたらしいよ。だけど、くるみは仕事を優先にしていたから、徐々に稔さんは、そばで相談に乗ってくれてた梨香さんを、好きになっていったのかもしれないね。

くるみは、稔さんの前で、泣いたこともなかったって言ってたよ。俺の前では、よく泣いてたけどな。俺の前では、自然体でいられるって言うてた。まあ、出会いも強烈だったし、何も隠す必要もなかったのかもしれないね。

俺もなぜだか、くるみの前では、自然体でいられた。1番、自分をさらけだせる、心を開いて接することが出来たんだと思う。

くるみは、今じゃ信じられないけど、働いていた時は、ばりばり頑張っていたようだよ。虚勢を張って生きてきたって言うてた。

お母さんの影響だね。もし、結婚して、子供が出来ても、いつ離婚してもいいように、一人でも生きられるように、頑張ってたみたいだ。でも、そんな生き方、ちょっと寂しいよね。一人で生きていくのが前提の人生なんてさ。

だいたい、なんで、結婚しても、離婚するって思っちゃってたんだか？でも、しょうがないかな。親を見て育ったわけだから。

そうなんだ。くるみはね、自分が不幸になることを前提にして、生きているんだ。幸せ下手、喜び下手なんだ。

人に甘えるのも下手だし、愛されるのも下手だし、だからいつも、

自分が不幸になることに対しての、心配があつたんじゃないかな。それに備えて生きているような気もしたよ。

幸せになることを、選べば、それでいいのにね。

だから、不思議なことを言うんだ。初め、まったく理解ができなかったよ。

お腹の子を産んで、自分が不幸になったら、この子を責める。お母さんのように、

「生まれてこなければ良かったのに」
と、この子を憎むのが怖い。ってね。

変でしょ？なんで、不幸になるの？

「俺のこと愛してる？信じてる？俺、頼りない？」

って思わず、聞いたよ。くるみは、俺が多分、何を言ってるのか、初め理解できないみたいだった。

でもさ、なんかわかってきたんだ、俺。くるみは、ずっと母親に「生まれてこなかったら良かった」

って聞いて、育ったから。その言葉が、恐怖っていうかトラウマっていうか、そんなことをもし、自分が子供に言ったらどうしようって、怖かつたんだろうね。

ほら、親に暴力をふるわれた人が、また、自分の子にも手をあげていたなんてこと、あつたりするじゃない？って言っても、わからないか。

だけど、俺、そんなこと心配しなくてもいいって思って、くるみにも言つたんだ。

「お母さんたちは、不幸になることを選んだ。くるみは、幸せになることを選べばいいんだよ」

ってさ。だって、俺はね、くるみを本当に愛してたんだ。お腹の子もひつくるめて、全部が愛しいんだよ。

そりゃ、人生、何が起きるかなんてわからないよ。だけど、もし、何か大変なこと、辛いことが起きても、一緒にそれを乗り越えたらいいって思うんだよね。

かつて、俺の父さんと母さんがしたみたいにさ。

もし、聖が、俺が実の父親じゃない、血が繋がってないと知って、辛い思いをしていたり、悩んでいたら、その時には俺やくると一緒に、乗り越えたらいいんだ。それだけのことだ。それを今から心配する必要はないんだ。

今は今。今、目の前にある幸せをかみしめようよ。今を大事に生きようよ。俺がそう言ったら、くるみは、いっぱい泣きながら、幸せになってもいいの？って聞いてきたよ。幸せ下手なんだ。そんなとこまで、愛しいと思ったよ。

お腹の子を愛してもいいの？って泣いてた。

当たり前じゃんか…ね？だって、愛するために生まれてくる子なんだし、それに、くるみのことを愛しているから、聖は生まれたんだ。

聖は、天使なんだからさ。

.....

「俺が、天使？」

「俺が、愛するために生まれた？」

「俺を、愛するために、産んだ？」

読んで、文字がぼやけてきた。あ、涙でだ。なんで俺、泣いてんの？

「…俺って、何かすげえの？」

涙が、ぼろぼろと落ちてきた。

「お腹の子を愛してもいいの？」

母さんの言った言葉がしみる。なんか、すごいしみてくる。そして、そんな母さんのことを、愛しいと思ってた父さんのことも、すげえって思えてくる。

「何？父さんはじゃあ、まったく、血がつながってないとか、そんなのはなっから関係なかったんだ」

また父さんのことが、すげえって思えてきて、それを気にした自分分は、ちっちゃいと思えてくる。

トントン…。

「聖、稔さんと梨香さんが来たよ」

父さんがドアの外で、声をかけてきた。

「あ、うん。今、行く」

やべえ、泣き顔だ、俺。慌てて鏡を見て、ティッシュで涙を拭いて、鼻をかむ。

目がちよつと赤いけど、とにかく、いかなくちゃ…。俺は、2階から下りて、店のほうに行った。

店には、もう、菜摘ちゃんのご両親が、テーブル席にっていた。

8 絆

俺が店に行くと母さんが、俺のほうを見て席を立ったから、すぐに菜摘ちゃんのご両親は俺が来たことに気がついた。

俺は、黙ってその場につたっていた。

「聖…」

母さんが小さな声で、呼んだ。俺の横に立っていた父さんが、俺の背中を後ろから軽く押した。

「……」

俺は無言のまま、少しだけ、二人のそばに行った。

「はじめまして…。菜摘の母です」

菜摘ちゃんのお母さんが、席を立ち、俺のほうを向き、お辞儀をした。

「あ…。聖です」

俺も、お辞儀をした。お父さんの方は、席に座ったまま黙っていた。でも、俺のほうをじっと見ていた。それから、深いため息をついた。

いったい、なんのため息なのか？眉間にはしわをよせていて、菜摘ちゃんのことを苦しめたことにたいして、俺を怒っているのか…。そんなふうにも見えた。

「聖もここに来て、かけて」

母さんはそう言うと、椅子を俺が座りやすいように、動かした。俺は、父さんの方を見た。父さんは、黙ってうなづくと、隣のテーブルの席についた。

俺は、おずおずと母さんの横の席に座った。さっきまで、まったく緊張をしていなかったのに、手に汗をにぎるくらい、緊張していた。脇もじわって、汗が流れてくるようだ。

「菜摘は家にいるよ。お友達の蘭ちゃんが来ていて、そばについていてくれる。一人ではおいて来れなかった」

「え？」

いきなり、菜摘ちゃんのお父さんが、話し出した。

「一人にはしてられないほど、思いつめているってことだ」

この人、俺が子供かどうかを確かめに来たんじゃないくて、俺を責めに来たのか？

「稔……。ごめんね」

いきなり、母さんが謝った。

「え？」

なんで、謝ってるの？俺のせい？俺のしたことを謝ってるの？ばらしちゃったから？

「妊娠がわかった時に話していたら、菜摘ちゃんを苦しめずにすんだのにね」

母さんは、すごく落ち着いた声で、ゆっくりとそう話した。

「でも、稔に真実を言うなんてこと、考えられなかった。あの時は……」

「なぜ？」

少し、きつい表情で、菜摘ちゃんのお父さんは聞いた。

「だって、私がそんなことを言い出したら、梨香がどう思うか、気になって」

「私？」

菜摘ちゃんのお母さんが、そう聞いた。それまでは、頭をさげて、二人の会話を聞いていたが、初めて、母さんの顔を見ていた。

「私が、稔の子を妊娠してるなんて知ったら、稔と別れることをまた、考えたりしないかとか、私勝手に心配しちゃったの」
「……」

菜摘ちゃんのお父さんもお母さんも、黙ってしまった。

「ほんと言うと、1番どうしていいかわからなかったのは、私なの。稔と別れてたし、爽太はもう、付き合ってたし、それなのに、稔の子を妊娠してるってわかって、どうしていいか途方にくれてた」
「くるみ…」

菜摘ちゃんのお母さんが、少し身を乗り出した。

「…ごめん、目の前で、こんな話、きついとは思っけど、聖…」
母さんがそう言うと、みんながいつせいに俺を見た。

「おろそかとも思ったの。産んでも誰も、幸せになれないんじゃないかって…」

「……」

俺の顔が、多分相当引きつったんだろうな。菜摘ちゃんのお母さんも、お父さんも、顔を青ざめて俺のことを、心配しているふうだった。

「だけど、産む方を選択したの。爽太が、父親になるって決心してくれたから」

「……」

今度は、二人して隣のテーブルの席にいた、父さんを見た。父さんは、穏やかな顔つきで、俺のことを見ていた。

「ごめんね。稔。ずっと黙ってた。でも、聖の父親は、爽太しかないって思ってたし、なんだか、二人を見ていると、本当に血のつながった親子にしか見えなくて。別にね、真実を言わなくてもいいんじゃないかって、ずっと私、そう思ってた」

「……」

誰も、口を開かず聞いていた。

「だけど、やっぱり、言わなくちゃいけなかったのね。まさか、聖と稔の子が、会合うことがあるなんてことが、起きたんだから」
「くるみ。こんな偶然は、神様のいたずらか、意地悪でしかないっ

て思ったのよ、私」

「梨香…」

「あの子、相当、聖君のこと、好きだったみたいだし…」

「ごめんね」

母さんは、また謝った。でも、母さんが謝る必要なんてあるんだろうか。

「今日も、見ていられないほど、あの子…」

菜摘ちゃんのお母さんは、少し言葉を詰まらせた。その横で、菜摘ちゃんのお父さんが、しかめつつらをして、それから、

「すまん。俺のせいだな」

と、いきなり頭を下げた。

「え?!」

俺も、母さんも、父さんもびっくりしてしまった。

「あの頃にはもう、梨香とも付き合ってた。でも、俺は中途半端な気持ちでいた。その結果だ」

菜摘ちゃんのお父さんは、ものすごく辛そうな声でそう言って、全然頭をあげようとはしなかった。

「くるみには、辛い思いをさせた。別れてからも、ずっと、苦しませていたんだな。そうとは知らず、俺たちは、くるみに許してもらったことを喜んで、結婚のことまで考え出して…。何も知らずに」

「あなた…」

菜摘ちゃんのお母さんも、驚いた様子でいた。

「梨香、聖君も、くるみも悪くはないんだよ。全然悪くないんだ。今日も菜摘は話してた。菜摘と聖君が兄妹だってわかって、聖君も苦しんだろうし、菜摘には、それがわからないように、いろいろと手を尽くしてくれていたんだと…。それもわかってさらに、あの子は苦しんでいるんだ。それも、全部の原因は俺にある」

「そんな、総一人の責任じゃないのよ」

母さんは、そう言って、ちらりと父さんの方を見た。

父さんは、静かに席を立って、俺と母さんの後ろに立った。

「稔さん、俺たち、全然辛い思いはしていませんよ。その逆です」

「え？」

「くるみのお腹に子供がいるとわかって、結婚も決意しましたし、俺もくるみも、俺の両親も、みんなが、子供が生まれてくることを喜びました。生まれてからだって、聖がみんな可愛くて、愛しくて、みんなで、喜んでいたんです。もちろん、俺もです」

「……」

「だから、聖がこの世に生まれたこと、後悔するようなことは言わないでくれますか？」

「え？」

「そりゃ、菜摘さんは、今、辛い思いをしていると思いますが……。でも、それは聖も一緒です。聖だって、菜摘さんのことが、好きだったようですし、俺と血がつながっていないことを知って、1番傷ついていたと思いますし……」

「……」

菜摘ちゃんのお父さんは、俺の方を見た。

「でも、傷ついてるかもしれないけど、俺ら、ちゃんとそんな聖を受け止めていこう、見守っていこう、信じていこうって思ってますから」

父さんは、まっすぐに菜摘ちゃんのお父さんを見ていた。真剣だけど、穏やかな表情だった。

俺は、その顔も、そして父さんの言葉も、全部すげえって思っていた。

「……」

しばらく、菜摘ちゃんのお父さんは、黙っていた。それから、俺の方をまた見て、

「俺とは、血がつながっている……。俺の、息子なんだな」

とつぶやいた。俺はそれを聞いて、なんか、もやってした。

「もし、くるみが妊娠したとわかった時に、聞いてたらどうしてたかな。父親にならなくてはと思ったかもしれないし…。引き取るって言い出したかもしれないし。どうしていたかな…」

そう言ってから、

「梨香とも、結婚していたかどうか…」

と、菜摘ちゃんのお父さんはつぶやいた。

「だったら、良かったってことでしょ？」

思わず俺は、口にした。

「え？」

全員が、俺をいつせいに見た。

「さつきから、ごめん、ごめんってみんな謝ってばかり。でもさ。良かったんじゃないの？今の状況」

「聖…」

あんだ、何を言い出すのって顔で、母さんが見た。

「母さんも言ってたよね？全部必然だって。そりゃ、俺だって初めは、驚いたよ。ショックだったよ。ずっと、大好きで、尊敬してた父さんと血のつながりもないってことをさ。それに、俺も、菜摘ちゃん好きだったよ。なんだよ、この展開って思ったよ。けどさ、血のつながりなんて、関係ないって思えてきたし、俺にとってはやっぱり、父さんはすげえ尊敬できる存在なんだよ」

「…聖」

母さんが、目を細めた。

「母さんのことも、俺、大好きだし、母さんや俺のことを愛してくれてる父さんのことも俺、大好きだし。血のつながりなんて関係なく、俺のこと愛してくれてる父さんも、じいちゃんや、ばあちゃんのこと、俺、大好きだよ。この家に生まれて、まじで良かったって思ってる」

「……」

父さんの顔がゆがんだ。泣くのを我慢してるみたいだ。

「それに……」

俺は、菜摘ちゃんの両親を見ながら、言い出した。

「それに、今、俺は二人がいてくれて、支えてくれるから、辛いことがあっても、大丈夫なんだ。一緒に、乗り越えてくれる家族だから」

「……」

みんな、黙って俺の話を聞いていた。俺は、なんでかわからないけど、口から勝手にどんどん言葉が飛び出していた。

「だから、絶対に、菜摘ちゃんだって、大丈夫なんだ。だって、二人がいるじゃんか」

菜摘ちゃんの両親は二人して、目をあわせた。

「それに、ついててくれる友達もいるんだろ？俺にもいるよ。友達。こんな時の友達だろ？辛いこと、悲しいことがあつて、そばにいてくれて、励ましてくれて、支えてくれる、それが友達とか、家族なんじゃないの？」

「……」

二人は、目を丸くして、俺のことを見ていた。

「だから、俺、悪いけど、菜摘ちゃんに同情はしないし、こんなことになって、悪かったとも思わないし、逆に……」

「……？」

みんなは、固唾を飲んで俺の話に耳を傾けていた。

「逆に、家族や友達の絆、深まるんじゃないかって思ってるよ」

「……聖」

母さんが、涙をいっぱい目にためて、俺の顔を見た。

「俺が、そうだったみたい……」

「そうか……。聖君は、そうやって、乗り越えたのか」

菜摘ちゃんのお父さんが、俺にそう言ってきた。

「乗り越えられたかは、わかんない。でも、今は、父さんの子で良かったって思ってるし、産んでくれたことに感謝もしてる」

そう言つと、俺の後ろにいた父さんが、俺の肩を抱いてきた。ぎゅって。そして、

「なんだよな〜。お前な〜。ほんとにもう、可愛いやつだよな〜」

って言つて、俺の頭をぐしゃぐしゃにした。

「ちょ、話終わってないから。邪魔しないで、父さん」

「え？ああ、ごめん」

父さんはそう言つと、肩を抱いていた手を、ゆるめた。

「だからさ、菜摘ちゃんは、立ち直るまでどれくらいかかるか、わかんないけど、でも、いつかは、俺、兄妹として、接していけたらいいなって思ってる」

「え？」

菜摘ちゃんのお母さんが、びっくりしていた。

「俺には、杏樹って妹がいる。今、中1で、すげえ元気で、可愛い。俺、けっこう大事に思ってるんだよね。その杏樹と同じくらいに、菜摘ちゃんのこと、思えたらいいなって思ってるよ」

「妹？大事な？」

菜摘ちゃんのお母さんが、不思議そうに聞いた。

「あ、今は無理かもしれない。菜摘ちゃんの方が、受け入れられないかもしれないけど…」

俺は、そう付け加えた。

「でも、いつか、俺のこと兄貴って心底思ってくれたら、今度は、菜摘ちゃんが何か悩んだり、苦しんだりした時に、支えになれるでしょ？」

俺が、そう言つと、また父さんが、

「お前ってやつはさ〜」

と、俺の髪をぐしゃぐしゃにしながら、そう言った。

「ああ、もう！髪、ぐしゃぐしゃにしないでくれる？これ、直すの大変なんだよ」

父さんに向かってそう言うと、父さんは涙ぐみながら、すんごく嬉しそうに笑ってた。

「わかったよ。聖君。君は、本当にくるみや、爽太君に愛されて、育ってきたんだな。」

「…え？」

「見てて、わかるよ。君はこの家に生まれて、くるみと爽太君の息子として育った、それが1番良かったことなんだ」

「稔…」

母さんは、エプロンで目を拭いていた。

「そうなんです。それが1番だったんです。聖が俺の息子になって俺は本当に嬉しいし、誇りだし、幸せなんです。だから、生まれてきたこと、この世に聖が生を受けたことに、めっちゃ感謝してるんです。だから、稔さんにも感謝してるんです」

父さんは、目を輝かせてそう言った。

「え？」

「稔さんがいなかったら、聖はこの世に、いないんです」

「……」

少しきょとんとした顔をしてから、菜摘ちゃんのお父さんは、俺の顔を見て、眉をしかめた。

「そうか…」

そう言うと、目頭を押さえてから、

「じゃあ、もう後悔はしないことにしよう。それに…」

と言って、俺の方にしっかりと向きなおり、

「菜摘が立ち直って、君の事を兄だと思うことが出来るようになって」

とにつこり微笑んだ。母さんも、

「大丈夫よ」

と、につこりと微笑んだあと、俺のほうを見て、

「聖、本当に私たちの子供になってくれて、ありがとうね」

って言った。

俺は部屋に戻り、「自叙伝」の続きを読んだ。

.....

俺は、お腹の子の父親になる決心をし、それならと、くるみにプロポーズもした。くるみはすぐにイエスと返事してくれた。

くるみのつわりがおさまり、安定期にはいった頃に式を挙げた。

くるみはね、両親を結婚式にはよばないって初め、言ってたんだ。でも、俺は、せめて招待状だけでも送ろうよって提案をした。くるみは、二人とも来ないと言ったけど、わからないよね。来たいって思うかもしれないし。

もし、来なかったらその時だ。悲しかったら泣けばいい、それを俺が受け止めるよって、そう言って、招待状は送ることにした。

でもね、くるみの両親は、二人とも、出席してくれたんだ。お母さんは再婚した相手と一緒に、出席をした。

その人、松井さんっていう人だけど、聖が生まれてから、ちよくちよくくるみのお母さんと来て、聖のことを可愛がっているよ。

くるみは、バージンロードを实のお父さんと歩いたんだ。感動的だったよ。

くるみはね、お父さんにもお母さんにも、好きだったってことを告げていた。憎んだこともあったけど、やっぱりずっと、二人の

ことは、大好きだったってね。

くるみのお母さんもまた、親から、生まれなければ良かったとか、そういうことを言われて育ってきたらしい。自分の子にはそんなこと言いたくないって思いつつ、言っちゃってたんだね。繰り返されちゃうのかな、そういうのってさ。

でも、くるみは、繰り返し返さないよ。だって、君の事を憎んだり、君を生まなきゃ良かっただなんて、後悔するようなことは、いつさい起こるわけがないからさ。

くるみも、俺も絶対に、聖に、「生まれてきてくれて、ありがとう」って言うよ、言い続けるから、覚悟してて。

愛して、愛して、愛しちゃうからね。

なんてったって、聖は、俺たちにとってかけがえのない存在だからさ。

今もね、夜寝ている聖を見ると、愛しくてたままないよ。可愛くて可愛くて、くるみと目を細めて見ているんだ。

くるみは、そんな時いつも、聖に言ってる。

「産んで良かった」
ってさ。

どんなふうに、君は育っていくのかな。

でも、どんな君も、愛していく。どんな君も、君という存在には変わりはないのだから。

俺と、くるみの物語は、わかってくれた？

なんか、恥ずかしいからくるみには、内緒だよ。

聖には、好きな子がいるかな？どんな子を好きになるのかな？

いつか、聖に恋の相談なんて、されたりするのかな。

今は、なんかそんな日が来るのが、不思議だ。だってさ、まだおむつもしてて、くるみのおっぱいすいながら、すーすー寝ちゃってるんだもんな。

まだまだ、くるみの小さな恋人でいるのかな。あまりにも、仲が良すぎてたまに、俺が嫉妬してるけど。でも、いいや。聖、めっちゃ可愛いから許す。

いつか、酒でも飲む日が来るのかな。楽しみだけど…。

今はね、今の聖を、めいいっぱい愛することにするよ。

これを読んでる時には、きつと、その時の聖のことを、めいいっぱい愛してると思うよ。

ああ、やつぱり、こんなくるみに読まれたら、超恥ずかしいから絶対に、内緒！！！！

じゃあね。

また、そのうちに、書きたいことがあったら書くよ。

聖の父さんより

.....

「なんだ、続きはないじゃん。そのうちってのは、なかったんだ」とか、言いながら、俺はものすごく嬉しくなっていた。愛してるなんてこっぴどくかしいけど、でも嬉しかった。

これを母さんに見せる気はなかった。だって、父さんの愛してるって言葉、やつぱり、恥ずかしいもんな。

ああ、それにしても、自分の息子に、血はつながってないとはいえ、こんなの書けちゃうのも、すげえって思うよ。

いつか、俺も父親になる日が来る。そうしたら、父さんや、母さんが俺のことを、めいっばい愛してくれたみたいに、愛したいって思う。

あ、もちろん、父さんが母さんを愛したみたいに、俺も、好きな子は大事に思っ、めいっばい愛しちゃうんだ。

って、思わず桃子ちゃんのことを、頭に浮かんだ。

ああ。桃子ちゃんには、話したほうがいいかな。今日の出来事。そう思っ、俺はすぐに、桃子ちゃんにメールをした。そして、店の定休日の水曜、夕方に会うことにした。

俺は、夜店の手伝いをする時間まで、長々と、なんでもないようなことを桃子ちゃんとメールしあい、幸せ気分浸っていた。

ああ、一つ一つの文もかわいんだよね。

もう、でれでれだね、俺。

9 桃子ちゃん

水曜日、俺は学校が終わってすぐに、新百合ヶ丘に向かった。

電車に乗ると、メールが来た。

>桃子ちゃんに、よろしくな

葉一からだ。葉一は、クラスが違う。今日は、朝ちよこつと見かけただけで、会えなかったから、メールよこしたのかな。

葉一は、今、けっこう菜摘ちゃんに電話をしたり、メールをしたりして、慰めたり励ましたりしているらしい。

とはいっても、バカなこと話したり、今日あったおかしかったことを、メールしたりしてるだけなんだって言ってた。でも、そういうのが、本当は1番、ほつとできたりするのもかもしれない。

あいつは、いいやつだ。中学から友達してるけど、俺よりずっと大人で、しっかりしているし、器でかいし、きっとその良さを菜摘ちゃんも気づくときが、来るんじゃないかな。っていうのは、半分は俺の希望でもあるんだけど。

蘭ちゃんは、ずっと菜摘ちゃんのそばにいてあげてるみたいだつて、基樹が言ってた。だから、デートもおあずけなんだけど、まあ、しょうがないよなつて……。基樹は、実は、友達思いの蘭ちゃんを見直して、惚れ直したらしいけどね。

こんな時、友達のことほっておいて、彼氏とばっか会ってる子じやなくて、良かったよつて基樹は言っていた。

「じゃ、友達ほつて、桃子ちゃんと会おうとしている俺ってどうよ？」

今日、昼休みにそんな話をしてて、基樹にそう冗談を言うと、「いや、お前に一緒についてもらわなくちゃならないほど、傷つ

いてるやつ、別にいないし…。っていうかさ、お前が1番、傷ついてるんじゃないの？どっちかっていうと、お前のそばにいてやるのが、俺らの役割だったりして…」
って基樹に言われた。

「でも、俺、やるーにくつついててもらうより、可愛い女の子がいてくれるほうが、いいかも…」

「あほか～～～！このすけべやろ～～～！」

そう言って、二人でゲハゲハ笑った。

「なんだ、お前はなんか、大丈夫みたいだな」
いきなり基樹が、まじめにそう言ってきた。

「え？」

「いや、実の父親だと思ってたのに、そうじゃないって、けっこうきついことなんじゃないのかなって思ってたさ。特におまえのそこ、異常に仲良かったし」

「う～～ん、血のつながりはなくても、絆はあるよ。多分、前より深まったかもしれない。俺、今でも父さんのことは、好きだしさ」

「あ～～、それ。そういうの平気で口に出来るの、すげえよな。やつぱ、お前の家、変わってる」

「え？そう？」

「ま、いいや。桃子ちゃんと今日会ったんだろ？これからも、付き合っただろ？本気なんだろ？」

「うん」

「蘭がさ、もし、本気じゃないなら、桃子が傷つくから、今、別れて欲しいって言ってたけど。この前、6人で会った時、お前見てたら、けっこうまじで、桃子ちゃんのこと好きなんじゃないかって思ったんだよね」

「基樹には、そう見えた？」

「うん。なんで？」

「葉一には、そう見えなかったみたいだから」

「葉一は、先入観があったからじゃないの？」

「え？」

「お前は絶対、菜摘ちゃんのことを好きだ…みたいな」

「あ…、そうかもな」

「で？」

「で？って？」

「お前、桃子ちゃんの何処が好きなの？」

「え？なんだよ？いきなり！」

「え〜〜。だってさ、どの変に惚れちゃったのかって思ってさ」

「お前は、蘭ちゃんのどこに惚れたわけ？」

「え？俺にふる？お前に聞いてんだよ？俺は」

「いいから、教えるよ。それ、聞いてなかったよ。だいたい、付き合ってるのだって、隠してただろ？」

「いいじゃん。俺のことは」

「じゃ、俺のこともいいじゃん」

「…ったよ。蘭のことは、もろ、タイプだったから…」

「へえ〜〜！」

「お前は?!」

「え？それだけ？」

「いいから。お前は?!タイプとは違うんじゃないの？お前どっちかっていうと、菜摘ちゃんみたいな、元気はつらつタイプ、好きだったじゃんか」

「う。そうだけどさ…」

「そうだけど、なんだよ〜〜」

基樹は、俺の腕をぐりぐりつついてきて、にやつきながらそう聞いた。

「だって…。桃子ちゃん、可愛いじゃん」

「そうだな。うん。そう思うよ、俺も。って、それだけ？」

「それだけ」

「え？でも、好きになったきっかけとか、決め手とかは？」

基樹は、目を丸くして、聞いてきた。

「うゝゝん…。決め手？そうだなゝゝ…。何かな？」

俺はちよつと考えた。でも、やっぱり、

「可愛いから」

としか言えなかった。可愛いっていうか、いじらしい、っていうか、なんていうか…。うまく言葉では、言いあらわせない。

電車が新百合ヶ丘に着いた。改札口には、まだ、桃子ちゃんはいなかった。

桃子ちゃんは、私立の女子高に通っていて、学校帰り、制服でどつかに寄るのは禁止されてるらしい。だから今日も、一回家に帰って、私服に着替えてくるって言うってた。

俺は、ちよこつと残念だった。制服姿も見てみたいな…。なんて思っていたから。

でも、もうすぐ文化祭があるらしくって、その時は、他校の生徒も行けるようだから、俺も基樹と葉一と行こうかって思ってた、その時に、制服姿が見れるかなって今から楽しみにしちゃってるんだけどさ。

俺は、学校から直で来たから、制服。時計を見たら、約束の時間の5分が過ぎていた。

携帯が鳴った。

「あ、桃子ちゃん？」

「ごめんね。聖君。今、駅に向かってる」

桃子ちゃんは、息づかいが荒かった。今、必死こいて走っているんだろうな。

「いいよ、ゆつくり来なよ」

「ごめんね……！」

桃子ちゃんは、そう言うのと携帯を切った。必死に走ってる姿が、思い浮かんできて、また、いじらしくなる。

俺は、少し場所を変えた。多分、こっちから来るだろうなっていう方向に、ゆつくりと歩いた。

少しすると、必死こいて、走ってくる桃子ちゃんの姿が見えた。俺も、桃子ちゃんの方に、走っていった。

「ひ。聖君……。ごめん……」

桃子ちゃんは息があがってて、言葉が続かないみたいだった。

「そんなに、走ってこなくても良かったのに」

「はあはあ息を切らしている桃子ちゃんに、かけよってそう言うところ、ごめんね。学校、出るのが遅くなっちゃって……」

そう言うのと、一回、桃子ちゃんは、息を整えた。

「HR長いんだもん。もっと早くにメールしたら良かった。でも、走ったら間に合うかなって思ってた……。でも、全然駄目だった。私、走るの遅いんだって、途中で気づいて……」

「え？」

ぶふ！俺は思わず、笑っちゃった。

「え？」

笑われて、桃子ちゃんはちょっと、驚いていた。

「あ、ごめん。笑っちゃって。あはは……。桃子ちゃん、走るの、遅いんだ？」

「うん……」

ちよっと、恥ずかしそうに、下を向いて、桃子ちゃんは無言づいた。

可愛い……。っていうか、どうしてこう、何をしてても、可愛い

んだか…。走るの遅いけど、頑張つて走ってきた桃子ちゃんが、またいじらしくなってる俺。

「走ってきたから、のど渴いたでしょ？どっか入る？」

「うん」

「俺、ちょこつと小腹減ってるんだよね…。どっか、ファーストフードの店あったっけ？」

「うん。あるよ、こつち」

俺は、桃子ちゃんの行く方向についていった。

ちよつと桃子ちゃんの後ろから歩く。うん、確かに歩くのも遅いかな。俺も、いつもより、全然歩くのが遅くなる。

桃子ちゃんが歩きたびに、ポニーテールの髪が、左右に揺れる。面白いな…。歩き方も、なんか可愛いな。

しばらくすると、桃子ちゃんは歩く速度をもつと落とした。思わず、ぶつかりそうになった。

「わ…。何？」

お店に着いたかと思ったけど、どうも違うみたいだ。桃子ちゃん
は振り返つて、

「なんで…、後ろ？」

つて、少し不安げに聞いてきた。

「え？」

「ずつと、後ろにいるから、聖君」

「ああ、桃子ちゃんの知ってる店だから、後ろからついていたらいいのかなつて。それで、後ろ歩いてたけど…」

「……」

桃子ちゃんが、黙ってしまった。

「え？何？どうかしたの？」

「なんか、怒ってるのかと思った」

「誰が？」

「聖君、黙ってたし」

「え？ああ、ごめん。でも、怒ってないよ？」

「そうだよな、さっき、怒ってる感じじゃなかったし」

桃子ちゃんはそう言つと、

「お店、あそこなんだけど」

と、斜め前のビルを指差した。

「ああ、うん。じゃ、行こう」

今度は俺が先に、歩き出した。桃子ちゃんは、ちょこちょこつて、あとをついてきた。

俺は、なんかおかしくなった。後ろを歩いていただけなのにな。それも、後ろから見てて、可愛いなって思ってたのにな。

店に入つて、桃子ちゃんは、アイステイーを頼む。俺は、チーズバーガーと、ポテトと、コーラを頼んだ。

席に座り、おもむろに俺は、

「いただきます！」

と言つて、がつついて食べ出した。そんな俺を、桃子ちゃんは見ながらアイステイーを飲んでいた。

「…聖君、元気そうで良かった」

「え？」

俺は、チーズバーガーをがつつきながら、聞き返した。

「菜摘のことで、落ち込んでたりしないかなって思つて…」

「ああ…」

ごくつてコーラを飲んでから、俺は話を始めた。

「日曜、メールでは、あんまりその辺のこと、触れなかったっけ」

「うん、だから、落ち込んでるのかなって気になって」

「落ち込んでないよ。菜摘ちゃんの方が、かなり落ち込んでるんじゃない？学校は来てる？」

「うん、ちゃんと月曜から。でも元気ないみたい。ずっと蘭がついてあげてる」

「そうなんだ」

「私は、そばにいないほうがいいって、蘭とも話したんだ。菜摘も、まだ、私と話すのはちよつと辛いから、離れてるって言ってたって」「じゃ、桃子ちゃん、学校で、一人？」

「大丈夫。一人だけど、菜摘の方が今は、辛いと思うし……」

「他に、友達は？」

「蘭がね、他の子と一緒にいてもいいよって言ってくれたんだけど、なんだか、気が引けて」

「……」

「菜摘ね、今は辛いけど、そのうちに、また私と蘭と一緒に、仲良くやっていきたいからって、だからもうちよつと待っていてねって、そう言ってたよって、蘭が教えてくれたの」

「そうなんだ」

「うん……。二人とは、中3の時も一緒のクラスだったの。あ、私たち、今の高校の中等部にいたんだ。それで、今年も一緒のクラスになつて……」

桃子ちゃんは、ちよこつとアイステイーを飲んだ。俺も、コーラをごくつて飲んだ。

「蘭とも、菜摘とも、まったく違う性格なのに、なんで仲がいいの？って他の友達に聞かれたことあるんだけど。優しいからかな……」
「え？」

「中学3年の時に、私、なかなか友達が出来なくて……。仲が良かった子とは、みんな違うクラスになっちゃって。5月に修学旅行があつて、どの班にもいれてもらえなくて困ってたら、二人が一緒の班になるうよって言ってくれたの。私、初めは、私と全然違うタイプだし、どうしようかなって思ってた、なかなか二人にもなじめなく

て…」

「うん」

「だけど、二人ともいつも元気で、明るくて、一緒にいると楽しくて…」

「そうだね。そういえば、俺らがバイトしてる海の家に来た時も、二人ともはじけちゃってたもんね。で、俺らも、けっこうはしゃぐから、意気投合したんだよね？」

「私は、あまり、しゃべらなかったけど…」

「え？ああ、うん。そうだった…」

「聖君は、蘭と仲良かったよね。蘭と、基樹君と3人でよくバカやってた」

「バカ？」

「バカ？俺…」

「仲良かったから、聖君も基樹君も、蘭のことが好きなのかもって、菜摘と話してたんだ」

「そうなんだ…」

「私とも、菜摘とも、あまり話さなかったから」

「え、ああ。うん…」

ちよつと、俺は、言葉に詰まってしまった。

「あの頃は、その…。菜摘ちゃんのことを意識してたんだけど、何を話していいかもわからなくて。それで、結局1番話しやすい、バカやれる蘭ちゃんと基樹と、一緒にバカやってたんだと思うよ」

「そうなんだ。菜摘のこと、好きで意識しちゃってたんだ…」

「うん。なんか…なんて言うの？俺、あまり女の子と付き合ったこともないし…あ、中学の頃一回あったけど、すぐに駄目になったし。好きになっても、どうしていいかわからないっていうかさ」

「そんなに菜摘のこと？」

「え？いや。うん、どうだろ？とにかく、緊張はしてたよ。毎回…何か話そうって思ってた、ああ、今日もまた、話せなかった…、みたいなの」

「そうだったんだ…」

桃子ちゃんの顔は、沈みぎみ。声もどんどん小さくなる。

俺は、残ってるポテトをばくばく食べ出した。頭の中では、さてこれから何を話そうかとか、桃子ちゃん、傷ついてるかなとか、ぐるぐるしながら。

だって、俺、本当にずっと、桃子ちゃんのこと、眼中にもなくてっていうか、まったく見てなかったから、どんな子かもわかんなくて。っていうことを、ばらしてもいいかどうか…。

そんなことを言って、傷つくかな？

「あ！そうだ。聞きたいことがあったんだ」

俺はとっさに頭にひらめいたことを、口にした。

「え？何？」

桃子ちゃんは、下を向いてたけど、一瞬びつくりしたみたいで、俺の方を向いた。

「桃子ちゃんって、俺のこといつから、好きなの？」

「え？！……！！」

桃子ちゃんの顔が固まって、みるみるうちに、真っ赤になった。

あ…、変なこと聞いたかな。

でも、もうあとには引けない。聞いちゃったんだから、しょうがない。それに、まじで、気になってたし。

「さ…、最初から」

すごくすごく小さな声で、桃子ちゃんは答えた。

「最初って？6人で会った時から？」

「ううん」

「？」

「私、みんなで会う前に、江ノ島の海に家族と来てたんだ」

「え？」

「その時にも、聖君のバイトしてた海の家、行ったの。そこで、聖君見て…」

「…え？」

「なんか、すごく元気で、にこにこしながらお客さんと会話してて…。汗かきながら、一生懸命に仕事もしてて、それがすごく印象的で…」

「……」

「私が注文した時にも、すごく明るく笑顔で答えてくれて。それがなんか、まぶしくて…。もう一回会えたらいいなって思っで、蘭にその話をしたの」

「うん」

「そうしたら、3人で江ノ島に行って、また、その海の家に行こうって…」

「……」

まじっすか。俺、知らないけど…っていうか、初めに会った時のことなんて、覚えてない。

「蘭も、菜摘も、応戦してくれてたけど、私、どうしていいかわからなくて。それに、会うだけで、嬉しかったし…」

え〜〜〜〜！！！！ちよ、恥ずかしいんですけど。ものすごく照れくさいんですけど…。

すごく恥ずかしいことを言っていると思うけど、桃子ちゃんは、そのあとも、普通に俺に話をしてくれてた。言っで、恥ずかしくない？照れくさくない？って、俺のほうが、最初に聞いたんだっけでも、聞いてて、顔から火、出そうだけど…？

だけど、なるだけ、平静を装って、俺は、下を向いてうんうんっ

てうなづいてた。

「菜摘、いつから聖君のこと、好きになったのかな…。もしかして会った時からかな…」

「え？」

ちよつとそこで、俺の頭も冷めた。

「……」

桃子ちゃんも、黙ってしまった。

しばらく沈黙が続いた。

「昨日さ、菜摘ちゃんのご両親が来てさ…。いつか、菜摘ちゃんが俺のこと、兄貴って思えるくらいになつたら、家に遊びに来ないかってさ」

「え？」

「俺、妹いるじゃん。杏樹つて。会ったことないか…。今中1で、けっこう可愛い妹なんだ。自分で言うのもなんだけど、けっこう可愛がつてるんだよね」

「……」

「でさ、菜摘ちゃんのこと、杏樹みたいに、思える日が来るんじゃないかって、俺、そう思ってた…。そしたら、今度もし、なんか菜摘ちゃんが悩んだり困ってる時、相談に乗ったり、励ましたりするそんな役目、俺できるかもしれないでしょ？」

「…うん」

「そんな日が来たら、いいなって思ってるし、俺の本当の…、あ、いや、血のつながってるっていった方がいいかな？父親、菜摘ちゃんのお父さんもさ、息子として会いたいからって言うてくれてさ」

「息子…として？」

「俺、父親、二人もできちゃったよ。あはは…」

俺がそう言つて、笑つと、桃子ちゃんは少し戸惑った顔をした。

「なんか、強いね、聖君」

「え？強くはないよ。でも、まあ、父さんとか、母さんとか、基樹や葉一がいてくれるから、そんなに落ち込んだりしないですむかな」

「そうなんだ…」

「だから、菜摘ちゃんも大丈夫だと思うよ。だって、両親もいるし、蘭ちゃんもいるし、葉一もよく、電話したり、メールしたりしてるみたいだし」

「うん…。そうだね」

「うん…」

俺は、残っていたコーラを飲んだ。

「ちよつと、羨ましいな…」

「え？何が？」

「杏樹ちゃんや、菜摘」

「……？なんで？」

「だって、聖君に、大事に思われてるし…」

「へ？」

「基樹君や、葉君にも、嫉妬しちゃう」

「え?!なんで？」

「だって、聖君の力になつてて…。私なんか、全然…」

え~~~~~?!!!ちよつと、待って、ちよつと待って!!!!

ああ。ああ。もう、なんで?!!!そうなるかな。1番、力になつてるし、大事に思ってるし、でもそういうの言つの恥ずかしいから、言えないんじゃない?!!!!!

く~~~~~!!

ほとんど無言で、俺は下向いて、足をじたばたした。

「え？どうしたの？」

桃子ちゃんが、びっくりしてた。

「私、何か変なこと言ってる？」

「いや…」

「だったら、汗をかいてる俺。これ、ちゃんと正直に言った方がいい？だよ。じゃなきゃ、桃子ちゃんは勝手に思い込んで、落ち込んでるよね。でも、勇気いる。」

「あ、あのさ…」

「え？」

「だから、あのさ…」

「…？」

「そんなに、落ち込むことないし、羨ましがることないし…」

「そっだよ」

「え?!」

俺の言いたい事、もう伝わっちゃった？ってか以心伝心？

「私、自分勝手だよ。だって、菜摘は今、傷ついてるし。妹になんかなりたくなかったかもしれないし。それに私、勝手に聖君の役に立てたらって思ってたけど、そんなの自分勝手なことだよ」

「え？え？」

「ちよつと違う！いや、だいぶ違う！伝わってないぞ…」

「私、聖君と、菜摘が兄妹だって知って、それを私しか知らなくて、だから、聖君のために自分ができることしなくちゃって思ってて」

「……」

「だって、その時には、私しか、聖君は相談する相手も、助ける人もいないからって…。でも、役に立てることが嬉しくて…。だけど、今は私がいなくっても、もう大丈夫なんだよね？」

「……?!?!?!」

「……」

また、桃子ちゃんは、下を向いた。

「いなくつても…って？」

ど、どうということ？！

「だから、その…。もう、私は必要ないかなって…。一回乗りかかった船だけど、もう降りる頃なのかな？私」

「…え？何それ？」

「今日、会おうって言ったのは、それを言いに来たんじゃないの？」
「それって？」

俺の頭、真っ白。思考能力ゼロ。桃子ちゃん、何を言いたい訳？
まったく話が見えない。

「初めはね、菜摘のことで悩んで、相談が何かかなって思ってたんだ。でも、話聞いてたら、もうとづくに解決してるって言うか、聖君、立ち直れているし…。だから…」

「…うん。だから？」

「だから…。別れ話しに来たのかなって…」

「ええ？！」

わ、別れ話…？！何言ってるの？！桃子ちゃん。

「あ。別れ話じゃないよね。だって、付き合ってるわけでもないし…。えっと、だから、私はもう、必要なくって、だからこれから会うこともなくなってる…とか」

「……………」

開いた口が、ふさがらなくなっていた。どこをどうしたら、そんなふうに思えちゃうわけ？

「えっと…？」

俺はいつたい、何から説明したらいいわけ？それに、ちょっと、いや、かなりショックだ。

「桃子ちゃんさ、じゃ、俺がもう必要ないよって言ったら、俺の前

から去っていつちゃうわけ？」

「え？」

「そんな簡単に、去って行けるくらいの、簡単なもんだっただの？俺への、気持ち」

「……」

桃子ちゃんは、みるみるうちに、目が真っ赤になってうるんできても、唇をぎゅうって噛んで、泣くのを我慢しているようだった。これ、桃子ちゃんの癖かな？

「違う……」

桃子ちゃんは、それだけ言うと、首を横に振った。

「違う……。でも、私のこと、必要なくなつて、会わなくてもいいと思ってるのに、しつこく会つてなんて言えない」

「え？」

「迷惑かけたくない……」

「俺に？」

「嫌われたくない……」

「え？俺に？」

「……」

それだけ言うと、桃子ちゃんはうつむいて、手で、涙をふいているようだった。

ああ、やばい。泣かせちゃった、俺……

「ごめん……」

泣かせるつもりはなかった、と言おうとして、やっぱり、泣かせようとしてたかなって、反省した。だって、ちょっと頭に來たから俺への気持ち、そんな中途半端？って……

本心知りたくなつて、泣いた桃子ちゃんを見て、ちょっと安心してる自分もいて。ああ、俺ってかなり、ずるいやつ。

「泣かせて、ごめん…」

好きな子、泣かせてるって、かなり嫌なやつだね。うわ、落ち込む…。

「まじで、ごめん…」

「いいよ。あやまないで。大丈夫…」

しばらく俺は、うつむいて謝ってたけど、そう言われて、桃子ちゃんを見た。桃子ちゃんは、

「大丈夫…。今までありがとう。楽しかったよ」

と、必死で笑顔を作ってた。

「そのうち、多分、思い出になって、ほ、他に好きな人でも出来て…。聖君のことも、蘭や菜摘とも、話せるようになって」

「えっ?!何それ?!?!?!」

「…え?」

桃子ちゃんは、目を真ん丸くした。いや、絶対にその時は、俺のほうの目の方が、丸くなってたと思う。

10 俺の気持ち

「別れ話？ってか、俺と会わないつもりでいる？」

「え？だって…」

「俺そんなこと一言も言っていないし。なんでそうなの？なんで勝手に、話作るかな？！」

「でも、聖君も、ごめんって今…」

「泣かせて、ごめんってことだよ。だいたい、なんで俺が今日、別れ話に来なくちゃならないわけ？なんでそうなるの？」

「だって…、なんで会いに来たのが、わからなくて…」

「へ？！…！」

わからないって、何それ。何それ……！！！！……？？？？

「こ、この前、俺、みなとみらいの帰りにさ、言っただよね？」

「何を？」

「……」

何をつて……。ガク……。ちよつと、脱力。

あれ？言っただよね？俺、確か……。

「これからも、付き合おうよって、言っただよね？俺……」

「……うん」

「それに、桃子ちゃんのこと好きになってるって、言っただよね？俺……」

「……」

「……」

え？なんで無言？！

「そう言われて、あとでいろいろと考えて」

「考えたって、何を？」

「友達としてこれからも、付き合っってことかなとか……」

「へ？」

「好きって言うのも、友だちとして…って感じかなとか…」

「はあ?!」

「……」

「……」

しばらく、二人で固まった。俺は、頭の中でその時のことを思い出していた。

「手…、なんてつないで、帰らなかったっけ?俺ら…」

「…うん」

「俺さ、もう、てっきりわかってくれてるもんだって…」

「え?」

「だから、あれでもう、俺ら、これからもちゃんと付き合っていくんだと思ってたし、俺の気持ちもわかってもらえたんだよなって、そう思ってた…」

「え?」

さっきから、桃子ちゃんは、目を丸くしたままだ。ああ、ポメラニアン…。いや、マルチーズだっけ?ああ、どっちでもいい。それどころじゃない。

「だから…。だから、今日は、デートのつもりで、いや、つもりも何も、デートなんだよ。わかってる?」

「ううん…」

桃子ちゃんは、首を横に振った。

「ええ?わかってないの?」

がくくくくくくくく。脱力。俺は、椅子に思わず、のけぞった。

ええ?何それ…。俺一人で舞い上がった?でもさ、でもさ、でもさ…。日曜だって、メールずっと交換してさ…。じゃ、あれは何?そのことを聞くと、俺がすごい落ち込んでると思って、めいっぱい励ましてたメールだったらしい。

だけど、どんな動物が好きとか、最近映画は何を観たとか、そんなのだよ？彼女とするような、ラブラブなメールのやりとりだって、俺だけ思ってたわけ…？

ますます、脱力。力がほとんど抜けていく。

俺がかなり、腑抜けになっているのを見て、桃子ちゃんは、申し訳なさそうに謝ってきた。

「ごめんね…。私、信じられなくて」

「…俺が？」

「違うの…。そうじゃなくて、聖君がまさか、私のことを好きになつてくれるわけがないって、そう思ってた…。好きだっていうのも、付き合うつていうのも、信じられなくて…」

「やっぱ、俺のことが信じられないってことじゃん」
「違うよ」

「そうじゃなか。俺の言ってることが、信じられないってことでしょ？」

「信じたいけど…。自信がなくて」

「…なんの？」

「私、蘭みたいに綺麗じゃないし、スタイルも悪いし、背も低いし…」

「それが？」

「それに…。菜摘みたいに、明るくないし、運動も苦手だし、頭もよくないし、何もとりえないし…」

「……」

「だから、私なんて、好きになってもらえるわけないって…」
「……」

「聖君が、私のどこを好きになつてくれたか、わからなくて。だから、きつと、友達としてってことなんだって思ってた」
「?????え？」

「じゃなかったら、私の気持ち知ってたから、気を使ってとか、悪いなって思ってたか…」

「は?????」

「だって、わからないんだもん…」

桃子ちゃんは、また、下を向いた。顔が真っ赤だ。それに泣きそ
うだ。

「……」

しばらく俺が黙っていると、桃子ちゃんはそっと俺のことを見た。俺と目が合つと、また、視線を下げてしまった。俺の返答を待ってるんだろっな。

俺は、一生懸命何て言うかを考えてた。俺が、桃子ちゃんのことをどう思ってるかを、正直に言ったら、いいだけなんだろうけど。

でも、好きだって言っても信じてくれないってんなら、どうすりゃいいんだ？

「もっとさ…、自分に自信持ったら…?」

わあ、陳腐な台詞、何言ってるんの俺…。

「そうなんだよね。そうなんだけど…」

「うん…」

「走るのも、遅くって、駄目だなんて思ったよね?」

「何が駄目なの?」

「かつこ悪いって言うか、聖君も笑ってたでしょ?」

「え?ああ、さっき?違うよ。走るの遅いのに、頑張って走ってきてくれたんだと思ったら、いじらしくなったただだよ」

「い、いじらしい…?」

「うん」

「……」

桃子ちゃんは、真っ赤になった。

「そ、それにね。印象も薄いでしょう？蘭とは、話しやすいって言うてたでしょ？すごく楽しそうだったし。菜摘は、好きだったから、意識して話せなかったんでしょ？でも、私のことは、あまり話しても話さなくても、よかったんだよね？」

「え？」

ギク…。ばれてたか。

「なんとなく、そういうのわかってたけど…。私、いてもいなくてもいいんだろうなって。だけど、聖君と話せなくても、蘭とバカやって大笑いしてる聖君のこと、見てるだけで、幸せだったし…」

それ、照れるってば…。

「蘭も、菜摘も、告白しなよとか、付き合いなよとか、もっと頑張つてとか言ってくれてたの。でも、告白する勇氣もないし、言うつもりもなかったし、彼女になれるなんて思ってもみなかったし、付き合う気だつて、なかったんだ」

「そうだったの？」

「だって、なんとも思ってくれてないなって、なんとなくわかってたし。ふられちゃうだろうなって、それもわかってたし。それよりも、みんなで会って、わいわいできたらそれでいいって、思ってたんだ」

「……」

「だから、菜摘にも、蘭にも、私が聖君のことを好きなのは、黙っていてって頼んだの」

「でも、菜摘ちゃん、ばらしてたよ？俺に」

「うん、だから、びっくりして。でも、聖君が、菜摘を好きだつてわかって、もう絶対にそっちを応援しなくっちゃって思ってた」

「え？」

「だって、だって私のことなんか、好きになってももらえるわけない

って、確実にわかってたし。もう、聖君の恋の応援するのが、きつと私の役目なんだ…、くらいに思っちゃって」

「……………」

俺は、開いた口が、またふさがらなくなっていた。

「そ…、そんなふうに思ってたの？」

「うん」

「そつかあ。じゃ、あれかあ…」

「え？」

「俺が、桃子ちゃんのことを好きだの、付き合おうって言っても、なかなか信じられないよね？」

「うん！」

そんなに、はっきりと「うん」って…。

「じゃあ、信じられないことが、起きちゃってるわけだ…」

「うん…。まだ、混乱してて…」

「混乱してるの？頭の中ぐるぐる？」

「うん。思考回路もゼロ。真っ白…」

そつか。さっきの俺か…。

ああ、なんか、意地悪心が出てきた。もしかして、好きな子いじめて楽しむタイプなの？俺って…。でも、もう少し、驚く顔が見てみたいというか、こんなことを言ったら、どうするか見てみたいっていうか。

「じゃ…。俺が桃子ちゃんのどこを好きになったかとか、どんなふうに思ってるかとか言えば、信じられるかな？」

「え?!」

一瞬、桃子ちゃんは、たじろいでいた。固まっただまま、

「うん」

と、小声で言った。でも、身を引いたままだった。

「えっと。小型犬みたい。今も目、まんまるで、ポメラニアン…。あれ？この前はマルチーズだった。あ、そっか。服の色か。今日は、茶色だからか…」

「……。ポメラニアン…？」

「笑顔は、なんか、綿菓子？」

「……。綿菓子…？」

「それから、えっと。さっき後ろ歩いてて、ポニーテールが左右に揺れて、面白いなって」

「……」

桃子ちゃんが、どんどん脱力していくのがわかった。さっきまで、すんごく力入れてたのにな。

ええ？私、犬なの？綿菓子なの？ポニーテールが揺れててどうなの？それ…、みたいな感じ？

「あはは！」

あまりにも、桃子ちゃんが、力なく俺のを見てるから、思わず笑っちまった。

「え？」

なんで、笑われたのかは、わかってないよな。

「ごめ…。あははは。でも、可愛くてさ。桃子ちゃん」

「か、可愛い？」

「ごめん、ああ、腹いてえ…」

「……」

やば、ちょっと泣きそう？

「はあ。わかった。ちゃんと白状するから。しっかり聞いてて。それで俺が言うこと全部、信じてくれる？」

「…うん」

まだ、桃子ちゃんは泣きそうな顔をしてる。

「可愛いんだ」

「え？」

いきなり、それだけ言うと、桃子ちゃんはまた、目を丸くした。

「可愛いし、いじらしいし、なんか桃子ちゃんといると、やばいんだよね」

「やばい？」

「うゝゝん。なんて言ったら一番びつたりくるかなゝゝ。桃子ちゃんのどんな表情も、仕草も、どれ見ても、可愛いなって思えちゃうんだよね」

「……」

桃子ちゃんは、みるみる顔が真っ赤になった。それは止まなくて、耳まで首まで、真っ赤だ。色白だから、まるわかりだ。

「あ、今も…。真っ赤になつてて、可愛いなつて」

桃子ちゃんは俺が、そう言うと、両手で顔を思い切り隠した。

「あ、それも…」

俺が、そう言うと、小さな声で何かを言った。

「え？」

聞きなおすと、

「嘘だ」

つて、少しだけ大きな声で、そう言った。

「嘘じゃないよ」

つて言つても、まだ、顔を隠したままにしている。

「小型犬みたいで可愛いし、綿菓子みたいで可愛いし、ポニーテールが揺れてるのとか、後姿とか、歩き方とかも、可愛いなってさつき、後ろ歩きながら、思ってたよ」

「…嘘」

「嘘じゃないつて。俺、こんな恥ずかしいこと、嘘つかないよ。嘘で言えないよ」

「……」

桃子ちゃんは、ようやく手をおろしたけど、思い切り、顔を下に向けたままだった。

「今も、思考回路ゼロ？頭の中、ぐるぐる？」

桃子ちゃんは、黙って、こくってうなづいた。

「でも、なんとなく、俺が桃子ちゃんを好きだっていうの、信じられそう？」

「……」

無言だった。こくりとも、うなづかない。っていうか、少しだけ首を、斜めにしたような気もする。

「あれ？まだ、信じられない？」

「……」

すごく小さく、桃子ちゃんはうなづいた。

「さて、どうしようかな、俺。どうしたらいいかな……」

俺は、まじで、悩み出していた。正直に話してみたんだけどなあ。い、いつから？」

桃子ちゃんは、小さな声で聞いてきた。

「桃子ちゃんのこと、好きになったのってこと？」

「うん……」

「いつからだっけ？菜摘ちゃんに、桃子ちゃんが俺のことを好きだっていうのを、聞いて……。それで、少し意識するようになって。それからかな」

「……」

桃子ちゃんは、少しだけ顔を上げて、俺を見た。上目遣いのその目、ほら、やっぱり小型犬。そういう目、するじゃん、犬って。目、うるんでるしさ……」

「意識して、桃子ちゃんのこと見てたら、すごく可愛い子なんだなあって思ってた」

「……」

桃子ちゃんはまた、顔をさげてしまった。

「えっと。他には？なんか聞きたいこと、ある？」

桃子ちゃんに、聞いてみた。こうなったら、どんな質問でも受け付けようって感じた。

「菜摘のことは、本当に、もう？」

「ああ、うん。きっと、桃子ちゃんがいてくれたからさ、立ち直るの早かったんだと思うよ、俺」

「じゃあ、私も役に立てたの？」

「うん、もちろん」

やっと、桃子ちゃんは顔を上げて、にこって微笑んだ。

「良かった」

「……」

まったく。そういうのは、信じてくれちゃうわけね。

「店、そろそろ出る？」

俺がそう言くと、桃子ちゃんもうなづいた。

その店を出てから、少し駅と反対の方向に歩き出した。こっちに、桃子ちゃんの家はあるようだ。

「すぐそこにね、大きな公園があるの。けっこう、気持ちがいいんだよ」

「ふうん、じゃ、そこ行ってみたいな」

「うん」

桃子ちゃんの横に今度は、並んで俺は歩いた。並ぶと、けっこう身長差があるのがわかる。

「身長、何センチ？」

桃子ちゃんに聞くと、少しだけ言つのをためらってから、

「147センチ」

とぼそって言った。

「え？そうなの？150ないの？」

「…うん」

「そっか…。じゃ、俺と30センチくらい、差があるんだね」
「177センチ？聖君」

「178センチかな。2年になってから、また伸びたんだよね」

「え？そうなの？私、中3の頃から変わってないよ…？」

「成長期終わっちゃった…、とか？」

「うん、そうかも」

少しがっくりした表情を、桃子ちゃんはしていた。

「でも、背が小さいのも、可愛いじゃん」

俺がそう言うと、桃子ちゃんは俺のほうを見て、少しだけ、笑って見せた。

公園の中に入ると、けっこう涼しかった。ベンチがあるから、二人で腰掛けて、空や緑を俺はぼーっと、眺めた。

「夕日、綺麗だね」

だんだんとあたりは、暗くなっていた。

「うん。ほんとだ」

桃子ちゃんは、そう言うと、目を細めて夕日を見た。

「徐々に、日が短くなってるよね」

「うん」

「文化祭、いつだっけ？」

「え？うちの学校？11月の最初」

「そっか、あと1ヶ月くらいだね」

「うん」

「葉一や、基樹と行くからね」

「うん」

「制服見に…」

「え？何それ？」

「基樹とかと言ってるんだ。どんな制服なんだろうって。ちょっと楽しみ」

「ええ？平凡だよ？紺のボレロに、紺のスカートで、ブラウスには赤のリボンするだけで」

「へへ。赤のリボン。ところでボレロって何？」

「ブレザーが短くなつたみたいなやつ…」

「へへ。どんななのかな？」

「聖くんの学校は？ブレザー？」

「そう、グレーのブレザー。女子もね。女子はこのパンツの柄で、スカートなんだ」

「チェックの柄なの？可愛いよね」

「ううん、そうかな？女子もネクタイなんだよ。リボンの方が絶対可愛いよね？」

「どうかな？？わかんないや」

「やっぱ、楽しみだな」

俺は、ちよこつとうきうきしてた。

「制服、かっこいいね」

「え？ああ、これ？そう？よくあるパターンでしょ？」

「うん。でも、私服もいつもかっこいいけど、制服もかっこいいよ、聖君。ちよこつと大人っぽくなるよね」

「え？そうかな」

「うん…」

俺は、なんだか恥ずかしくなった。

「えっと…」

ぼり…。頭を掻いた。言葉が続かなくなった。桃子ちゃんは、夕日に照らされて、顔が真っ赤だったけど、もしかして恥ずかしがって真っ赤だったのかもしれない。

ああ、じゃ、俺も夕日で顔が赤いのか。じゃ、今、赤くなっても、ばれないってことか。

下を向いてる、桃子ちゃんに少しだけ顔を近づけると、

「え？」

って、びっくりして、俺の顔から、桃子ちゃんは遠ざかった。

ああ…。ちよっと近づけた俺の顔。どうしたらいいものか…。

俺は、また、まっすぐに向きなおした。そして、少しだけ、俺は下を向いた。なんていうか、照れ隠し？

桃子ちゃんも、姿勢を戻した。まっすぐに体勢を戻したけど、下を向いてた。

ちらりと横を見ると、桃子ちゃんは、黙って下を向いたままだった。

あれ？でも、どっかをぼーって見つめてて、かなりの無防備状態…？

俺はまた、思い切って、それも、さっきよりもかなりのスピードで、桃子ちゃんに顔を近づけて、ほんの少しだけ、唇に触れた。

桃子ちゃんは、目を真ん丸くして、こっちを見た。

しばらく固まってたけど、

「○ × ■ ！」

と、声にならないわけのわからないことを、口走っていた。いや、口走っているというよりも、口だけ動いていたという方が、正しい表現かな。声になってなかったもんな。

「だって、最高のキスのチャンスだったじゃん、今…」

って言うのと、また、何かを言おうとして口をぱくぱくさせた。

「あ、さっき、一瞬、気をぬいたでしょ？一回目は、回避できたけど、そのあとまた、俺がキスしようとするって思ってたでしよ？」

と言うと、

「もう！…！」

とようやく声を出して、両手で顔を押さえてしまった。

「あはは！可愛いよね、本当にさ」

俺がそう言つと、また、小さな声で、桃子ちゃんは、「もつつ」
つて言つた。

これだけ、俺アピールしたら、いい加減、信じるよね？俺が桃子ちゃんを好きだつていう気持ちさを。

それから、俺は、なんてことのない話をし出した。今の担任、絶対にかつらだとか、俺のじいちゃん、ヨットに乗ってるんだとか、そんなたわいのない会話だ。

桃子ちゃんは、笑つてそれを聞いてた。桃子ちゃんも、学校の話や、家の話をしてくれた。

猫を飼っている話だとか、妹がいて、桃子ちゃんよりも背が高いんだつて話だとか。

時間はあつという間に、過ぎていった。日が暮れて、暗くなって、俺はそのまんま、桃子ちゃんを家まで送つていった。

11 妹

家に帰って来ると、もう母さんも父さんも、杏樹も夕飯を食べていた。

「あ、遅いから先に、食べちゃったわよ」

と母さんは言うのと、俺のご飯の用意をしようと、席を立った。

「いい、いい。あとで。ちょっと変な時間に、食べてきたから、まだお腹すいてないし」

そう言っただけは、2階に上がろうとすると、

「桃子ちゃんとデート？」

と、父さんが言ってきた。

「え?! お兄ちゃん、彼女できたの?」

杏樹が驚いていた。

「可愛い子なんだよ」

と、父さんが言う。

「え~~~~! 会いた~~~~い。ああ、でも友達みんな、がっかりしちゃうかも!」

「杏樹、なんで友達がっかりするの?」

「けっこう、お兄ちゃんのファン多いんだよ。私の周り……」

「へ~~~~、お前もてるんだ!」

父さんが、そうひやかした。

「うっせ~~~~よ、杏樹、よけいなこと言うな!」

「お兄ちゃんって、けっこう硬派でしょ? 彼女なんかいらねえよって去年そんなこと言ってたから、絶対彼女作らないと思ってたのにな~~~~」

「うっせ~~~~! うっせ~~~~!」

「硬派ね~~~~。でも、彼女、すごく可愛いんだよ」

「父さんも、うるさいよ。じゃ、俺、勉強あるから……！」
そう言つと、俺はさっさと2階にあがった。

そうなんだ。実は、去年、俺は基樹と「女なんてな……」って硬派をきどっていた。

学校で、そんな感じだったから、女の子とあまりふざけたり、話したりもしなかった。どうも、その印象が定着してしまったようで、いまだにクラスの女の子は、俺らに話しかけてこない。

でも、なんでだか、バレンタインにチョコだけはくる。それも、直接じゃなくって、ロッカーに入っていたり、本人の友達つてのが持ってきたりするから、もらったところで、進展もしない。

で、彼女ができなくって、基樹と、これは学校以外のところで、みつけるしかないって、海の家でバイトをしたんだ。

初めは、海でナンパだ……って言ってたんだけど、話しかけるところを二人でシュミレーションしても、まったく、無理だ、できないということがわかって……。

それで、高1の時、つるんでたメンバーで、バイトをすることにした。

葉一は、夜、バイトがあつたのに、昼間もバイトしたいからって言つて、やってたんだよね。

まあ、俺も夜は店の手伝いとかもしてたけどさ……。

葉一は、彼女を作るのが目的じゃない。ただ単に、バイト代が欲しかったからだ。

で、基樹が蘭ちゃんに声をかけて、そこに俺も混じって、わいわい話しているうちに、菜摘ちゃんも話に加わってきて、4人で盛り上がった。

バイトの休憩時間に、話でもしようつてことになって、初めて葉一もそこに同席して、桃子ちゃんがいることに俺も気づいて……。

第1印象。おとなしい子だな。なんつつても、その時まで、蘭ちゃんと菜摘ちゃんの二人で海に来ていると思っていたほどで…。多分、後ろの方で黙ってたんだろうな。

そつえば、葉一が気を使つて、桃子ちゃんに話しかけてた気がする。

俺は、蘭ちゃんと話をしながら、いつ菜摘ちゃんと話をするか、仲良くなるか、そんなことばかり考えてたと思う。

人間、どこでどうなるか、わからないもんだよな。まったく、気にも留めてなかった子のことが、好きになってたりするんだもんな。

「あ、やべ…。上の空だった。勉強、勉強」

俺は、とりあえず、大学には行こうと思つてゐる。海洋学、興味あるんだよね。海の生物や、海のことごく興味がある。多分、父さんの影響。

大学入つて、夏休み、父さんといろんな海に潜りに行く…。そんな計画を、密かに父さんと立ててゐる。父さんの夢だったらいい。いろんな海に潜りに行く。それを、俺と行きたかつたて言つてた。嬉しかった。

だから、高校卒業したら、ダイビングのライセンスを取ろうかと思つてゐる。すげえ、楽しみ。

父さんや母さんと、そのうちに俺ら家族も伊豆に越そうかつて、よく話してるんだ。杏樹が高校卒業するまでは、ここにゐるとして、でも、そのあとは、伊豆に行くのもいいよなつて。

父さんは、プログラマーの仕事してるけど、それも、フリーでやつてるから、伊豆に越しても仕事は出来る。

じいちゃんや、ばあちゃんや、春香さんもゐるし、俺、春香さんのだんなさんから、サーフィンも教えてもらいたいし、じいちゃん

とヨットにも乗りたいし。今年の夏は、2泊しか伊豆に泊まれなくて、あんまりいろんなことができなかったしな。

来年は受験勉強で、旅行どころじゃなくなるかな。じゃ、やっぱり大学行つてからか…。

そんなことを考えただけで、けっこうわくわくするんだよね。

あ、みんなで伊豆に行くのもいいな…。うーん。桃子ちゃんと二人の方がいいか。

あ。だから、俺、勉強しようよ…。まじで。

そこにいきなり、携帯が鳴った。っていつても、メールだ。

>今日は、ありがとう。

桃子ちゃんからだ。あれ？それだけか…。

>こっちこそ、楽しかった。サンキュー。今、何してるの？

俺は、桃子ちゃんにそうメールを返した。

>夕飯食べて、お風呂に入ってた。聖君は？

そうか。お風呂上りか…。もう、パジャマかな…。

>俺は、勉強中！すごい？えらい？

って、いろんなことを考えて、勉強してないのに…！

>ごめん。邪魔したね。勉強続けて。

>うそうそ！勉強してないよ。全然頭に入らなくて。今日はもう、勉強できなさそう。

>え？そうなの？なんで？

なんで…、か。

>そりゃ、やっぱり、桃子ちゃんのこと考えちゃうから。なんつって（> <）

しゅん…。

あれ？返信ないし…。呆れちゃった？しょうがない。勉強、やっぱりするか…。

机に向かい、ノートを開き、教科書も開き、シャープペンも持ち、本気モードを出した頃、ブルル…携帯が鳴った。

>冗談ばかり！そういうの、本気にしちゃうから、やめてね（<—>）

…。あれ…。

>冗談じゃないし、ほんとだし。だから、本気にしていいし。

また、しばらく経ってから、メールが来た。

>私も、ご飯も食べれなかった。

つていう短い文。

>なんで？

俺も、短く返した。

>だって、聖君のことと思うと、胸いっぱいになって、お腹も空かないから。

え~~~~~~~~?????

しばらく返信ができなかった。携帯を持ったまま、俺は真っ赤になつてたと思う。え~~~~と、なんて返信する…？と、とりあえず。

>て、照れます…（^^ゞ

とだけ、返してみた。また、しばらく返事がなかった。

5分位してから、

>でも、ほんとのことだし。

つてメールが来た。あははは…。し返しのつもり？これ。

ああ、やっぱり、駄目。勉強駄目。手につかない。それから、また1時間くらいは、メールのやりとり。

俺、自分でこういうの、するとは思わなかった。葉一や、基樹とメールはけっこうしてたけど、まさか、女の子と、こんな顔文字いれて、メールするとはな〜。

学校のやつらには見せられないよな〜。こんなメール…。

10時過ぎて、母さんが、

「夜ご飯は食べないの……？」

と、1階からどなってきたから、

>髪乾かした？ちゃんと乾かして、寝ないと風邪引くよ。じゃ～ね

(^^)

と、桃子ちゃんにメールをしてから、1階に下りていった。

リビングに行くと、俺の夕飯があきらかに冷めてる感じで、並べ
てあった。

「もう、そのうちおりてくるだろうって思ってたら、全然来ないんだもん。冷めちゃったわよ。あ、ご飯だけは、今、よそってきたけど！」

「ごめん……」

「寝てたの？」

母さんにつっこまれた。

「いや……」

「まさか、本当に、勉強？」

「……」

俺はつい、無言になった。どうも、こういう時に、嘘がつけない。

「メール……。してました」

と、正直に言ってるし……。

「ああ、桃子ちゃんとか……！仲いいな……」

と横で、テレビを観ている父さんが、また、ひやかした。

「うつせえって……」

すぐく小声で言ってから、俺はご飯を食べ出した。

「お前、けっこうあれだもんな。まめだもんな。友達ともよく、メールしてるんだろ？」

「ああ。うん」

「それに、杏樹や、くるみにもメール送ったりしてるんだって？」

「用がある時だけだよ」

「俺には、ないじゃんか」

「父さんに用って、あんま、ないし」

「え…」

ちよこつと、ショックって顔を、父さんはした。

母さんには、用事があるとメールをする。用事っていつても、今日のバイト、ちよつと遅れそうとか、夕飯いらなとか、そんな感じのメールだ。

杏樹は、けっこうなんでもなくても、メールをよこす。友達の家
の猫、可愛いから送るねって写メを送ってきたり、お兄ちゃんのお
やつも買ってくね、どれがいい？ってケーキ屋でケーキのサンプル
品を写メで送ってきたり。

そついうの、けっこう可愛いから、いちいち、俺もメールを返し
てたし、俺も、杏樹にケーキでも買ってってやるかって思ったとき
には、写メ撮って、聞いてみたり、俺と基樹の変顔を送ってみたり。

妹って、いて当たり前だったけど、けっこう可愛い存在だよな。
それも、杏樹みたいに、まあ、うるさいはうるさいけど、慕ってく
れたらさ。

基樹にも妹がいて、それも、一こ下で、生意気で全然可愛くない
って言うってたけど、年が離れている方が、可愛いって思えるのかな
あ、そつか。一つ下なら、蘭ちゃんや、菜摘ちゃんとタメじゃん
か。妹と同じ年の彼女ってどんな感じなのかなあ…。

ああ、そつか。俺には、もう一人、妹がいるんだっけ。まだ、ぴ
んとこないな。一つ下の妹。今、何してるのかな。まだ、落ち
込んでるのかな？

ご飯食べて、風呂に入って、結局そのまんま、俺はぐうすか寝て

しまった。

桃子ちゃんとは、そんなこんなで、よくメールをしあってた。学校で基樹と、バカやってるところを、葉一に写メ、撮られて、葉一が、勝手に桃子ちゃんに送ってたこともあった。

> 今日、葉一君から、写メきたよ。基樹君と、写ってた。本当に仲がいいんだね。

って、メールが桃子ちゃんから来て、まじ焦った。何？どんな写真……？

すぐに、葉一に電話して、どんな写真を送ったんだと問い詰めた。そうしたら、その写真を送ってくれたんだけど、やばい！思い切り、基樹と、バカな面して、大笑いしている写真だ。ああ、なぜ、こんなのを。ちきしょう……。いつか、仕返ししちゃう……！

葉一に彼女が出来たら、絶対変な顔を写して送ってやるんだ。でも、それもそんな遠くはない未来になりそうだ。葉一と菜摘ちゃんが、どうやらいい雰囲気になってると、基樹が言ってた。

俺と、桃子ちゃんは合流できないけど、4人で会ったりしてるらしい。その時に、二人がいい雰囲気だったと、基樹が言ってた。6人でまた、会えるようになるのも、近いかもよって、付け加えて基樹は言った。

徐々に、菜摘ちゃんは、回復してるんだな。そのうちに、本当に菜摘ちゃんに、

「お兄ちゃん」

と言われる日が、来るかもしれない。今から覚悟しておこうかな。

桃子ちゃんとは、週末デートをした。江ノ島に来ることもあったし、俺が桃子ちゃんちの近くに行くこともあった。

夜はバイトがあるし、桃子ちゃんちも門限があるから夕方までの、健全なデートだけだよ…。

相変わらず、桃子ちゃんは可愛くて、その日の服の色で、ポメラニアンになったり、マルチーズになったり…。

江ノ島に来た時には、れいんどろっぷすにも来た。初めてそこで杏樹とご対面して、杏樹は、可愛い可愛いって大変だった。

「こんな可愛い人が、お兄ちゃんの彼女なのが、信じられない」
なんでだよ、おいっ！後ろから、つつこみを入れてやった。

それから、桃子ちゃんと、海に行ったり、ゲームセンターで遊んだりした。

桃子ちゃんは、杏樹のことを、すごく可愛がってるんだねって言って、ちよっと、羨ましがってた。

「桃子ちゃんのこと、可愛がってますよ。俺」

って、そう言って、頭をよちよちってなでると、

「私、犬じゃないもん！」

って、ふくれつつらをした。

あはは…。可愛い。運動が苦手と言ってたけど、ほんと、ゲームも悲惨なものだった。面白いよな。

いろんな桃子ちゃんを知っていったけど、やっぱり、どの桃子ちゃんも、「可愛い」それ以外には、ないよ。うん。

11月初め、桃子ちゃんの学校の文化祭の日がやってきた。

基樹と俺と葉一は、少し、いやかなりの、緊張。だって、女子高だよ？初めて、女子だけの学校に足を踏み入れちゃうんだから。

3人で、さて、祭日だけど私服でいいのか、制服がいいのか、悩んでしまった。

「でも、他校の生徒、制服で…、なんて言われてないはずだし」
で、結局、私服で行くことにした。

まだ、6人で会ってはいなかった。でも、学校ではもう、菜摘ち

ちゃんと蘭ちゃんと、桃子ちゃんの3人で行動をしているってことだったし。

あ、じゃあ俺だけが、しばらく菜摘ちゃんに会ってなかったのか…。

どんな話をしたらいいのかな。どんな態度をとったらいいんだろうか。

俺は少しだけ、緊張していたけど、でも、会っちゃえばきっと、そんなの関係なく、普通に接することが出来るんじゃないか…、そんな気持ちもあった。

学校の入り口で、蘭ちゃんが待っていた。

「基樹！聖君、葉君！」

蘭ちゃんが、俺らのことを見つけた。けっこう人がたくさんいて、見つけられるかなって話してたけど、あっという間に、蘭ちゃんは俺らのことを見つけちゃった。

蘭ちゃんの隣に、知らない女の子が二人いて、

「蘭の彼氏、どれ?!」

って聞いていた。クラスメイトのようだ。基樹は隣で、思い切り、緊張している様子。

「私の彼は、この人。基樹」

蘭ちゃんは基樹と腕を組んで、友達に紹介してた。基樹は、

「あ、どうも…」

と、かちんこちんになりながら、挨拶をしていた。

「や〜い、がちがちになってやんの」

小声で俺がそう、ひやかすと、すぐさま蘭ちゃんが俺を指差して、「で、こっちが桃子の彼氏」

と言った。げ！俺のことも紹介するか？

「え〜〜〜!!!桃子、彼氏、いたの?っていうか、なんか意外〜!すごかったこい〜〜〜!」

と、すごい驚きのリアクションが返ってきた。

「え？」

俺も、がちがちに固まってしまった。

「とにかく、私らのクラスに来てね。カフェやってるんだ。桃子と、菜摘は今、ウエイトレスしてるから」

「桃子ちゃんが、ウエイトレス？大丈夫なの？」

俺は、ついそんな質問をしてしまった。

「うっっん、やばいかな？けっっこう他校の男子に、人気あるみたいだけど」

え？え？何それ？

「って、そうじゃなくて、いろんなドジしてないかって…」

「ええ？大丈夫だよ。あの子ああ見えても、その辺はちゃんとやってるよ。まじめだしさ」

「そうなら、いいけど」

いや、よくないだろ。もててるって？そっちの方が、やばいだろ。ちよっとひきつりながら俺は、歩く速度が増していった。

「いらっしやいませっっ！！」

教室のドアにぶらさがってる、のれんみたいな布切れをめくると、元気な菜摘ちゃんの声がした。

「あ！聖君！」

菜摘ちゃんは、予想をはるかに超えたりアクション。すげえ、元気はつらつ。

「来てくれたの？入って入って」

「菜摘！菜摘の彼氏はいないの？その人は、桃子の彼なんでしょ？」

後ろからついてきた、クラスメイトらしき女の子がそう言った。

「聖君？そうそう、桃子の彼氏で、私の兄貴」

「え？」

「私の彼は、後ろにいる葉君」

女の子の後ろに突っ立っていた、葉一を菜摘ちゃんは、指差した。
「ええ？」

女の子たちは、同時に振り返り、葉一の事を見た。葉一はやっぱ
り俺と同じように、固まっていた。

「兄貴？」

一人の女の子が、つぶやいたけど、もうその時には、菜摘ちゃん
は俺らのことを、

「こつちこつち！」

と席に、案内していた。

蘭ちゃん、俺、葉一、基樹で、その席についた。蘭ちゃんは今休
憩中らしくて、あと、1時間したら当番が回ってくると言ってた。

「じゃ、俺らとしないで、基樹と二人でどっか行ってきたら？」

「ええ？そう？いい？別行動しても」

「いいよ、いいよ」

俺がそう言っていると、ごめんねって言いながら、教室を二人で出て行
った。

俺と葉一が、席で待っていると、メニューと水を持って、桃子ち
ゃんがやってきた。制服のブラウスとスカートに、可愛いひらひら
のついた真っ白なエプロンと、ひらひらがついた、真っ白なカチュ
ーシャをしている。

あれ？でも、菜摘ちゃんは、普通に紺色のなんでもない感じのエ
プロン。カチューシャもしていない。

周りを見回してみると、何人かは白のひらひらエプロン、何人か
は、なんでもないエプロンをしていた。で、その白のひらひらエプ
ロンの子は、見た目が小さめで、女の子の子している感じだった。

「聖君、葉君、来てくれてありがとね。えっと、ご注文は…何に

しますか？」

少し恥ずかしそうに、桃子ちゃんが聞いてきた。

「え？ああ、俺、アイスコーヒー」

葉一は、メニューを見ながら、そう答えた。

「俺、コーラでいい」

と俺は、メニューも見ないで、そう答えた。

「アイスコーヒーと、コーラですね」

につこりと微笑むと、桃子ちゃんは、その場を去った。

それから、注文を言いに行き、他のテーブルにまた、水を持って
いって、注文を聞いていた。

その席には、3人の他校の男子がいて、

「ねえ、桃子ちゃんって言うの？可愛い名前だね。いつ休憩？」

と聞いていた。何？なんで、名前わかんのか？他の子を何気に見たら、
名札がエプロンにくっついてた。

あちゃ〜。なんでわざわざ、名前まで、教えるようなことを…。

俺は、そいつらをぎらって睨んだけど、もちろん全然、気づいて
いない。桃子ちゃんは、

「ご注文はなんですか？」

と、まったく質問に答えないで、注文を聞いていた。

「休憩の時間教えてくれたら、注文しようかな〜」

ムカ！むかつくやろうだ。俺はグーでなぐりにいつてやろうかと

思った。でも、

「まあまあ…」

と、それを見ていた葉一に止められた。

「桃子、もうすぐ休憩なんです。私も、休憩なんです〜」

と、後ろからそこに、菜摘ちゃんが慌ててやってきて、答えていた。

「え？な〜んだ。もうすぐなの？じゃ、案内してくれないかな？」

「でも、私の兄貴とその友達に来てて、一緒に回る約束してて、あ、

あつちの席にいる。私たちが休憩はいるの待ってるんです」

「兄貴ってお兄さんでしょ？お兄ちゃんなんかとしないで、俺らと
回ろつよ」

むかむか……。

「でも……。私のお兄ちゃんが、桃子の彼氏で、その横にいるのが、
私の彼氏だから。お客さんたちとは、回れません。他のフリーの女
の子を誘ってくださいね！」

と、元気いっぱいに菜摘ちゃんはそう言うと、桃子ちゃんにあつち
のテーブルお願いと言い、自分がその男子から注文を聞きだしてい
た。

桃子ちゃんは、ちょこつと頭を下げて、俺らが頼んだコーラと、
アイスコーヒーを運んできた。

「は……。あぶなかった。桃子ちゃん、なんでそんな格好してるの
？男子の餌食になるようなもんじゃなか。ちよつと間違えたら、メ
イドカフェだよ？似合うけどさ。……あ。失言！わりの、聖」

俺が思い切り、睨んだのに気がつき、葉一が謝った。

「う。そうなんだよね。でも、前半で、5人、後半で5人、この格
好をしようってことに決まっちゃって。それも、私は絶対このエプ
ロンだって、みんなが勝手に決めちゃって」

「う……。似合うもんな。その格好で、たくさんの男子を集めて、
利益をあげようという作戦か」

葉一は、なるほどって顔をしていた。

「……」

俺は、黙ってコーラをごくごく飲んでいた。

「でも、もう休憩だから。このエプロンもはずせるんだ」

「そう？良かったね。じゃなきゃ、こいつが何しでかすか」

「え？」

「さっきの男子にも、こいつ殴りかかるかと思ったよ。いいタイミングで、菜摘ちゃん、止めにはいつてくれた。じゃなきゃ、聖が、殴りに行ってた」

「聖君が？」

「……」

俺は、ストローで、コーラを飲みながら、桃子ちゃんの顔を見た。

それから、下を向いて、思い切り機嫌の悪い声を出して、

「あんまり、そういう格好を、他のやつに見せないでくれる？」
と言った。

「ごめん……」

桃子ちゃんは、小声で謝ってから、また、戻って行った。

あゝあ。桃子ちゃんに言っても、しょうがないことだけださ。

可愛いことは、可愛い。めっちゃ、可愛い。それを他のやつも見てると思うと、むかつく。

う。俺、こんなにやきもちやきなわけ？

1時間もしないうちに、蘭ちゃんと基樹が戻ってきて、俺と葉一と、桃子ちゃんと菜摘ちゃんとで、教室を出た。

「どうする？4人でもいいけど、やっぱり別行動がいいよね」
と、菜摘ちゃんが言った。

「でも……」

桃子ちゃんが、遠慮がちに、俺の顔を見た。

「うん、どっちでもいいけど。葉一が多分、菜摘ちゃんと二人っきりの方が、いいんじゃないかって思って」

と俺が言つと、葉一は、戸惑っていた。

「な、何、ばかなこと言ってたんだよ。お前だろ？桃子ちゃんと二人になりたいのは。俺はどっちでもいいんだよ」

「じゃ、4人で行動しますか？」

俺はそう提案した。この4人で行動するのは、今までなかったしな。

俺も久しぶりに、菜摘ちゃんに会えたんだし…。

「制服、やっぱり可愛いよね」

エプロンを外して、ボレロつてのを上から着た、桃子ちゃんは可愛かった。

「鼻の下、のびてるよ〜」

菜摘ちゃんに言われた。

「え?! って、からかうなよな」

俺は、焦って、菜摘ちゃんの頭を軽くこついた。

そのあとも、何度も、菜摘ちゃんは俺と桃子ちゃんのことをからかった。そのたびに、なんだよって、俺は笑いながら、菜摘ちゃんのことを軽く、こついていた。

それを見ていた桃子ちゃんが、

「なんだか、杏樹ちゃんという時みたい」

ってぽつりと言った。

「え?」

「あ、ごめん」

「いいよ、桃子。だって、私と聖君も、兄妹だもんね? あ、そうだ。私、聖君のことこれから、お兄ちゃんって呼ぼうかな?」

「え?」

「それとも、兄貴って呼ぶほうがいい? どっちがいい?」

菜摘ちゃんは、俺に聞いてきた。笑顔で元気に聞いてきたけど、どっかで無理をしている感じもした。

「そうだな。菜摘ちゃんが呼びやすいほうでいいよ」

頑張って、大丈夫なふりをしているのかもしれない。だけど、その演技に俺も、のることにした。

「私のキャラからいって、兄貴の方がぴったりくるよね。兄貴って呼ぶよ!」

また、笑顔で菜摘ちゃんは、言った。

「お、おう」

俺は、なんて答えていいかわからず、そんなふうに戻事をした。

「じゃ、兄貴。ここからは別行動ね。私ね、葉くんと今、付き合ってるの。だから、二人で行動したいな」

「あ、うん。いいよ」

俺がそう言っていると、菜摘ちゃんは、葉一と腕を組んで、

「じゃあね」

と、明るく手を振った。

俺と、桃子ちゃんは、そこから、二人で行動をすることにした。

「菜摘、無理してたのかな」

「桃子ちゃんも、そう思った?」

「うん」

「俺も、そう思ったけどさ。でも、葉一がついてるから、大丈夫だよ、うん」

しばらく二人で、雑踏の中を歩いた。

「人、多いし、迷子にならないよう手、つないどく?」

俺がそう言っていると、

「でも、友達もいるし…」

と、桃子ちゃんは恥ずかしそうに言った。

「そっか。そうだよな」

「聖君の学校は、文化祭は?」

「あるよ。11月の後半に。でも、そんなに楽しいもんじゃないよ。けっこう、馬鹿ばかりやってるしさ」

「菜摘と蘭と、行きたいねって言ってたんだ」

「え?!」

「あ、駄目かな？」

「いや、その…。だからさ、そんなに楽しいものでもないし」
「そうなの？」

「クラスの出し物もないよ。俺らのクラス、やけにやる気のないやつが集まってるし。俺、部活もしてないし。ただ…」

「ただ？」

「ちよつと、体育館で、出し物する程度」

「え？何をするの？」

「すげえ下手くそだから」

「…何？」

「俺、バンド組んでて、演奏する予定」

「え？！」

「軽音に入ってる友達がいて、よく一緒にカラオケにいつて、歌うたったりしてて。去年も頼まれたんだけど。俺、文化祭だけ、借り出されるんだよね」

「何の楽器？」

「ああ、俺はボーカル」

「歌うの？！聞きたい！！！！」

「駄目！絶対、駄目！」

「なんで？聞きたいし、見たいよ。そのバンドには、葉君と、基樹君いないの？」

「いないよ。俺だけが、飛び入り参加、みたいな感じ」

「見たいな〜」

桃子ちゃんにしつこく言われて、俺は観念した。

「わかったよ。みんなで、来る？」

「うん！」

桃子ちゃんは、すごく嬉しそうだった。

「でも、あまり期待しないで。下手だから。あと…」

「うん？」

「多分、桃子ちゃんと一緒にいる時の俺と、かなり違うから、びっくりしないだね」

「え？」

「俺、学校では、なんていうか、硬派でおつて…。彼女もいないって思われてる」

「え？そうなの？」

「あ、最近江ノ島を、桃子ちゃんと歩いてるところ、クラスのやつに見られたみたいで、彼女が実は、いるみたいだって、影でうわさになってるらしい」

「ええ？そうなの？」

「うん」

「聖君、学校で絶対にもてるって思ってたんだけどな」

「もてないよ。女の子、寄って来ないもん。男とばかり、いつもバカやってるから」

「そうなの？」

「うん」

「そうなんだ。ちょっとほっとしたな」

「え？」

「だって、聖君は、共学でしょ？女の子周りにいるから、もてるだろうし…。なんか、心配で」

「え？浮気？心配してた？」

「う、浮気って言うか…」

「あはは…。それを言うなら、桃子ちゃんだって。今日の格好はまじ、やばかったって。他の男子、桃子ちゃんにでれでれになっただし」

「まさか…！からかったただだよ、みんな」

「自分で気づいてないの？桃子ちゃん、すげ〜可愛くて、みんな釘

付け状態だったじゃんか」

「え〜？また、そうやって冗談ばかり言う」

「冗談じゃないって」

「いいよ〜。それに…」

「うん？」

「他の人にもてたとしても、あんまり関係ないし」

「……。それ、俺がいるからいいってこと？」

「うん…」

こくつて赤くなつて、桃子ちゃんはうなづいた。可愛い。俺も、きつと、赤くなつてた。

なんかな〜。もしここに、父さんがいたら、絶対にからかったり、ひやかしたりしているんだろうな〜。

俺らは、いろいろと教室を回つて、焼きそばを食べたり、ジュースを飲んだり、占いしてもらったり、歌を聴きたいりして、1日を過ごした。途中で、他のやつらに会うかも思ったけど、会わなかった。

文化祭の終わる時間になって、俺は校門で桃子ちゃんと別れた。

桃子ちゃんのすぐそばに、クラスメイトがいたらしく、俺が、桃子ちゃんに別れを告げて、立ち去ろうとしたら、後ろから、

「きや〜。あれ、桃子の彼？かっこいいじゃん！」

つて、でっかい声がした。振り返る勇気もなく、俺はそのまますすぐと駅に向かって歩いた。

なんていうか、女子のパワー、こえ〜。

うちの学校の女子もそうだけど、女子高はさらにパワーを2倍か、3倍にした感じで、よくあの中であの、大人しい桃子ちゃんがやっていてるよなつて、少し俺は感心しながら家に帰った。

12 きつとずっと

家に帰り、夜、店の片付けの手伝いをしながら、母さんと話をした。

「今日、菜摘ちゃんと会ったよ」

「元気だった？」

「うん。すげえ元気。でも、ちょっと無理してるようだった」

「そう…」

「うん。これからは俺のこと、兄貴って呼ぶって言うてた」

「そうなんだ」

「でもさ、葉一がそばにいるから、大丈夫になって」

「葉一君が？」

「うん。付き合ってるんだって」

「あら、そうなの？」

「あいつは、俺よりずっと大人で、優しいから、菜摘ちゃんもきつと、あいつがそばにいたら、大丈夫だよな」

「うん、そうね」

「……。これで、良かったんだよな」

「え？」

「全部、必要で起きてるってことだよな」

「うん。そう思うよ」

「うん。サンキュ。母さんにもいろいろと心配かけたけど、俺はもう大丈夫だから」

「そう？前に進めた感じ？」

「うん」

「そうね、桃子ちゃんもついててくれてるしね。でも、本当に杏樹も言ってたけど、可愛いわよね。今度一緒に買い物に行きたいわ。」

洋服とか、ふわふわした女の子らしいの、似合いそうじゃない？」

「うん、似合うかもな」

母さんは、宙を観ながら、目を輝かせた。

「いいわよね〜。ほら、杏樹ってどっちかっていうと、男の子っぽくて、そんな服ばかりで、小学校の頃から、スカートもはかないし、洋服買う楽しみもなくて。もっと、ふわふわしてて、かわいらしい服を、着せたかったのに」

「ああ、そう」

って、俺にはよくわかんないけどさ、そういうの。でもそういえば、杏樹、俺のお下がりとか、小学校の頃は着てたっけ。

「桃子ちゃんは、似合いそうだね。一緒に洋服買いに行きたいって、言ってくれない？」

「嫌だ」

「え？どうして〜？」

「母さん、あれこれ桃子ちゃんて、遊びそうだし」

「遊ぶ？」

「うん、桃子ちゃんのことだから、絶対に断れないだろうし」

「そ、そうねえ。」

「だから、駄目」

「わかったわよ〜」

母さんはそう言つと、黙って、仕事をし始めた。

それにしても、油断もすきもないっていうか…。まあ、母さんと桃子ちゃんが仲がよくなるのは、悪いことじゃないけどさ。

翌朝、目が覚めて、窓を開けると、すげえ快晴！もろ、秋晴れっていう天気だ。

全国的に、その日は祝日。俺は店の手伝いをしてから、父さんと海に散歩に行くことにした。

海を眺めながら、父さんは、いろんな海の話をし始めた。俺は小

さい頃から、その話を聞くのが好きだった。いつも、わくわくしながら聞いていた。

父さんの仕事部屋は、青くって、海の中にいるみたいだった。海の写真や、鯨や、いるかの写真が貼ってあって、たくさんの海のDVDもある。

父さんの仕事部屋が好きで、俺はよく入りこんで、父さんと海のDVDを観た。

そのDVDを観ながら、いろんな海の話をしてくれたっけ。だから、俺、ものすごく海に惹かれたんだ。

海、でかいな。穏やかな海も、波が荒い海も、どんな表情の海も俺は好きだ。

これから、父さんと、いろんな国に行って、いろんな海を潜りたいな。そんな話も、なんとなく父さんとした。

その時には、絶対、くるみも連れていくって父さんは、言った。

「はいはい、仲のいい夫婦だもんね」

「お前も、好きな子を連れて行ったらいいじゃんか」

父さんに言われた。

「え？桃子ちゃん？」

「うん」

「……」

俺は多分、真っ赤になっただと思う。

「そんな、先のことはわかんないよ」

「でも、好きなんだろ？」

「うん」

「ま、いつか、一緒に行くことになるかもな」

「父さんは、母さんのこと、可愛いつて思ったことある？7つも上じゃそうそう思わないか」

「え？思うよ！7つも年が上なのに、こんな可愛いところもあるの？ってそのギャップがいいんじゃない」

「あ、そう」

いきなり、のろけかよ。

「お前も、桃子ちゃんが可愛いって思うことあるの？」

「え？」

あるも何も、可愛いと思ってばかりだ。でも、父さんには、恥ずかしくて言えなくて、つい、

「いいじゃん。俺のことは」

ってごまかした。

「何それ？俺には聞いというて、ずるいんじゃないの？」
「いいんだよ」

「あはは。お前って、けっこうシャイだね」

「うっさいよ」

俺は、また小声で言った。

「くるみのことは、そうだね」。可愛いとも思うし、綺麗だとも思うし、優しいとも思うし、愛しいとも思うし」

「ふん」

「たまに、たくましいとも思うし、強いとも思うし。前は虚勢張って生きてたって。強がって生きてたって言ってたけど、今は、まじで強いよなって思うんだよね」

「強い？」

「お前と杏樹、産んでからかな。母は強しだよ」

「へえ。そういえば、いつも優しいけど、たまに男っぽいところもあるもんね」

「うん。それだ、それ。男っぽい」

「父さんの方が、逆に女性っぽいときあるもんね」

「え?!」

「あ、女々しいってことじゃないよ。こう、優しいっていうか、穏やかかっていうか…。あんまり怒んないし、感情の起伏もないほうでしょ?」

「そうだな。切れるとけっこう怖くなるけど、あまり、切れることがないかな。いつも、すごく幸せだしね」

「ふうん」

「海、今日も綺麗だよな…」

父さんはそう言つと、立ち上がり、大きく伸びをした。

「父さんは、母さんと結婚して良かったって思う?」

「思ってるよ。後悔もしたことない」

父さんは海を見ながら、そう答えた。

「じゃ、俺が子供になつて、良かったって思ってる?」

父さんは振り返つて、

「え?何回言わせるの、それ」

つて、ちよつと呆れ気味に言つた。

「そつか…」

「そつだよ」

「じゃ、生まれてきて良かったつて、思ってる?」

「思ってるよ」。生まれなかつたら良かったなんて、1度も思つたことないから、俺」

「そうなんだ」

「生まれなければ、くるみには会えなかつたし、お前の父親になることもなかつたし」

「うん」

「それに、こんな綺麗な風景も見れなかつた」

そう言つと、父さんはまた、海を眺めてから、俺の横に座つた。

「桃子ちゃんってさ、お前のことすごい好きみたいだね」

「え?!」

いきなりそんなことを言われて、俺は仰天した。

「観てたらわかるよ。桃子ちゃんは、お前に出会えたことも、お前がこの世に誕生したことも絶対、喜んでるし、生まれて良かったって、思ってるよね」

「そ…かな」

俺は照れくさくて、「うん」とは言えなかった。

「人って、すごいよな。みんなつながりあってる。俺がいなかったら、ここにお前もいなかったかもしれないし、そうしたら、桃子ちゃんはお前に出会えてなかったしね」

「うん」

「だから、もう断然思うね。俺、生まれてきて良かったって。いろんな人に影響与えてる。俺一人の存在がいるかいなかで、世界が180度変わる人が、いるんだからさ」

「そうだよな。俺も、そうだよな」

「そうだよ。お前っていう存在がいなかったら、俺やくるみの幸せは半減してたかもよ?」

「血とか、関係ないんだよね」

「え?」

「自分の血のつながった子だからとか、そんなの関係なく、俺の存在を父さんは、大事に思ってくれたんでしょ?」

「ああ、そうだよ」

「存在か…」

「どの存在も、かけがえのない存在なんだ。みんな天使だ。うん」
「天使?」

「そ。お前も、俺も、くるみも、杏樹も」

「俺、性格悪いよ？とても聖なんて名前負けしてるって、思うことある」

「あははは！そうなの？性格悪いの？どこが？どんなふうに？」

「え？」

「よくわかんないや。お前の言う、性格の悪いお前」

「ちえ。まじめに話しているのにな…」

「ま、いいや。お前が自分のこと、性格が悪くて、聖って名前負けしてるって思ってる」

「え？いいわけ？」

「でも、そんな性格の悪いお前でも、俺やくるみは愛しちゃってるの。わかる？」

「と、父さんはちよつと得意げ…」

「わっかんね…」

「なんか、平気で愛してるとか言うから、照れくさくて、わざとそう言ってみた。」

「だってさ、どんな性格だろうと、どんな聖だろうと、聖って存在には変わらないわけだから」

「……」

「だろ？」

「うん」

「お前やつぱり、素直！可愛いやつ！」

そう言って、父さんは俺の髪をぐしゃぐしゃにした。

「ちよ…！そういうのやめてって言ってるじゃん。俺のこと、いくつだと思ってるんだよ？」

「いいじゃん…」

ほんとに、この親は…。母さんといい、俺のこと子供扱いしすぎ。

「可愛くて、いじらしくて、しょうがないの。わかる？」

「わっかんね…、あ…」

それって、俺がいつも、桃子ちゃんのことを思ってる感じ？

「どうした？」

「いや…」

そっか。

「なんか、わかるかもって思ってた」

「え？」

「なんでもない…」

恥ずかしいからそのことは、父さんには言わなかった。

「父さん、あれ」

「え？」

「自叙伝、母さんに見せたら駄目？」

「ああ、あれね、絶対駄目」

「なんで？ いいじゃん。母さん喜ぶよ」

「いいの、あれはお前にあてたものだから」

「じゃ、杏樹に見せちゃ駄目かな？ 今じゃないけど。杏樹も誰かを好きになったら、けっこう役に立つと思うんだよね」

「杏樹には、また別に書いてあるから」

「え？ そうなの？！」

「杏樹が高校生くらいになったら、見せようかなって思ってるよ」

「そうなんだ。あ、じゃ、もしかして母さんにも書いてある…」とか？」

「いえ……す」

って、また得意げ…。

「ああ、そんなんすか」

なんだ。そういうことか。

「くるみには、そうだな」。お前と、杏樹が結婚して、家を出てって、二人になったら、見せるとするかな」

「は？そんな先？」

「うん。そんな先。でも、あつという間のような気もするよ」

「でも、俺らが家を出るかどつかは、わかんないじゃん」

「あはは、そつか。それもそうだな〜」

父さんは、そう言っつて、海を見ながらしばらく笑つていた。嬉し
そうに幸せそうに。そして、

「あ〜あ。やっぱり、くるみは、天使だつたな〜」
つてつぶやいた。

父さんと母さんの、物語を読んで、思つたこと。人を愛するつて、
すげえ…。愛つてすげえ…。

俺も、いつも、愛することを忘れない、そんな人生を送るんだ。
そして俺の子にも、そのことを伝えていくんだろつな。そうし
たら、俺の子もまた、自分の子供に。

きつと、じいちゃんが父さんに愛することを伝えたから、父さん
は俺にも、伝えてくれたんだ。

そう考えたら、じいちゃん、すげえ、ばあちゃん、すげえつて思
つてしまつた。

それを父さんに言つたら、

「父さんの、父さん、つまり俺のじいちゃんも、父さんのことをす
ごく愛してたんだよ。父さんが癌だつてわかつた時、きつと、父さ
んのことをおつきな愛でちゃんと、包んでくれたんじゃないかな。
だから、父さんから始まつたことじゃないんだ。ずつと、ずつと、
この愛するつてことは、親から子へ、受け継がれてたんだ。ただ、
気づくかどうか、それだけだよ。多分ね」

父さんは、そんなことを言つた。

「その逆もだよ」

「え？」

「子供は、親を無条件で愛してるんだ。俺も父さんや、母さんのことが、無条件で好きだよ。そりゃ、尊敬できる親だって思うけど、でも、自分を産んでくれた、それだけでも愛する存在でしょ？」

「そうだね。母さんのこと、俺もそう思う」

「うん。いつだっけな〜。母さん、あ、お前のばあちゃんが言っていた。子供は、親を選んで生まれてくるって」

「え？じゃ、俺も？」

「うん」

「そっか…」

「うん、お前は俺らに、たくさんの愛を教えてくれるために、生まれたんだと思うよ」

「愛？」

「こっばずかしい会話だけど、なんだかその時には、俺は真剣になつて聞いていた。」

「そ。だから、俺もくるみも、お前が生まれたこと、感謝してるってわけ。わかる？」

「母さんが、生まれてきてくれてありがとつて、よく言ってたけど…。そういうこと？」

「そういうこと！」

「そういうこと、俺も自分の子供にできるかな」

「はは…。できるさ。その前に、無条件で愛せちゃうような人に出逢えたらいいな」

「無条件で？」

「うん。俺がお前がどんなでも、愛しちゃってるよってやつよ」
「……」

俺が何も言わないと、父さんはまた、俺に向かって、
「存在、まるごと、愛しちゃってるよってやつ」

って、言った。

「父さんは、母さんのこと、そう思ってた？」

「思ってたから、結婚した。俺の父さんと、母さんもだ。お互い、無条件で愛し合ってたと思うよ」

「すごいね、それ。そんな人と出逢うのかな？俺も」

「多分ね」

「それって、どんななんだろう」

「うーん。俺がお前を思うみたいな感じ？何やっても可愛いし、いじらしいし、愛しいし」

「げ、きもっ！」

「なんだよ、わかりやすいように、説明してるんだろが！」

「そうだけど、父さんにそういうこと言われてもさ……」

「素直じゃないね、素直に喜べよ」

「素直じゃないところも、愛しちゃってるってわけか」

「ああ、まあ、そうだけどねっ」

「そうか。それって……」

「桃子ちゃん」

「ぼつりと思わず、俺はそうつぶやいてた。」

「え？」

「いや、なんでもない」

「俺、そんなふうにいるな、そういえば……。あれ？じゃ、もしかして？もしかする？」

「まあ、いいや。これから先のことは、わからない。」

「でも、今は、今を生きたらいいのになって気もする。そして、きつと、ずつと、この「愛」は受け継がれていく。」

「俺が愛する人と、そして子供たちに……。きつと、ずつと、永遠に。」「か……！海ってでかいな……。すげえ、綺麗だよ……。生まれできて、ほんと良かったよ。父さん」

いきなり、父さんが海に向かって叫んだ。

「は？」

「俺が、1歳の時に、俺のこと海に連れてきてくれて、父さんが言った言葉」

「え？覚えてるの？」

「うん。なんかね、覚えてるんだよね。その時の海も、その時の、父さんや母さんの優しい瞳とか」

「そうなんだ」

そりゃあ、すげえ。

「この世界って、すばらしいだろ？父さんが言ってたな」

「うん、俺もそう思うや」

そう言つと、にこって父さんは隣で、笑った。

これから、何か大変なことが起きたとしても、それでも、やつぱり、この世界は素晴らしいって俺は思っていくような気がするよ。

俺の話は、ここでおしまい。いや、俺の人生はまだまだ続くけどさ。

これから、結婚して、家庭を持ったり、仕事したり、海潜りに行ったりして、これから先も楽しく生きていくと思うよ。

だけど、俺のショッキングなことが、すごく素敵なことを引き起こしてくれたって話は、ここでおしまい。

やつぱりさ、必然、起こるようになってるんだね。それも、俺らが、みんな、幸せになるように、なっているんだ。

桃子ちゃんとは、俺は相変わらず、ラブラブ。

それに、菜摘ちゃんとも、めっちゃ仲いい兄妹でいるよ。俺も菜摘ちゃんちにたまに行く。そうすると、血のつながった父さん（これ、他に言い方ないかな？）が、嬉しそうに俺を出迎えてくれる。あ、もちろん、菜摘ちゃんのお母さんも。

菜摘ちゃんと、葉一は、けっこう仲がいい。時々、6人で会う。トリプルデートってやつ。

学校では、相変わらず俺や、基樹は、硬派で通ってる。でも、すごく可愛い彼女がいると、みんなが知ってる。

うん。文化祭にね、桃子ちゃんが来て、俺の彼女だってばれたから、みんな知っちゃったんだよね。まあ、いつか。

俺の、硬派な姿を桃子ちゃんは見ちゃったわけだけど、そんな俺も、めちゃくちゃかつこよかったらしい。歌も、めちゃくちゃうまいと褒められた。

でも、俺は相変わらず、桃子ちゃんの前では、めろめろ。顔文字だらけのメールを相変わらず、送っている。

そうそう、暇な時に、父さんにもメールを送ってみた。

>用はないけど、夕焼け綺麗だから、写メ送るよ。

って。ほんと、桃子ちゃんに送るために撮った写真を、ついでに送っただけ。

その日の夜、家に帰ると、父さんにいきなり抱きつかれた。そして髪をぐしゃぐしゃにされた。あゝ。面白いよね、うちの父さんって…。

蘭ちゃんと基樹、このカップルはなかなか、激しい。すごい喧嘩をたまにして、もう別れるってなる時がある。でも、ほつとしても、2〜3日後には、ラブラブになってる。ほんと、1番人騒がせなカップルだよ。

母さんは…。とうとう桃子ちゃんを買い物に、連れ出してしまった。そして、ひらひらの可愛い洋服をプレゼントしたらしい。あゝあ。やっちゃった。

次のデートで、桃子ちゃんがそれを着てきた。超可愛かった。だから、俺は心の中で、「やったね、母さん！」って喜んだ。あゝ

あ。結局俺も、そんなもんだよ。

だけど、桃子ちゃんも、母さんにプレゼントされたって、すごく嬉しそうだった。そんな桃子ちゃんも、超可愛いよね。

そうそう。最近、我が家は家族が増えた。杏樹が、捨て犬を拾ってきたんだ。真っ黒で、目がまん丸で…。名前は「クロ」。俺が、8歳のとき、死んじゃった犬の名前。真っ黒だから、また、「クロ」って名づけた。

目がまん丸で、うるんで、もう、桃子ちゃんそっくり！本当は、俺、「桃ちゃん」って名前をつけたかったほどだ。でも、母さんに、まぎわらしいからその名前はやめてねって言われた。

え？そんな理由？でも、母さんもクロのまん丸の目を見るたびに、「ほんと、桃子ちゃんに似ているわ。もし、名前が桃ちゃんだったら、桃子ちゃんに話しかけてるって錯覚しちゃうところだよ」って言うてるよ。

ああ、そういえば、もうクリスマスイブじゃん。俺の誕生日じゃん。

最近、俺、名前負けしてるって思わなくなった。「性格悪っ」て自分のことを思っても、ま、いつか。そんな俺でも。神様は、そんな俺でも愛してくれてるね…。なんてさ、そんなふうに思ってたさ。

12月24日。クリスマスイブ。父さんや母さんは、誕生日プレゼントをくれる。

小学校5年の時に、友達からばらされて、サンタはこの世にいないことを知った。でも父さんは、

「はい。サンタさんからのプレゼント」

と言って、誕生日のプレゼント以外に、もう一つプレゼントをくれる。

「サンタはいないんだよ。そんなこと、俺もう知ってるよ」

って俺は、父さんに言っただけ、

「じゃ、父さんからのプレゼントってことでもいいや」
って言って、笑った。

今までのも、全部父さんがくれてたプレゼントなんだって、初めはがっかりしたけど、いつだっけか、父さんに感謝した。

「クリスマスプレゼントと、誕生日プレゼントが一緒って、なんか悲しいじゃん。もし俺がいつしよくたにされてたら、悲しいもんな」
父さんは、そう俺に言った。母さんは、

「それ、聖を妊娠したってわかった時から、言ってるよね〜」
って、父さんの隣で、笑ってた。

そんな父さんも、いじらしいじゃん。って思ったりするけど、そんなことは絶対に父さんには言わない。

明日のクリスマスは、桃子ちゃんと二人っきりで過ごす。プレゼントも買ってある。

俺はプレゼントを眺めながら、つい、にやけてしまう。明日、桃子ちゃん、どんな顔をするのかな。

今日も最高の日だった。そして、きっと明日も…。

これからずっと…。きっとずっと、最高の日だね。

〜おわり〜

12 きつとずっと(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3967i/>

かけがえのない存在だから

2011年7月9日03時28分発行